別紙様式５－１

編　修　趣　意　書

（教育基本法との対照表）

※受理番号	学　校	教　科	種　目	学　年
107 － 194	高　等　学　校	国　語	論　理　国　語	

※発行者の番号・略称	※教科書の記号・番号	※　教　科　書　名

１．編修の基本方針

●　教科書の理念

この教科書は、「教育基本法」「学校教育法」の規定や理念を踏まえ、特に以下の点に留意して編修しました。

①豊かな人間性・創造性を身につけさせる。
②平和で民主的な国家及び社会の形成者たる人物を育成する。
③社会において果たさなければならない使命を自覚させる。
④それぞれの個性に応じた進路を決定するのに必要な一般的な教養を高める。
⑤社会について、広く深い理解と健全な批判力を養う。
⑥社会の発展に寄与する態度を養う。

●　教材の選定と配列

教育基本法第２条の１～５号に示された教育の目標を達成するために必要な教材を精選して掲載しました。教材の選定と配列にあたっては、次のような点に意を用いました。

①実社会に必要な国語の知識や技能を身につけることができるように幅広い題材から教材を選定しました。
②論理的思考力を身につけるとともに、さまざまな観点から物事を捉えたり対象化したりすることで、周囲や社会について健全な批評力を養うことのできる教材を選定しました。
③適切にことばや文章を用いて表現することのできる力を養い、他者と深く、また幅広いコミュニケーションをはかる意欲を喚起する教材を選定しました。
④幅広いテーマを取り上げることで、深い知識と教養を身につけ、生涯にわたって主体的・対話的で深い学びへと導かれるよう意を払いました。
⑤教材がたがいに有機的に繋がり、学習が進むにつれ、国語の資質および能力が的確に身についていくことを意識して教材を配列しました。
⑥「思考力・判断力・表現力」の２領域のうち、「書くこと」については３単元、「読むこと」については１４単元を配置し、また言語活動例として「実践」を適宜設け、効果的に言語能力を高めることができるよう配列しました。

●　学習を支える工夫

各単元および教材を通じて、高校生の資質・能力を高め、主体的・対話的で深い学びへと導くために、次のような点に意を払いました。

①単元の目標:第一部･第二部の冒頭に、それぞれの単元を通じて身につけたい資質･能力を端的に示しました。また、「書くこと」「読むこと」の２領域の、どの領域をのばす単元であるかを明示しました。
②視点：教材の冒頭に、身につけたい資質・能力について、教材の着目すべき点を掲げました。
③学習：教材の末尾に「課題」「構成」「読解」「言語活動」「キーワード」「重要漢字」を設け、資質・能力を身につけるにあたって、教材のどのような点を活用することができるかを明示しました。
④実践：言語能力を高め、主体的・対話的で深い学びへと導く具体的な言語活動を適宜示しました。
⑤学習に役立つデジタル・コンテンツを適宜用意いたしました。

２．対照表

図書の構成・内容と教育基本法第二条第一号から第五号との対応を下記に示します。

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
第一部		
1）架橋することば 《読む》 ・未来をつくる言葉（ドミニク・チェン） ・物語るという欲望（内田樹） ・科学の詩学へ（石井美保）	「未来をつくる言葉」や「物語るという欲望」および「科学の詩学へ」を通して、人と世界を結ぶことばの働きを理解して、幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うようにしました。（第１号）	p12 ～ 35
2）日常を見直す 《読む》 ・地図の想像力（若林幹夫） ・本当は怖い前提の話（川添　愛） ・「象徴的貧困」に立ち向かうために（石田英敬）	「地図の想像力」では地図、「本当は怖い『前提』の話」では話の「前提」、「「象徴的貧困」に立ち向かうために」ではメディアのコンテンツと、生徒たちの身近な日常から、物事を分析し、正義と責任、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うようにしました。（第３号）	p36 ～ 59
3）枠組みを問う 《読む》 ・一〇〇パーセントは正しくない科学（更科　功） ・近代の成立――遠近法（橋爪大三郎） ・カイロモン（三浦哲哉）	「一〇〇パーセントは正しくない科学」、「近代の成立――遠近法」「カイロモン」を通じて、偏見や先入観にとらわれずに物事を見ることを学び、幅広い知識と教養を身につけ、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うようにしました。（第１号）	p60 ～ 85
実践①　多様な文章に触れよう――法令文・新聞記事《読む》	法令文や新聞記事をもとに多様な文章に触れ、正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うことができるようにしました。（第３号）	p84
4）個に向き合う 《読む》 ・迷惑でいびつな生命（中屋敷均） ・沖縄戦を聞く（岸　政彦） ・変貌する聖女（川島慶子）	「迷惑でいびつな生命」「沖縄戦を聞く」「変貌する聖女」を通して、社会が抱える様々な問題を人々に訴える評論文の力を読み取り、正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うことができるようにしました。（第３号）	p86 ～ 109
5）関係を読む 《読む》 ・男の絆、女たちの沈黙（尹　雄大） ・現代日本の開化（夏目漱石） ・物語について（濱口竜介） ・羅針盤①比べて読もう　夏目漱石「こころ」に描かれた近代	「男の絆、女たちの沈黙」「現代日本の開化」「物語について」を通して、人々の関係によって生まれるさまざまな問題を捉えた評論から、正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うことができるようにしました。（第３号）	p110 ～ p135

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
6）世界を視る位置 《読む》 ・ファンタジー・ワールドの誕生（今福龍太） ・生物の作る環境（日高敏隆） ・貧困は自己責任なのか（湯浅誠）	「ファンタジー・ワールドの誕生」「生物の作る環境」「貧困は自己責任なんか」を通して、多面的な視点から物事をとらえることを学び、生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと、また、正義と責任、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うことができるようにしました。（第３号、第４号）	p136 ～ 157
7）現代という課題 《書く》 ・ポピュリズムとは何か（森本あんり） ・トリアージ社会（船木　亨） ・権力とは何か（杉田　敦）	「ポピュリズムとは何か」「トリアージ社会」「権力とは何か」を通して、現代が抱くさまざまな課題を理解することで、幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うことができるようにしました。（第１号、第３号）	p158 ～ 180
実践②　レポートを書こう 《書く》	レポートの書き方を学ぶことを通して、個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うことができるようにしました。（第２号）	p181
8）〈私〉をひらくために 《読む》 ・子どもの言語習得　（今井むつみ・秋田喜美） ・ファッションの現象学（河野哲也） ・日本の社会は農業社会か（網野善彦）	「子どもの言語習得」「ファッションの現象学」「日本の社会は農業社会か」を通して、自己の経験から広い視野へと導いていく評論の力を学び、個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うことができるようにしました。（第２号）	p１８４　～ 208
実践③　資料や情報を吟味して、自分の考えにつなげよう 《読む》 《参考》数字化される世界（オリヴィエ・レイ／池畑奈央子）	データなど資料や情報を吟味して思考を深める実践を通して、正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うことができるようにしました。（第３号）	p209 ～ 215
9）未来を築く 《読む》 ・資源はなぜ枯渇するのか（細田衛士） ・ビッグデータ時代の生の技法（柴田邦臣） ・「である」ことと「する」こと（丸山眞男）	「資源はなぜ枯渇するのか」「ビッグデータ時代の生の技法」「「である」ことと「する」こと」を通して　生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと、また正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うことができるようにしました。（第３号、第４号）	p216 ～ 244

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
第二部		
１）多様性のほうへ 《読む》 ・「自然を守る」ということ （森岡正博） ・物語としての自己（野口裕二） ・羅針盤③　比べて読もう森鷗外「舞姫」が語る自己 ・虚ろなまなざし（岡真理）	「『自然を守る』ということ」「物語としての自己」「虚ろなまなざし」を通して、社会の多様な価値観を学び、個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うことができるようにしました。また「『自然を守る』ということを通して環境問題の論点を学び、生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全の寄与する態度を養うこと。（第２号・第４号）	p248 ～ 271
実践④　複数の文章を読み比べてみよう 《読む》	複数の文章を読み比べる手法を学ぶことで、幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うことができるようにしました。（第１号）	272
２）語りと世界 《書く》 ・物語と歴史のあいだ（野家啓一） ・清光館哀史（柳田國男） ・自分自身を語るために（三木那由他）	「物語と歴史のあいだ」、「清光館哀史」、「自分自身を語るために」を通じて、正義と責任、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うことができるようにしました。また、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うことができるようにしました。（第３号、第５号）	p２７４　～ 300
実践④　自分の経験や考えを効果的に書いてみよう 《書く》	自己 PR 文の書き方を学ぶことを通して、個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うこととともに、職業および生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うことができるようにしました。（第２号）	p301 ～ 303
３）抽象から具象へ 《読む》 ・絵画は紙幣に憧れる（椹木野衣） ・真実の百面相（大森荘蔵） ・貨幣共同体（岩井克人）	「絵画は紙幣に憧れる」、「真実の百面相」「貨幣共同体」では客観的に捉えるということの難しさを学び、幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うようにしました。（第１号）	p304 ～ 327
４）響き合うことばと身体 《読む》 ・ピジンという生き方（管啓次郎） ・聞く者たちの文学、忘却に抗するための会話（瀬尾夏美） ・〈参考〉戦争は女の顔をしていない（スヴェトラーナ･アレクシエーヴィチ） ・模倣と「なぞり」（尼ヶ崎彬）	「ピジンという生き方」「聞く者たちの文学、忘却に抗うために」を通して、ことばの働きと役割を考え、幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うようにしました。また「模倣と「なぞり」」を通して、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うことができるようにしました。（第１号、第５号）	p328 ～ 355

図書の構成・内容	特に意を用いた点や特色	該当箇所
５）「当たり前」を疑う 《書く》 ・ラムネ氏のこと（坂口安吾） ・難民が問題になるとき（伊豫谷登士翁） ・思考の誕生（蓮實重彦）	「ラムネ氏のこと」「難民が問題になるとき」「思考の誕生」を通して、自分とは異なる他者の思考に耳を傾け、個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うことができるようにしました。（第２号）	p356 ～ 377
６）「近代」を再考する 《読む》 ・主義は広大なるべきこと（福沢諭吉） ・異時代人の目（若桑みどり） ・巫女の視点（大澤真幸）	「主義は広大なるべき事」を通して明治時代に書かれた文章を読み解き、また「異時代人の目」「巫女の視点」を通して伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うことができるようにしました。（第５号）	p378 ～ 397
７）記号がつくる世界 《読む》 ・ものとこと（木村敏） ・「病気」の向こう側（田中祐理子） ・過剰性と稀少性（佐伯啓思）	「ものとこと」「『病気』の向こう側」「過剰性と希少性」を通して抽象的な概念をことばで捉え、論じる手法を学び、幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うようにしました。（第１号）	p398 ～ 427
８）よみがえる問い 《読む》 ・記憶の満天（西谷修） ・戦争と平和についての観察（中井久夫）	「記憶の満天」「戦争と平和についての観察」を通して、ことばの根本的な意味を突き詰めて考え、幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うようにしました。また、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うことができるようにしました。（第１号・第５号）	p428 ～ 445
実践⑥　論文を読んで、これまで行われてきた研究をまとめよう 《書く》	論文の書き方を学ぶことで、幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うようにしました。（第１号）	p446

３．上記の記載事項以外に特に意を用いた点や特色

・「現代の国語」の学習内容の成果を発展拡充させて、「論理国語」でも豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養うために、教材および「実践」などの言語活動におけるテーマや内容　に意を用いました。（学校教育法第 51 条第一号）
・「実践」における言語活動および「読書案内」で紹介した書籍、「羅針盤」などのコラムを通して、社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な知識、技術及び技能を習得させることに意を払いました。（学校教育法第 51 条第二号）
・現代社会をテーマとする文章を扱い、また、複数の資料を比較して読むことにより、個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うようにしました。（学校教育法第 51 条第三号）
・教材にはユニバーサル・フォントを用いて、多くの人の読みやすい紙面づくりに配慮しました。

別紙様式 5-2

編　修　趣　意　書

（学習指導要領との対照表、配当授業時間数表）

※受理番号	学　校	教　科	種　目	学　年
107 － 194	高　等　学　校	国　語	論理国語	

※発行者の番号・略称	※教科書の記号・番号	※　教　科　書　名

１．編修上特に意を用いた点や特色

学習指導要領の総則および「論理国語」に掲げられた目標を効果的に達成するために、特に以下の点に留意して編集しました。

①育成したい資質・能力を明確化した単元構成　単元は、生徒に身につけさせたい「知識・技能」および「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性」をもとに構成しました。

「思考力・判断力・表現力」については、「書くこと」「読むこと」の、どの領域に関する言語能力を身につけたいかを分かりやすく示しました。

　また単元ごとに「単元の目標」を示し、生徒が各単元を通じて、どのような資質・能力を身につけることができるのか、見通しを立てたり、学習後の振り返りを行ったりすることができるようにしました。掲載した教材にはそれぞれ冒頭に「視点」を示し、各教材を通じて身につけたい「知識・技能」および「思考力・判断力・表現力」を意識的に学習できるようにしました。

②発達段階に応じた教材を厳選　生徒の心身の発達段階を十分に考慮して、「現代の国語」からの移行が円滑にできるよう、親しみやすい教材から、問題意識の鮮明な教材まで厳選して掲載しました。また、教材として適度な長さで、なおかつ奥行きのある文章を選りすぐりました。

③「主体的･対話的で深い学び」の実現を促す「実践」　言語活動例として適宜「実践」を示し､「主体的・対話的で　深い学び」を行うことができるようにしました。

④学習者の自学自習に便利な工夫　教材の理解を助けるために、脚問を付して、文脈を的確に捉えることができるようにしました。また手引きとして「学習」を設け、教材の内容や目的を正確に捉えることができるようにしました。各見開きに重要漢字・語句を、「学習」には「重要漢字」を付し、生徒の語彙を増やすことができるように工夫しました。

⑤読書指導の充実　「学びに向かう力、人間性」を支える工夫として、読書の意義を理解できるように適宜「読書案内」を設け、また教材ごとに、著者の主な著書を紹介しました。

⑥誌面の工夫　全体に見やすいレイアウトとなるよう配慮するとともに、学習の効率化と活性化を図るために多色刷りを用い、必要な図版や地図などを適宜カラーで掲載しました。また、多くの生徒の読みやすさに配慮して、ユニバーサル・デザイン・フォントを用いました。

⑦デジタル・コンテンツ　学習を深める手立ての一つとして、教材に関するインターネット上の情報を適宜示し、二次元コードを用いて、情報を示したウェブページを掲載しました。

2．対照表

図書の構成・内容		学習指導要領の内容		該当箇所	配当時間数
単元名	教材名	知識・技能	思考力・判断力・表現力		
第一部					
1）架橋することば 《読む》	・未来をつくる言葉（ドミニク・チェン） ・羅針盤①　比べて読もう　中島敦「山月記」が描く「わかりあえなさ」 ・物語るという欲望（内田樹） ・科学の詩学へ（石井美保）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ，ウ （3）ア	B　ア，イ，ウ，エ，オ，カ，キ	p12 ～35	5
2）日常を見直す 《読む》	・地図の想像力（若林幹夫） ・本当は怖い前提の話（川添　愛） ・「象徴的貧困」に立ち向かうために（石田英敬）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	B　ア，イ，ウ，エ，オ，カ，キ	p36 ～59	5
3）枠組みを問う 《読む》	・一〇〇パーセントは正しくない科学（更科功） ・近代の成立――遠近法（橋爪大三郎） ・カイロモン（三浦哲哉）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ，ウ （3）ア	A　ア，イ，ウ，エ，オ，カ	p60 ～85	7
実践① 《読む》	多様な文章に触れよう――法令文・新聞記事 〈参考〉憲法の力を生かすには（木村草太）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	B　ア，イ，ウ，エ，オ，カ，キ	p84	2
4）個に向き合う 《読む》	・迷惑でいびつな生命（中屋敷均） ・沖縄戦を聞く（岸　政彦） ・変貌する聖女（川島慶子）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	B　ア，イ，ウ，エ，オ，カ，キ	p86 ～109	6
5）関係を読む 《読む》	・男の絆、女たちの沈黙（尹　雄大） ・現代日本の開化（夏目漱石） ・物語について（濱口竜介） ・羅針盤②比べて読もう　夏目漱石「こころ」に描かれた近代	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	B　ア，イ，ウ，エ，オ，カ，キ	p110 ～ p135	6
6）世界を視る位置 《読む》	・ファンタジー・ワールドの誕生（今福龍太） ・生物の作る環境（日高敏隆） ・貧困は自己責任なのか（湯浅誠）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	B　ア，イ，ウ，エ，オ，カ，キ	p136 ～157	6

図書の構成・内容		学習指導要領の内容		該当箇所	配当時間数
単元名	教材名	知識・技能	思考力・判断力・表現力		
7）現代という課題 《書く》	・ポピュリズムとは何か（森本あんり） ・トリアージ社会（船木　亨） ・権力とは何か（杉田　敦）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	A　ア，イ，ウ，エ，オ，カ	p158 ～180	8
実践② 《書く》	レポートを書こう （コラム）生成ＡＩとの付き合い方	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ，ウ （3）ア	A　ア，イ，ウ，エ，オ，カ	p181	10
8）〈私〉をひらくために 《読む》	・子どもの言語習得　（今井むつみ・秋田喜美） ・ファッションの現象学（河野哲也） ・日本の社会は農業社会か（網野善彦）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ，ウ （3）ア	B　ア，イ，ウ，エ，オ，カ，キ	p１８４ ～208	6
実践③　《読む》	資料や情報を吟味して、自分の考えにつなげよう 《参考》数字化される世界（オリヴィエ・レイ／池畑奈央子） （コラム）データの読み方	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ，ウ （3）ア	B　ア，イ，ウ，エ，オ，カ，キ	p209 ～215	2
9）未来を築く 《読む》	・資源はなぜ枯渇するのか（細田衛士） ・ビッグデータ時代の生の技法　（柴田邦臣） ・「である」ことと「する」こと　（丸山眞男）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	B　ア，イ，ウ，エ，オ，カ，キ	p216 ～244	6
第二部					
１）多様性のほうへ 《読む》	・「自然を守る」ということ（森岡正博） ・物語としての自己（野口裕二） ・羅針盤③　比べて読もう森鷗外「舞姫」が語る自己 ・虚ろなまなざし（岡真理）	（1）ア，イ，ウ，エ （２）ア，イ （3）ア	B　ア，イ，ウ，エ，オ，カ，キ	p248 ～271	6

図書の構成・内容		学習指導要領の内容		該当箇所	配当時間数
単元名	教材名	知識・技能	思考力・判断力・表現力		
実践④ 《読む》	複数の文章を読み比べてみよう	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ， （3）ア	B ア，イ，ウ，エ，オ，カ，キ	272	1
2）語りと世界 《書く》	・物語と歴史のあいだ（野家啓一） ・清光館哀史（柳田國男） ・自分自身を語るために（三木那由他）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ， （3）ア	A ア，イ，ウ，エ，オ，カ	p274 ～ 300	10
実践④ 《書く》	自分の経験や考えを効果的に書いてみよう	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	A ア，イ，ウ，エ，オ，カ	p301 ～ 303	7
3）抽象から具象へ 《読む》	・絵画は紙幣に憧れる（椹木野衣） ・真実の百面相（大森荘蔵） ・貨幣共同体（岩井克人）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	B ア，イ，ウ，エ，カ	p304 ～ 327	6
4）響き合うことばと身体 《読む》	・ピジンという生き方（管啓次郎） ・聞く者たちの文学、忘却に抗するための会話（瀬尾夏美） 〈参考〉戦争は女の顔をしていない（スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ） ・模倣と「なぞり」（尼ヶ崎彬）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	B ア，イ，ウ，エ，オ，カ，キ	p328 ～ 355	6
5）「当たり前」を疑う 《読む》	・ラムネ氏のこと（坂口安吾） ・難民が問題になるとき（伊豫谷登士翁） ・思考の誕生（蓮實重彦）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	A ア，イ，ウ，エ，カ	p356 ～ 377	7
6）「近代」を再考する 《読む》	・主義は広大なるべきこと（福沢諭吉） ・異時代人の目（若桑みどり） ・巫女の視点（大澤真幸	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	B ア，イ，ウ，エ，オ，カ，キ	p378 ～ 397	6
7）記号がつくる世界 《読む》	・ものとこと（木村敏） ・「病気」の向こう側（田中祐理子） ・過剰性と稀少性（佐伯啓思）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	B ア，イ，ウ，エ，オ，カ，キ	p398 ～ 427	7
8）よみがえる問い 《書く》	・記憶の満天（西谷修） ・戦争と平和についての観察（中井久夫）	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	A ア，イ，ウ，エ，カ	p428 ～ 445	5

図書の構成・内容		学習指導要領の内容		該当箇所	配当時間数
実践⑥ 《書く》	論文を読んで、これまで行われてきた研究をまとめよう	（1）ア，イ，ウ，エ （2）ア，イ （3）ア	A　ア，イ，ウ，エ，オ，カ	p446	7

計　140

常用漢字以外の使用漢字一覧（数字は初出ページを示す。）

嚥	汲	歪	揃	叢	狷	惨	袁	李	噛	敦	枷	疇	吃	牽	溢	嗜	紐	些	悶
(23)	(21)	(20)	(19)	(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(18)	(17)	(16)	(16)	(15)	(15)	(13)	(13)	(12)	(12)
濡	烏	套	嵌	訊	摑	饒	繹	芙	智	逢	楠	漱	彦	寅	霏	橇	惹	礫	譚
(62)	(60)	(60)	(48)	(47)	(44)	(38)	(34)	(32)	(31)	(29)	(29)	(28)	(28)	(28)	(27)	(27)	(27)	(27)	(26)
尹	揄	揶	辿	琉	禄	壕	轟	焉	蒼	奄	繋	惚	恍	噪	喧	蠱	淘	哉	餐
(110)	(107)	(107)	(98)	(98)	(97)	(97)	(97)	(95)	(95)	(94)	(89)	(81)	(81)	(81)	(81)	(79)	(78)	(77)	(72)
孕	姑	騙	剝	濱	呻	陋	毫	譏	吾	俄	漕	埒	馴	絆	腑	舐	恰	詫	瞥
(130)	(128)	(127)	(127)	(127)	(125)	(124)	(124)	(124)	(121)	(121)	(121)	(113)	(112)	(112)	(112)	(111)	(111)	(110)	(110)
亨	蝕	纏	梃	忖	僭	蔓	碍	砦	溜	灌	藪	莫	拗	裳	垢	鰐	啜	國	漲
(165)	(163)	(160)	(160)	(159)	(159)	(159)	(159)	(156)	(154)	(146)	(146)	(141)	(140)	(138)	(138)	(138)	(135)	(134)	(131)
鳳	蠟	屏	襖	呑	艘	庵	廻	柴	烙	嶺	鷲	虔	佻	髷	也	癌	輔	敲	罹
(206)	(204)	(203)	(203)	(202)	(201)	(201)	(201)	(201)	(197)	(197)	(196)	(196)	(195)	(193)	(193)	(187)	(182)	(181)	(166)

瞑	蒙	之	靭	樽	卿	賤	臥	坐	謳	甥	弘	眞	迂	堡	萌	噌	儲	鍬	鋤	嘘
242	238	238	238	238	237	237	236	236	235	233	231	231	226	226	225	223	218	217	217	217

辻	糠	楕	懣	爺	湊	蝠	蝙	鑿	濾	甕	飴	灸	膾	蟹	禽	鷹	鷗	埃	晰	椹
283	283	283	282	282	281	281	281	278	275	275	275	274	274	268	265	264	262	250	246	245

云	枡	頗	萼	鱗	翠	翡	壺	膠	怯	裟	袈	暈	眩	讃	翳	囃	繍	嬥	筑	鮫
313	312	312	311	311	311	311	311	308	298	295	295	295	295	291	291	290	289	289	289	284

鮎	稀	摹	彬	囁	痍	嗚	峙	貰	訥	昌	閃	槌	膿	訛	聟	笠	劫	芥	薩	菩
356	351	348	348	347	346	345	342	341	341	340	340	337	337	333	330	331	322	316	314	314

實	蓮	斂	淵	豫	伊	綺	汝	撫	俤	茸	鯉	逗	嬬	爾	灘	斯	嬌	爛	絢	肴
372	372	370	366	364	364	361	361	361	359	359	359	359	358	358	357	357	357	357	357	356

叩	沌	輿	濤	稟	懦	畢	奸	忽	咎	遽	迚	跖	舜	堯	譬	齬	齟	遥	趨	彦
385	383	381	380	380	380	380	380	380	379	379	378	378	378	378	378	376	376	374	373	372

嬉 (440)
幟 (439)
弛 (438)
窪 (434)
轍 (434)
茫 (428)
只 (428)
侈 (423)
奢 (423)
贅 (423)
贄 (418)
鋏 (414)
疇 (409)
鞭 (408)
蕉 (403)
芭 (403)
蛙 (403)
讐 (390)
巫 (389)
翔 (385)
寓 (385)

哭 (447)
慟 (447)
牟 (447)
俣 (447)
玲 (447)
鵜 (445)
梢 (444)
煉 (443)
煽 (443)
冴 (443)
仇 (442)
篇 (442)
惣 (442)
泄 (440)

常用漢字表外の音訓一覧（数字は初出ページを示す。）

数多（あまた）（13）
術（すべ）（14）
容（い）（れる）（14）
摂（と）（り）（15）
設計（デザイン）（15）
融（と）（かす）（15）
信（のぶ）（15）
抗（あらが）（う）（16）
眼差し（まなざ）（16）
見出（い）（だす）（17）
羅針盤（コンパス）（18）
樹（たつる）（19）
弥（び）（22）
裸足（はだし）（24）
太（だ）（26）
宰（ざい）（26）
治（おさむ）（26）
美（み）（27）
谷（や）（27）
南（みな）（29）

理（ことわり）（28）
化物（ばけもの）（28）
二（じ）（29）
夫（お）（36）
括（くく）（り）（38）
神戸（こうべ）（39）
媒体（メディア）（40）
川添（かわぞえ）（43）
英（ひで）（51）
敬（たか）（51）
喩（たと）（え）（51）
持続可能（サスティナブル）（59）
御（み）（59）
近代（モダン）（59）
更科（さらしな）（60）
功（いさお）（60）
烏賊（いか）（60）
三（さぶ）（69）
眼（め）（69）
視（み）（る）（71）

物体（オブジェクト）（73）
主体（サブジェクト）（73）
主語（サブジェクト）（75）
目的語（オブジェクト）（75）
介（すけ）（80）
宗（むね）（80）
如（ごと）（き）（81）
敷（しき）（86）
均（ひとし）（86）
畝（せ）（86）
政（まさ）（93）
頭（がみ）（93）
山原（やんばる）（93）
小（お）（80）
雄大（ウンデ）（110）
苛立（いらだ）（って）（111）
均（なら）（し）（116）
麗（り）（121）
百済（くだら）（121）
新羅（しらぎ）（121）

食客（いそうろう）（122）
背（せな）（124）
起（た）（つ）（125）
坊ちゃん（ぼっ）（125）
和（かず）（127）
活（い）（き）（132）
位（ただし）（133）
知（とも）（133）
由（ゆき）（133）
男（お）（134）
廉（やす）（い）（139）
敏（とし）（145）
隆（たか）（145）
灯（あか）（り）（148）
雅（まさ）（152）
幸（ゆき）（152）
生（お）（152）
台詞（せりふ）（159）
虜（とりこ）（160）
垣間（かいま）（188）

河野（こうの）（193）
丁（ちょん）（193）
流行（はや）（って）（196）
一（かず）（196）
被（かぶ）（る）（198）
善（よし）（201）
頭振（あたまふり）（201）
生業（なりわい）（201）
能登（のと）（202）
門男（もうと）（202）
曽々木（そそぎ）（203）
水手（かこ）（203）
出羽（でわ）（203）
越後（えちご）（203）
若狭（わかさ）（203）
屏風（びょうぶ）（203）
酒々井（しすい）（203）
問屋（といや）（204）
問屋（とんや）（204）
司（つかさど）（った）（204）

博（ひろ） 206
鳳至（ふげし） 206
珠洲（すず） 206
宇出津（うしつ） 206
飯田（いいだ） 206
甲（かぶと） 206
鳳珠（ほうす） 206
素麺（そうめん） 207
畑（はた） 211
央（お） 211
入会地（いりあいち） 217
邦（くに） 223
臣（おみ） 223
厳（いず） 231
公卿（くげ） 237
貴き（たっと） 237
居（おり） 240
宣（のり） 240
虚（うつ）（ろ） 264
野家（のえ） 262
能（あた）（う） 274

秀（ひで） 274
還（かえ）（る） 281
九戸（くのへ） 281
洋（ひろ） 281
児（こ） 282
下駄（げた） 282
路（みち） 283
角浜（かどのはま） 283
三戸（さんのへ） 283
吹浦（ふくら） 284
象潟（きさかた） 284
丹（に） 284
久慈（くじ） 284
精霊（しょうりょう） 285
八戸（はちのへ） 285
新津（にいつ） 285
飽海（あくみ） 285
乾（ほ）（し） 287
燿歌（かがい） 289
会（つどひ） 289
為（せ）（し） 289

克（かつ） 308
荘（しょう） 311
紫陽花（あじさい） 311
奴（やっ） 312
斑（まだら） 313
観音（かんのん） 314
聖（しょう） 314
法華経（ほけきょう） 314
品（ぼん） 314
管（すが） 328
融（と）（けて） 328
原（わら） 331
名残（なご）（る） 333
億劫（おっくう） 337
逸（そ）（らし） 338
苛（さいな）（む） 342
嗚咽（おえつ） 345
鑑（かがみ） 348
生（いく） 350
勝（かつ） 350
使（つかい） 354

郎（ろ） 357
兵（べ） 357
衛（え） 357
枕（ちん） 358
甘（うま） 358
東御（とうみ） 358
切支丹（キリシタン） 360
伴天連（バテレン） 360
続（ごにちの） 360
基督（キリスト） 361
左衛門（ざえもん） 361
天（てんの） 361
天満（てんま） 361
染（そめ） 361
戯（げ） 362
翁（お） 364
重（しげ） 372
滅入（めい）（り） 373
止（とど）（ま） 378
仮令（たと）（ひ） 378
唯（た）（だ） 378

非（あら）（ざれ） 378
遂（つひ）（に） 378
猶（な）（ほ） 379
為（な）（し） 379
若（も）（しも） 379
然（しか）（らず） 379
況（いは）（んや） 379
於（お）（いて） 379
即（すなは）（ち） 379
此方（こなた） 379
勉（つと）（めて） 379
以（も）（って） 379
固（もと）（より） 379
漸（やうや）（く） 380
少（わか）（き） 380
輩（やから） 380
動（やや）（も） 380
忙（せは）（しく） 380
蓋（けだ）（し） 380
則（のり） 380
豊（とよ） 380

臣（とみ） 380
徒（いたづら）（に） 380
却（かへ）（つて） 380
等（ら） 380
曾（かつ）（て） 380
三（みつ） 380
成（なり） 380
則（すなは）（ち） 381
何（いづ）（れ） 381
違（たが）（ふ） 381
康（やす） 381
行（ゆき） 381
堕（お）（ちる） 385
旧（ふる）（い） 386
巫女（みこ） 389
新田（にった） 389
未（いま）（だ） 389
怒（ぬ） 389
見ること（テオリア） 400
慶尚南道（キョンサンナムド） 405
祐（ゆ） 407

伯（えき） 418
生贄（いけにえ） 418
修（おさむ） 428
赤穂（あこう） 442
陰画（ネガ） 442
吉良（きら） 442
央（なか） 442
樹（き） 444
有（ゆ） 447
水俣（みなまた） 447
礼（れ） 447

図 版 出 典 一 覧 表

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
前見返し一～二	システィーナ礼拝堂「最後の審判」	絵画						ユニフォトプレス提供
後ろ見返し四～五	パブロ・ピカソ「ゲルニカ」(1937年)	絵画						ソフィア王妃芸術センター所蔵 ／ユニフォトプレス提供 BAL_10313
9	中谷芙二子≪Dynamic Earth Series Ⅰ≫ 霧の彫刻 #47610 2021年	写真						長野県立美術館所蔵
16	ドミニク・チェン氏プロフィール	写真						自社所蔵
18	『山月記・名人伝ほか』表紙	写真						自社所蔵
19	イワン・モジューヒン	写真						ユニフォトプレス提供
25	内田樹氏プロフィール	写真						自社所蔵
32	石井美保氏プロフィール	写真						自社所蔵
36	T-O図(ブリティッシュ・ライブラリー所蔵)	絵画						自社所蔵
39	地下鉄の路線図(神戸市営地下鉄 2011年)	図						神戸市交通局提供
41	若林幹夫氏プロフィール	写真						若林幹夫氏提供
49	川添愛氏プロフィール	写真						川添愛氏提供
56	ジョン・レノン(右)とオノ・ヨーコ(1969年)	写真						アフロ提供 aflo_9201746
56	石田英敬氏プロフィール	写真						自社所蔵
60	コウイカ	写真						photolibrary提供 pl-99992793675
67	更科功氏プロフィール	写真						更科功氏提供
71	デューラーの透視図法	絵画						自社所蔵
72	ドゥッチオ「最後の晩餐」(1308年)	絵画						ユニフォトプレス提供 BAL_DGA624438
73	ダ・ビンチ「最後の晩餐」(1498年)	絵画						ユニフォトプレス提供 AKG5765354
75	橋爪大三郎氏プロフィール	写真						自社所蔵
79	トリュフを探す豚	写真						アフロ提供 aflo_5310372
82	三浦哲哉氏プロフィール	写真						自社所蔵
85	『日本経済新聞』2020年11月19日(夕刊)	写真						日本経済新聞社提供
82	中屋敷均氏プロフィール	写真						自社所蔵
93	沖縄本島	図						自社作成
97	沖縄県糸満市所在のガマ「轟の壕」	写真						ユニフォトプレス提供 P110624000483
100	岸政彦氏プロフィール	写真						自社所蔵

図 版 出 典 一 覧 表

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
103	キュリー夫妻	写真						アフロ提供 作品番号:FSKB013655(SSPL-10296197)
105	フランスの「五月革命」のようす	写真						アフロ提供作品番号 LKGA109834
107	1911年にベルギーのブリュッセルで開催された物理学の国際会議、第一回ソルヴェイ会議に出席したマリー・キュリー(テーブルで片ひじを突く女性)と、ランジュヴァン(後列右端)	写真						自社所蔵
108	川島慶子氏プロフィール	写真						自社所蔵
118	尹雄大氏プロフィール	写真						尹雄大氏提供
125	夏目漱石氏プロフィール	写真						自社所蔵
133	濱口竜介氏プロフィール	写真						自社所蔵
137	ニューギニア島	図						自社作成
138	『カンニバル・ツアーズ』より	写真						自社所蔵
141	『カンニバル・ツアーズ』より	写真						自社所蔵
143	今福龍太氏プロフィール	写真						自社所蔵
145	ユスクキュル	写真						アフロ提供 aflo_117000841
146	ユクスキュルによるマダニのスケッチ	写真						自社所蔵
149	人間にとっての部屋(『生物から見た世界』より)	図						自社所蔵
149	イヌにとっての部屋	図						自社所蔵
149	ハエにとっての部屋	図						自社所蔵
150	日高敏隆氏プロフィール	写真						自社所蔵

図 版 出 典 一 覧 表

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
156	湯浅誠氏プロフィール	写真						自社所蔵
163	森本あんり氏プロフィール	写真						森本あんり氏提供
169	トリアージ・タッグ	写真						photolibrary提供 pl-999108072806
171	船木亨氏プロフィール	写真						自社所蔵
176	連合総司令部（GHQ）の意向を反映し、戦時中の教科書を塗りつぶして使用した占領下の「黒塗り教科書」（1946年頃）	写真						毎日新聞フォトバンク P19950728dd1dd4phj920000
179	杉田敦氏プロフィール	写真						朝日新聞フォトアーカイブ提供
191	今井むつみ氏プロフィール	写真						自社所蔵
191	秋田喜美氏プロフィール	写真						自社所蔵
198	ゴヤ「我が子を食らうサトゥルヌス」	絵画						自社所蔵
199	河野哲也氏プロフィール	写真						自社所蔵
201	能登半島	図						自社作成
203	千葉県酒々井町・清光寺で見つかった下張り文書	写真						千葉日報提供
207	網野義彦氏プロフィール	写真						朝日新聞フォトアーカイブ提供
210	政治の場における男女の地位の平等感	図						自社作成
210	上位国及び主な国のジェンダーギャップ指数	図						自社作成

図 版 出 典 一 覧 表

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
213	フランスの失業者数と失業率の推移（世界銀行のデータに基づく）	図						自社作成
218	カスピ海周辺図	図						自社作成
219	ドードー	写真						アフロ提供
221	細田衛士氏プロフィール	写真						自社所蔵
229	柴田邦臣氏プロフィール	写真						自社所蔵
232	ナポレオン三世のクーデター決行日のパリの様子	写真						自社所蔵
237	タイプライター	写真						iStock提供 iStock-579256170
240	床の間（本居宣長の旧宅・鈴屋の書斎）	写真						本居宣長記念館所蔵
243	丸山眞男氏プロフィール	写真						自社所蔵
245	赤瀬川原平　模型千円札Ⅰ（Model 1,000-Yen Note Ⅰ）1963年	写真						東京国立近代美術館所蔵
249	ヨセミテ国立公園	写真						photolibrary提供 pl-99963668779
249	屋久島の杉	写真						photolibrary提供 pl-99924144267
250	タクラマカン砂漠	写真						photolibrary提供 pl-99924842945
253	森岡正博氏プロフィール	写真						自社所蔵
261	野口裕二氏プロフィール	写真						自社所蔵
265	クヒン・カーター「バウハウスと少女」（1993年）	写真						アマナ・イメージズ所蔵
270	岡真理氏プロフィール	写真						自社所蔵
278	現存最古の叙事詩「ギルガメシュ叙事詩」	写真						ユニフォト提供 P02FF00315BAL_126989
279	野家啓一氏プロフィール	写真						自社所蔵
282	1926年頃の小山内周辺	図						自社作成
287	ハマナス	写真						photolibrary提供 pl-999189652166
290	柳田國男氏プロフィール	写真						自社所蔵
299	三木那由他氏プロフィール	写真						自社所蔵
306	バウハウス（デッサウ校）	写真						アフロ提供 aflo_120628474
309	椹木野衣氏プロフィール	写真						自社所蔵
311	カメレオン	写真						photolibrary提供 pl-999231392754
313	観音三十三応身図（室町時代）	写真						国立博物館所蔵品統合検索システム出典
317	大森荘蔵氏プロフィール	写真						自社所蔵

図 版 出 典 一 覧 表

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
320	世界の紙幣	写真						アフロ提供 aflo_34460698
324	アフリカ大陸南部に位置するジンバブエでは、2000年代に貨幣の価値が暴落するハイパー・インフレーションとなり、パン1個が10億ジンバブエ・ドルで取引された。(2008年6月、首都ハラレで撮影。)	写真						ユニフォトプレス提供 ジンバブエのハイパーインフレーション_2008年 _uniH_00348726
326	岩井克人氏プロフィール	写真						朝日新聞フォトアーカイブ提供
331	父島列島・母島列島	図						自社作成

図 版 出 典 一 覧 表

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
332	小笠原諸島（父島）の人々（2008年）	写真						アフロ提供 _20080608_aflo_OMSA749696
333	管啓次郎氏プロフィール	写真						自社所蔵
336	ドキュメンタリー映画「二重のまち／交代地のうた」（小森はるか・瀬尾夏美　2019年）より。映画では若者たちが被災地の人々の話を聞き取り、被災地から触発されて瀬尾が書いた物語を語る。被災地の人々を前に、その物語を読み上げている場面。	写真						瀬尾夏美氏提供
343	瀬尾夏美氏プロフィール	写真						自社所蔵
353	上村松園「序の舞」（1936年）	絵画						東京芸術大学提供
354	尼ケ崎彬氏プロフィール	写真						自社所蔵
362	坂口安吾氏プロフィール	写真						自社所蔵
365	移民奨励ポスター（大正末期）	写真						外交史料館所蔵
370	伊豫谷登士翁氏プロフィール	写真						自社所蔵
376	蓮實重彦氏プロフィール	写真						朝日新聞フォトアーカイブ提供
381	福沢諭吉氏プロフィール	写真						自社所蔵
386	アンニーバレ・カプツ「真理之時」（1584年）	写真						自社所蔵
387	若桑みどり氏プロフィール	写真						自社所蔵
396	大澤真幸氏プロフィール	写真						自社所蔵
405	木村敏氏プロフィール	写真						自社所蔵
410	レーウェンフックが発明した顕微鏡（1670年）	写真						アフロ提供 aflo_81539615
416	田中祐理子氏プロフィール	写真						田中祐理子氏提供
421	ポトラッチで踊るインディアンたち（1914年、カナダ）	写真						アマナ:7Z4Kx5Cn
423	身体を締めつけるコルセット（フランスの広告、1907年頃）	写真						京都服飾文化研究財団
426	佐伯啓思氏プロフィール	写真						佐伯啓思氏提供
433	宇宙に浮かぶハッブル宇宙望遠鏡	写真						NASA
434	養老天命反転地	写真						養老公園提供
434	西谷修氏プロフィール	写真						自社所蔵
444	中井久夫氏プロフィール	写真						自社所蔵
447	『エクソフォニー』（多和田葉子）	写真						自社所蔵
447	『沈黙の春』（レイチェル・カーソン）	写真						自社所蔵
447	『それゆけ！論理さん』（仲島ひとみ著・野矢茂樹監修）	写真						自社所蔵
447	『世界の適切な保存』（永井玲衣）	写真						自社所蔵
447	『文化の脱走兵』（奈倉有里）	写真						自社所蔵

図 版 出 典 一 覧 表

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
447	『オリエンタリズム』(エドワード・サイード)	写真						自社所蔵
447	『苦海浄土　わが水俣病』(石牟礼道子)	写真						自社所蔵

（備考）１ 「申請図書」の欄については次のとおりとする。
①「ページ」の欄には、引用又は新たに作成した教材や資料等の申請図書における掲載ページを示す。
②「名称」の欄には、引用した教材や資料等の申請図書における名称を示す。
③「種別」の欄には、国語教材、楽譜、写真、図、挿絵、表、グラフ、地図などの別を示す。
２ 「出典」の欄については次のとおりとする。
① 出典が一般図書の場合は、当該図書の名称(版次を含む。)、掲載ページ、著作者・編集者等、発行者および発行年次を各欄に示す。
② 出典が定期刊行物の場合は、発行年次等欄に巻号、発行月日を示す。
③ 出典が図書でない場合には、備考欄に資料提供者や保有者の氏名又は名称、及び当該資料に付されたた整理番号等を示すなど、出典を確認することが可能な情報を記入する。
３ 出典を基に申請図書の発行者が改変を行った場合又はあらたに作成を行った場合は、「備考」欄にその旨を示す。
４ (1)写真等については、肖像権等の権利処理を必要に応じて行うこと。
(2)著作物の掲載に当たっては、著作権法第33条に基づき、掲載する旨を著作者に通知するとともに、補償金を著作権者に支払う必要があることに留意すること(別途契約を締結する場合を除く)。

備考4の内容について確認しました。☑

出 典 一 覧 表

申請図書			出典						備考
ページ	名称	種別	名称		ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
12～16	未来をつくる言葉	国語教材	未来をつくる言葉		195～199	ドミニク・チェン	新潮社	2020年	
18	比べて読もう　中島敦「山月記」が描く「わかりあえなさ」	国語教材							編集委員会による書き下ろし
19～25	物語るという欲望	国語教材	映画の構造分析――ハリウッド映画で学べる現代思想		47～57	内田樹	文藝春秋	2011年	
27～32	科学の詩学へ	国語教材	めぐりながれるものの人類学		65～70	石井美保	青土社	2019年	
34～35	評論入門　一	国語教材							編集委員会による書き下ろし
36～41	地図の想像力	国語教材	増補　地図の想像力		58～64	若林幹夫	河出書房新社	2009年	
43～49	本当は怖い「前提」の話	国語教材	「UP」第四九巻・第四号		38～44	川添愛	東京大学出版会	2020年	
51～56	「象徴的貧困」に立ち向かうために	国語教材	現代思想の教科書――世界を考える知の地平15章		232～237	石田英敬	筑摩書房	2010年	
55	Imagine（John Lennon）	国語教材	imagine			John Lenon	アップルレコード	1971年	
58～59	評論入門　二	国語教材							編集委員会による書き下ろし
60～67	一〇〇パーセントは正しくない科学	国語教材	若い読者に贈る美しい生物学講義		34～45	更科功	ダイヤモンド社	2019年	
69～75	近代の成立――遠近法	国語教材	はじめての構造主義		154～155, 159～163	橋爪大三郎	講談社	1988年	
77～82	カイロモン	国語教材	自炊者になるための26週		148～154	三浦哲哉	朝日出版社	2023年	
84～85	多様な文章に触れよう――法令文・新聞記事	国語教材							編集委員会による書き下ろし
86～91	迷惑でいびつな生命	国語教材	わからない世界と向き合うために		151～158	中屋敷均	筑摩書房	2024年	
93～100	沖縄戦を聞く	国語教材	はじめての沖縄		122～130	岸政彦	新曜社	2018年	

出 典 一 覧 表

申請図書			出典						備考
ページ	名称	種別	名称		ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
102～108	変貌する聖女	国語教材	マリー・キュリーの挑戦		89～97	川島慶子	トランスビュー	2010年	
110～118	男の絆、女たちの沈黙	国語教材	さよなら、男社会		14～23	尹雄大	亜紀書房	2020年	
120～125	現代日本の開化	国語教材	明治文学全集	第55巻	320～321，322～323	夏目漱石	筑摩書房	1971年	
127～133	物語りについて	国語教材	他なる映画と 2		244～248	濱口竜介	インスクリプト	2024年	
135	比べて読もう 夏目漱石「こころ」の「語り」	国語教材							編集委員会による書き下ろし
136～143	ファンタジーワールドの誕生	国語教材	クレオール主義 新版		66～72	今福龍太	青土社	2001年	
145～150	生物の作る環境	国語教材	動物と人間の世界認識――イリュージョンなしに世界は見えない		34～45	日高敏隆	筑摩書房	2007年	
152～156	貧困は自己責任なのか	国語教材	反貧困		74～82	湯浅誠	岩波書店	2008年	
158～163	ポピュリズムとは何か	国語教材	異端の時代――正統のかたちを求めて		224～230	森本あんり	岩波書店	2018年	
165～171	トリアージ社会	国語教材	現代思想入門		115～122	船木亨	筑摩書房	2016年	
173～179	権力とは何か	国語教材	政治的思考		81～87	杉田敦	岩波書店	2013年	
181～182	レポートを書こう	国語教材							編集委員会による書き下ろし
183	生成AIとの付き合い方	国語教材							編集委員会による書き下ろし
184～191	子どもの言語習得	国語教材	言語の本質		207～212，214～218	今井むつみ・秋田喜美	中央公論新社	2023年	
193～199	ファッションの現象学	国語教材	境界の現象学		33～39	河野哲也	筑摩書房	2014年	
201～207	日本の社会は農業社会か	国語教材	日本の歴史をよみなおす		242～249	網野義彦	筑摩書房	2005年	

出 典 一 覧 表

申請図書			出典						備考
ページ	名称	種別	名称		ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
209～210	資料や情報を吟味して、自分の考えにつなげよう	国語教材							編集委員会による書き下ろし
211～214	数字化される世界	国語教材	統計の歴史		9～13	オリヴィエ・レイ	原書房	2020年	
215	データの読み方	国語教材							編集委員会による書き下ろし
216～221	資源はなぜ枯渇するのか	国語教材	環境と経済の文明史		221～225	細田衛士	NTT出版	2010年	
223～229	ビッグデータ時代の「生」の技法	国語教材	〈情弱〉の社会学		140～146	柴田邦臣	青土社	2019年	
231～243	「である」ことと「する」こと	国語教材	日本の思想		154～158, 163～164, 174～180	丸山真男	岩波書店	1961年	
248～253	「自然を守る」ということ	国語教材	環境倫理学		27～31	森岡正博	東京大学出版会	2009年	
255～261	物語としての自己	国語教材	物語としてのケア――ナラティブ・アプローチの世界へ		44～50	野口裕二	医学書院	2002年	
263	比べて読もう　森鷗外「舞姫」が語る「自己」	国語教材							編集委員会による書き下ろし
264～270	虚ろなまなざし	国語教材	彼女の「正しい」名前とは何か		208～213	岡真理	青土社	2000年	
272～273	複数の文章を読み比べてみよう	国語教材							編集委員会による書き下ろし
274～279	物語と歴史のあいだ	国語教材	物語の哲学		119～124	野家啓一	岩波書店	2005年	
281～290	清光館哀史	国語教材	柳田國男全集	第三巻	710～719	柳田國男	筑摩書房	1997年	
292～299	自分自身を語るために	国語教材	「群像」第78巻・第12号		503～508	三木那由他	講談社	2023年	

出 典 一 覧 表

申請図書			出典						備考
ページ	名称	種別	名称		ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
301～302	自分の経験や考えを効果的に書いてみよう	国語教材							編集委員会による書き下ろし
304～309	絵画は紙幣に憧れる	国語教材	反アート入門		211～215	椹木野衣	幻冬舎	2010年	
311～317	真実の百面相	国語教材	流れとよどみ		25～32	大森荘蔵	産業図書	1981年	
319～326	貨幣共同体	国語教材	貨幣論		210～217	岩井克人	筑摩書房	1998年	
328～333	ピジンという生き方	国語教材	オムニフォン		1～6	管啓次郎	岩波書店	2005年	
335	聞く者たちの文学、忘却に抗するための会話	国語教材	「ユリイカ」7月号　第54巻・第9号		93～98	瀬尾夏美	青土社	2022年	
345～343	戦争は女の顔をしていない	国語教材	戦争は女の顔をしていない		161～162, 164～166	スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ	岩波書店	2016年	
348～354	模倣と「なぞり」	国語教材	ことばと身体		183～188	尼ケ崎彬	勁草書房	1990年	
356～362	ラムネ氏のこと	国語教材	坂口安吾全集	第3巻	309～313	坂口安吾	筑摩書房	1999年	
364～370	難民が問題になるとき	国語教材	グローバリゼーション――移動から現代を読みとく		177～179, 184～188	伊豫谷登士翁	筑摩書房	2021年	
372～376	思考の誕生	国語教材	齟齬の誘惑		181～184	蓮實重彦	東京大学出版会	1999年	
378～381	主義は広大なるべき事	国語教材	福沢諭吉全集	第八巻	217～220	福沢諭吉	岩波書店	1960年	
383～387	異時代人の目	国語教材	レット・イット・ビー		127～134	若桑みどり	主婦の友社	1988年	
389～396	巫女の視点	国語教材	社会学のすすめ		4～11	大澤真幸	筑摩書房	1996年	
398～405	ものとこと	国語教材	時間と自己		4～10、22～24	木村敏	中公新書	1982年	
407～416	「病気」の向こう側	国語教材	病む、生きる、身体の歴史		305～313	田中祐理子	青土社	2019年	

出 典 一 覧 表

申請図書			出典						備考
ページ	名称	種別	名称		ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
418～426	過剰性と稀少性	国語教材	経済学の犯罪		272～280	佐伯啓思	講談社	2012年	
428～434	記憶の満天	国語教材	理性の探求		vi～xi	西谷修	岩波書店	2009年	
436～444	戦争と平和についての観察	国語教材	樹をみつめて		56～64	中井久夫	みすず書房	2006年	
446	論文を読んで、これまで行われてきた研究をまとめよう	国語教材							編集委員会による書き下ろし
447	読書案内　より深く問うために	国語教材							編集委員会による書き下ろし

（備考）１「申請図書」の欄については次のとおりとする。
①「ページ」の欄には、引用又は新たに作成した教材や資料等の申請図書における掲載ページを示す。
②「名称」の欄には、引用した教材や資料等の申請図書における名称を示す。
③「種別」の欄には、国語教材、楽譜、写真、図、挿絵、表、グラフ、地図などの別を示す。
２「出典」の欄については次のとおりとする。
① 出典が一般図書の場合は、当該図書の名称（版次を含む。）、掲載ページ、著作者・編集者等、発行者および発行年次を各欄に示す。
② 出典が定期刊行物の場合は、発行年次等欄に巻号、発行月日を示す。
③ 出典が図書でない場合には、備考欄に資料提供者や保有者の氏名又は名称、及び当該資料に付されたた整理番号等を示すなど、出典を確認することが可能な情報を記入する。
３ 出典を基に申請図書の発行者が改変を行った場合又はあらたに作成を行った場合は、「備考」欄にその旨を示す。
４ (1)写真等については、肖像権等の権利処理を必要に応じて行うこと。
(2)著作物の掲載に当たっては、著作権法第33条に基づき、掲載する旨を著作者に通知するとともに、補償金を著作権者に支払う必要があることに留意すること（別途契約を締結する場合を除く）。

備考4の内容について確認しました。☑

図 版 出 典 一 覧 表

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
前見返し一～二	システィーナ礼拝堂「最後の審判」	絵画						ユニフォトプレス提供
後ろ見返し四～五	パブロ・ピカソ「ゲルニカ」(1937年)	絵画						ソフィア王妃芸術センター所蔵 ／ユニフォトプレス提供 BAL_10313
9	中谷芙二子≪Dynamic Earth Series Ⅰ≫ 霧の彫刻 #47610 2021年	写真						長野県立美術館所蔵
16	ドミニク・チェン氏プロフィール	写真						自社所蔵
18	『山月記・名人伝ほか』表紙	写真						自社所蔵
19	イワン・モジューヒン	写真						ユニフォトプレス提供
25	内田樹氏プロフィール	写真						自社所蔵
32	石井美保氏プロフィール	写真						自社所蔵
36	T-O図(ブリティッシュ・ライブラリー所蔵)	絵画						自社所蔵
39	地下鉄の路線図(神戸市営地下鉄 2011年)	図						神戸市交通局提供
41	若林幹夫氏プロフィール	写真						若林幹夫氏提供
49	川添愛氏プロフィール	写真						川添愛氏提供
56	ジョン・レノン(右)とオノ・ヨーコ(1969年)	写真						アフロ提供 aflo_9201746
56	石田英敬氏プロフィール	写真						自社所蔵
60	コウイカ	写真						photolibrary提供 pl-99992793675
67	更科功氏プロフィール	写真						更科功氏提供
71	デューラーの透視図法	絵画						自社所蔵
72	ドゥッチオ「最後の晩餐」(1308年)	絵画						ユニフォトプレス提供 BAL_DGA624438
73	ダ・ビンチ「最後の晩餐」(1498年)	絵画						ユニフォトプレス提供 AKG5765354
75	橋爪大三郎氏プロフィール	写真						自社所蔵
79	トリュフを探す豚	写真						アフロ提供 aflo_5310372
82	三浦哲哉氏プロフィール	写真						自社所蔵
85	『日本経済新聞』2020年11月19日(夕刊)	写真						日本経済新聞社提供
82	中屋敷均氏プロフィール	写真						自社所蔵
93	沖縄本島	図						自社作成
97	沖縄県糸満市所在のガマ「轟の壕」	写真						ユニフォトプレス提供 P110624000483
100	岸政彦氏プロフィール	写真						自社所蔵

図 版 出 典 一 覧 表

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
103	キュリー夫妻	写真						アフロ提供 作品番号:FSKB013655(SSPL-10296197)
105	フランスの「五月革命」のようす	写真						アフロ提供作品番号 LKGA109834
107	1911年にベルギーのブリュッセルで開催された物理学の国際会議、第一回ソルヴェイ会議に出席したマリー・キュリー(テーブルで片ひじを突く女性)と、ランジュヴァン(後列右端)	写真						自社所蔵
108	川島慶子氏プロフィール	写真						自社所蔵
118	尹雄大氏プロフィール	写真						尹雄大氏提供
125	夏目漱石氏プロフィール	写真						自社所蔵
133	濱口竜介氏プロフィール	写真						自社所蔵
137	ニューギニア島	図						自社作成
138	『カンニバル・ツアーズ』より	写真						自社所蔵
141	『カンニバル・ツアーズ』より	写真						自社所蔵
143	今福龍太氏プロフィール	写真						自社所蔵
145	ユスクキュル	写真						アフロ提供 aflo_117000841
146	ユクスキュルによるマダニのスケッチ	写真						自社所蔵
149	人間にとっての部屋(『生物から見た世界』より)	図						自社所蔵
149	イヌにとっての部屋	図						自社所蔵
149	ハエにとっての部屋	図						自社所蔵
150	日高敏隆氏プロフィール	写真						自社所蔵
156	湯浅誠氏プロフィール	写真						自社所蔵
163	森本あんり氏プロフィール	写真						森本あんり氏提供
169	トリアージ・タッグ	写真						photolibrary提供 pl-999108072806
171	船木亨氏プロフィール	写真						自社所蔵
176	連合総司令部(GHQ)の意向を反映し、戦時中の教科書を塗りつぶして使用した占領下の「黒塗り教科書」(1946年頃)	写真						毎日新聞フォトバンク P19950728dd1dd4phj920000
179	杉田敦氏プロフィール	写真						朝日新聞フォトアーカイブ提供
191	今井むつみ氏プロフィール	写真						自社所蔵
191	秋田喜美氏プロフィール	写真						自社所蔵
198	ゴヤ「我が子を食らうサトゥルヌス」	絵画						自社所蔵
199	河野哲也氏プロフィール	写真						自社所蔵
201	能登半島	図						自社作成

図 版 出 典 一 覧 表

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
203	千葉県酒々井町・清光寺で見つかった下張り文書	写真						千葉日報提供
207	網野義彦氏プロフィール	写真						朝日新聞フォトアーカイブ提供
210	政治の場における男女の地位の平等感	図						自社作成
210	上位国及び主な国のジェンダーギャップ指数	図						自社作成

図 版 出 典 一 覧 表

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
213	フランスの失業者数と失業率の推移（世界銀行のデータに基づく）	図						自社作成
218	カスピ海周辺図	図						自社作成
219	ドードー	写真						アフロ提供
221	細田衛士氏プロフィール	写真						自社所蔵
229	柴田邦臣氏プロフィール	写真						自社所蔵
232	ナポレオン三世のクーデター決行日のパリの様子	写真						自社所蔵
237	タイプライター	写真						iStock提供 iStock-579256170
240	床の間（本居宣長の旧宅・鈴屋の書斎）	写真						本居宣長記念館所蔵
243	丸山眞男氏プロフィール	写真						自社所蔵
245	赤瀬川原平　模型千円札Ⅰ（Model 1,000-Yen Note Ⅰ）1963年	写真						東京国立近代美術館所蔵
249	ヨセミテ国立公園	写真						photolibrary提供 pl-99963668779
249	屋久島の杉	写真						photolibrary提供 pl-99924144267
250	タクラマカン砂漠	写真						photolibrary提供 pl-99924842945
253	森岡正博氏プロフィール	写真						自社所蔵
261	野口裕二氏プロフィール	写真						自社所蔵
265	クヒン・カーター「バウハウスと少女」（1993年）	写真						アマナ・イメージズ所蔵
270	岡真理氏プロフィール	写真						自社所蔵
278	現存最古の叙事詩「ギルガメシュ叙事詩」	写真						ユニフォト提供 P02FF00315BAL_126989
279	野家啓一氏プロフィール	写真						自社所蔵
282	1926年頃の小山内周辺	図						自社作成
287	ハマナス	写真						photolibrary提供 pl-999189652166
290	柳田國男氏プロフィール	写真						自社所蔵
299	三木那由他氏プロフィール	写真						自社所蔵
306	バウハウス（デッサウ校）	写真						アフロ提供 aflo_120628474
309	椹木野衣氏プロフィール	写真						自社所蔵
311	カメレオン	写真						photolibrary提供 pl-999231392754
313	観音三十三応身図（室町時代）	写真						国立博物館所蔵品統合検索システム出典
317	大森荘蔵氏プロフィール	写真						自社所蔵

図 版 出 典 一 覧 表

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
320	世界の紙幣	写真						アフロ提供 aflo_34460698
324	アフリカ大陸南部に位置するジンバブエでは、2000年代に貨幣の価値が暴落するハイパー・インフレーションとなり、パン1個が10億ジンバブエ・ドルで取引された。(2008年6月、首都ハラレで撮影。)	写真						ユニフォトプレス提供 ジンバブエのハイパーインフレーション_2008年 _uniH_00348726
326	岩井克人氏プロフィール	写真						朝日新聞フォトアーカイブ提供
331	父島列島・母島列島	図						自社作成

図 版 出 典 一 覧 表

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
332	小笠原諸島（父島）の人々（2008年）	写真						アフロ提供 _20080608_aflo_OMSA749696
333	管啓次郎氏プロフィール	写真						自社所蔵
336	ドキュメンタリー映画「二重のまち／交代地のうた」（小森はるか・瀬尾夏美　2019年）より。映画では若者たちが被災地の人々の話を聞き取り、被災地から触発されて瀬尾が書いた物語を語る。被災地の人々を前に、その物語を読み上げている場面。	写真						瀬尾夏美氏提供
343	瀬尾夏美氏プロフィール	写真						自社所蔵
353	上村松園「序の舞」（1936年）	絵画						東京芸術大学提供
354	尼ケ崎彬氏プロフィール	写真						自社所蔵
362	坂口安吾氏プロフィール	写真						自社所蔵
365	移民奨励ポスター（大正末期）	写真						外交史料館所蔵
370	伊豫谷登士翁氏プロフィール	写真						自社所蔵
376	蓮實重彦氏プロフィール	写真						朝日新聞フォトアーカイブ提供
381	福沢諭吉氏プロフィール	写真						自社所蔵
386	アンニーバレ・カプツ「真理之時」（1584年）	写真						自社所蔵
387	若桑みどり氏プロフィール	写真						自社所蔵
396	大澤真幸氏プロフィール	写真						自社所蔵
405	木村敏氏プロフィール	写真						自社所蔵
410	レーウェンフックが発明した顕微鏡（1670年）	写真						アフロ提供 aflo_81539615
416	田中祐理子氏プロフィール	写真						田中祐理子氏提供
421	ポトラッチで踊るインディアンたち（1914年、カナダ）	写真						PPS通信提供 G0DHDC
423	身体を締めつけるコルセット（フランスの広告、1907年頃）	写真						京都服飾文化研究財団
426	佐伯啓思氏プロフィール	写真						佐伯啓思氏提供
433	宇宙に浮かぶハッブル宇宙望遠鏡	写真						NASA
434	養老天命反転地	写真						養老公園提供
434	西谷修氏プロフィール	写真						自社所蔵
444	中井久夫氏プロフィール	写真						自社所蔵
447	『エクソフォニー』（多和田葉子）	写真						自社所蔵
447	『沈黙の春』（レイチェル・カーソン）	写真						自社所蔵
447	『それゆけ！論理さん』（仲島ひとみ著・野矢茂樹監修）	写真						自社所蔵
447	『世界の適切な保存』（永井玲衣）	写真						自社所蔵
447	『文化の脱走兵』（奈倉有里）	写真						自社所蔵

図 版 出 典 一 覧 表

申請図書			出典					備考
ページ	名称	種別	名称	ページ	著作者等	発行者	発行年次等	
447	『オリエンタリズム』(エドワード・サイード)	写真						自社所蔵
447	『苦海浄土　わが水俣病』(石牟礼道子)	写真						自社所蔵

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
12～16	未来をつくる言葉	国語教材	①（196ページ13行目）Twitterに代表される	①削除	①特定の商標名を出さない配慮
			②（196ページ14行目～16行目）先に述べたあいちトリエンナーレ2019の期間中には、問題とされた表現作品の文脈や背景は削ぎ落とされて、表面的な形象だけを巡って、誹謗中傷が交わされた。	②削除	②学習上の配慮
19～25	物語るという欲望	国語教材	①(48ページ12行目～52ページ12行目) 映画のなかのすべてが、ただ一人の作者の完全なコントロールに従属しているのであれば、その「なんだか気になるディテール」の「意味」を探り当てることはそれほどむずかしいことではありません。 しかし、映画テクストの生産にかかわる膨大な数のスタッフや俳優たち、そして観客自身の解釈志向、その欲望と無意識の集合的で偶然な「効果」として、誰の意図でもなく、たまたまそのような映画記号がそこに「見えた」としたら、それらの映画記号が「何を意味するのか」という問いに確定的な答えを出すことは原理的には不可能なことです。映画は「多声的」であるということは、言い換えれば、映画には、「何を意味するのかよく分からないもの」が必ず映り込んでいるということですし、むしろ「何を意味するのかよく分からないもの」が映り込んでいることこそが映画の本質的な魅惑を作り出しているということです。 ロラン・バルトは『イワン雷帝』(Ivan Groznyj, by Sergei Eisenstein, 1944/46)を論じたエッセイのなかで、映画記号のもたらす意味を二つのカテゴリーに分類するという興味深い仮説を提示しました。 一つは、「サンス・オブヴィ」le sens obvieと呼ばれます。これは本来神学用語で、「ある語が複数の意味をもつ場合、そのうちでもっとも自然に意識に浮かんでくる意味」のことです。 映画の場合、映画「作者」が観客に向けて意図的に発信し、観客が労せずして把握できるような意味がこれに当たります。例えば「この映画を通じて、私は戦争の悲惨さを訴えたかった」ということを監督やシナリオライターや俳優たちが映画の製作に先立って、確認し合って仕事を進めた場合、その映画の意図はおっしゃるとおり「戦争の悲惨さを訴える」ことにあるでしょう。これが「センス・オブヴィ」すなわち「あっちから迎えに来てくれる意味」です。 「あっちから迎えに来る意味」は明晰にして判明です。しかし、それは抵抗なく受け入れられる代わりに、それ以外の解釈を許さない「閉じられた自明性」でもあります。観客は解釈する手間を省いてもらう代償に、読解したり、曲解したり、深読みしたりする権利を放棄しなければなりません。 いま一つは「サンス・オプチュ」le sens obtusと呼ばれます。「オプチュ」は「鈍い、無感覚な、麻痺した、弱い」を意味する形容詞ですから、この術語の語義は「鈍い意味」「弱々しい意味」というものになります。 バルトは、『イワン雷帝』のなかで皇帝に黄金の洗礼をしている二人の廷臣の「化粧の濃さ」と『戦艦ポチョムキン』(Bronenosets Potyomkin, by Sergei Eisenstein, 1925)で泣く老婆の「顔」を「鈍い意味」の例に挙げています。 「鈍い意味」は映画の表層にこれみよがしに露出しているのにもかかわらず、ストーリーには関わりを持ちません。それは何かの象徴や隠喩でもありません。ですから、観客は、そこに「作者」から観客に宛てられたメッセージをうまく読み取ることができません。しかし、それにもかかわらず、その映画記号は観客の意識にガラス片のように突き刺さったまま残ります。観客はそれを無視することができず、しかし解釈することができません。 「鈍い意味」とはバルトの定義によれば「私の理解がどうしてもうまく吸収することのできない追加分として、『余分』に生ずる、頑固であると同時にとらえどころのない、すべすべしていながら逃げてしまう意味」です。	①削除	①分量の調節

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
19～25	物語るという欲望	国語教材	鈍い意味はシニフィエなきシニフィアンである。それゆえ鈍い意味が何を意味しているのかを名指すことがこれほど困難なのだ。（…）鈍い意味を確定することができないのは、明示的な意味とは逆に、それが何ものをも複写していないからである。何も表象していないものをどうやって記述すればよいのか？」 「映画的なもの（ル・フィルミック）、それは映画の中にある、記述され得ぬものである。表象するだけで、表象され得ないものである。」 この「鈍い意味／映画的なもの」というバルトの刺激的なアイディアをもう少し追いかけてみたいと思います。		
			②(55ページ10行目～56ページ1行目) ジャック・ラカンはこれと似たことを「原因」について語っています。私たちが何かの出来事に遭遇して、その「原因」について考えたり、推測したりするとき、そこには乗り超えることのできない「裂け目」があります。ラカンはこう書いています。 「原因という概念は結局分析不能な概念である――つまり理性によって理解することは不可能である――（…）原因という機能には本質的に何らかの『裂け目』（…）が残されている、（…）原因について語るときには、つねにそこに概念化に抗するもの、規定できないものがあります。（…）原因という言い方がされる場合にはそこに穴があるのです。」	②③削除	②学習上の配慮
			③ バルトのいう		

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
43～49	本当は怖い「前提」の話	国語教材	①（38ページ上段2行目）たとえば詐欺の手口についての知識は、防犯のために広く知られるべきだが、良からぬことを考えている輩にも要らん知恵をつけたりしていると思う。	①②③削除	①②③学習上の配慮
			②（38ページ上段8行目～14行目）マッドサイエンティストと言えばたいてい物理とか化学とか生物の博士で、言語学者がそういうキャラとして出てくる話は聞いたことがない。言語学者の中にも人間的にアブナイ人はいるかもしれないが、そういう人も「言語学を使って人類補完計画を実行する。」などと考えたりはしないだろう。考えるようであれば本当にアブナイ人だが、人類を補完したり世界を滅ぼしたりする力はたぶんないから安心していい。		
			③（38ページ下段5行目～39ページ上段5行目）実は今までも「言語学バーリ・トゥードに書いちゃおうかな？」と思わなくもなかったのだが、なんとなくためらっていた。しかし最近、その知識がとあるテレビ番組で披露されているのを目にしてしまい、もう書いてもいいんじゃないかという気持ちになっている。 その番組を見たのは、今年の正月だ。私はテレビを持っていないので、年末年始の帰省期間はその年にブレイクした芸人とかアイドルとかを見て「今、誰がトレンディ（死語）なのか」を学習する貴重な機会となっているが、今年はなぜか「キムタク祭り」となった。というのも、木村拓哉さん主演のドラマとか映画とかが毎日のように放送されていて、どれも面白そうだったので全部見てしまったのだ。結果的に、令和の世になってもキムタクがトレンディだということを思い知らされたわけだが、なかでも警察学校の生活をリアルに描いたドラマ『教場』では、キムタクが白髪のイケオジ教官を演じていてかなりインパクトがあり、ストーリーもとても面白かった。		
			④（39ページ上段6行目）そのドラマの中で	④削除	④前後の文脈をつなげる学習上の配慮
			⑤（41ページ上段8行目～下段5行目）誘導尋問をする側の目的は、「自分が事実だと思っていることを相手に認めさせる」というものだ。裁判なんかで検事が被告に「あなたは被害者に対して、最初から殺意をもって近づいたんじゃないですか？」などと聞くのは、最初から殺意を持っていたことを被告に認めさせたいからだし、かつて新日本プロレスの正体不明のマスクマンであったスーパーストロングマシンに対して藤波辰巳が「お前、平田だろ！」と言ったのも、彼が平田であることを白状させたかったからだ（たぶん）。ただし、こういった直球の質問は、被告なりマシン選手なりが「いいえ」とか「平田じゃねーよ」などと言えば済むのであまり大したことはない。だが、ここに前提が入ってくると、かなり厄介になる。	⑤削除	⑤学習上の配慮
			⑥（41ページ下段8行目）キムタクの	⑥削除	⑥前後の文脈をつなげる学習上の配慮
			⑦（42ページ下段4行目）他人に対してキレて見せたり、刑事相手にカツ丼を要求したりするのに慣れている人はいいが、	⑦削除	⑦学習上の配慮

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
43～49	本当は怖い「前提」の話	国語教材	⑧（42ページ下段8行目～43ページ下段6行目）これを読んでおられる皆様の多くはきっと「自分は自他ともに認める善良な市民なので、警察のご厄介にはならないし、尋問されるような目にも遭わないから大丈夫。」と高をくくっておられることと思う。しかし、前提が悪用される場面は、あからさまな誘導尋問だけとは限らない。ナンパ術の本を読んだことがあった（別に自分がナンパをしようとかされようとか思っていたわけではなく、単に興味本位で読んでいただけだ）が、その中に「二回目のデートを断られない方法」というのがあった。 「キミは憧れの彼女との最初のデートを楽しんだ。キミは次のデートの約束を取り付けたいが、彼女がOkしてくれるかどうか分からない。もしかすると、断られるかもしれない。そんなときは、『また会ってくれる？』と尋ねるよりも、『今度いつ会う？』と言った方が断られにくくなるゾ」 確かに、質問が「また会ってくれる？」の場合よりも、「今度いつ会う？」の方がやや断りづらくなる。これは誘導尋問でこそないが、相手をコントロールしやすくするために前提が利用されている例だ。先述のとおり、「いつ」を含む疑問文では「いつ」以外の部分が前提になるので、「今度いつ会う？」という文は「今度会う」という前提を持っている。つまり、「今度会うこと」を自分と彼女との間での「決定事項」にしてしまうことで、ストレートに断られるのを防いでいるのだ。このように尋ねられたとき、普通に答えたら次会うことを承諾したことになるし、「うーん、どうしよう」とか「そうねぇ」のような曖昧なことを言っても、前提を受け入れたと思われ こういった前提の利用は、日常の何気ない会話や仕事のメールなんかにも潜んでいる可能性がある。仕事関係のパーティーとかでちょっと話しただけの人から、とくに約束をした覚えもないのに「いつ御社に伺えばよろしいでしょうか？」のような連絡が来たら、「あれっ？　そんな約束したっけ？」と思うと同時に、なんとなく「来るな」とも言いづらくなる。 こういう場合、「相手の頭の中ではそういう予定になっているみたいだし、そう思わせたのにはこっちにも責任があるかもしれないから、会ってあげなきゃいけないだろうか」のように余計な気遣いをする人とか、「今さら否定するのも面倒くさいから、とりあえず相手に話を合わせよう」と思う人はいいカモになってしまうだろう。つまり、社会的な軋轢を面倒くさがったり怖がったりするあまり、相手に面と向かって何か言うよりも自分の時間とか労力とかを犠牲にした方がまだマシだと思っちゃうタイプの人は気をつけた方がいいと思う。私自身がそうなので間違いない。 この他、	⑧削除	⑧学習上の配慮
			⑨（43ページ下段19行目～44ページ上段7行目）たとえば私が世の人々に「言語学は儲かる」と思わせたいと考え、その考えを広めるべく本の出版を計画しているとする。このとき、そのまんま「言語学は儲かる！」のような主張系のタイトルの本を出したら、一部の人は興味を持つだろうが、最初から眉唾だと思って見向きしない人も多いはずだ。しかしこれが「なぜ言語学は儲かるのか」だと、「言語学が儲かるって、常識なのか！？知らなかった、ビックウェーブに乗り遅れちまう」とか「きっと、この著者の川添って奴は言語学で儲けたんだな？どんな手を使ったのか、いっちょ見てやるか」などと思って手にとってしまう人が増えると思う。こんなときは鵜呑みにせずに、本当に言語学は儲かるのか、著者の川添は本当に儲かっているのかをよく調べてから買った方がいいだろう。	⑨削除	⑨学習上の配慮
			⑩（44ページ上段9行目）読者の皆様の周囲にも	⑩削除	⑩⑪学習上の配慮
			⑪（44ページ上段11行目）皆様にはぜひ	⑪削除	

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
51～56	「象徴的貧困」に立ち向かうために	国語教材	①（234ページ3行目）(STIEGLER, Bernard 1952-) ②（234ページ15行目）WAR IS OVER YOU WANT IT ③（244ページ13行目）media literacy	①②③削除	①②③学習上の配慮
61～67	一〇〇パーセントは正しくない科学	国語教材	①(38ページ5行目）一〇〇パーセントは正しくない科学	①削除	①学習上の配慮
69～75	近代の成立――遠近法	国語教材	①(155ページ11行目～156ページ4行目)ところで、よく考えてみると、実物をみる場合でも、なぜそれが三次元のものとみえるかは、むずかしい問題だ。網膜に映る外界の像は、二次元のスクリーンみたいで、けっして奥行きがないからだ。知覚心理学の教科書によくあげてある例だが、角膜手術で初めて目がみえるようになった人は、一週間ぐらい、目の前のしましま模様をどうみたらいいか判らなくて困るという。あそこの小さな人影も、ここの大きな人影も、だいたい同じ大きさだ。ただ遠くにあるから小さく見えるだけだ。こういうことがわかるのは、学習の結果である。 　絵の画面は、このような視覚を支える習慣を反映している。肉眼で、外界を奥行きある世界と見るようになった人は、特にそれ以上学習しなくても、絵になにが描いてあるか、たやすく理解することができる。 ②(157ページ2行目～159ページ10行目)ヨーロッパ社会と絵画 さてヨーロッパだが、中世の絵画は、おせじにも上等なものとは言えなかった。大部分は、宗教画だったが、キリスト教がもともと、偶像崇拝を禁止していたことから考えると、こういう絵ばかりなのは奇妙なことである。イスラム教徒や改革派（ことにカルヴァン派）が、宗教画を目の敵にしたのはもっともである。だが、一般民衆にとっては、親しみやすい信仰のよすがであった。 中世の宗教画の原則は、宗教的な価値に忠実であること、だ。宗教的な価値は、遠近法の原理とあんまり関係ないから、画面のなかに現実の空間を再現することにならない。だいたい、価値あるもの（神様や天使）は大きく、価値のないもの（人間）は小さく描く。また、天に近いものはなるべく上のほうに、そうでないもの（悪魔とか）は下のほうに描くとか、いろいろある。これじゃ、遠近法になりようがない。 こういう絵を見ても、きっと感動はあるだろうが、それは”知覚世界がじつにいきいき再現されている”なんていう性質のものでないはずだ。それに、こういう絵は、人間が視たのか神が視たのか、誰が視たところなのかわからない。絵を見た人が、自分を「視る主体」として意識するようなこともないだろう。 中世はこんなふうだったが、ルネッサンス期にさしかかると、だいぶ変化してくる。表現の題材や技法の点で、飛躍的な変化がみられるのだが、注目したいのは、だんだん、あくまでも人間が視た世界として、画面が構成されるようになっていったことだ。この動きの行きつくところが、遠近法である。 遠近法は、英語でパースペクティヴ（視界）ということからもわかるように、眼に映るありのままを描く方法、といういみである。 遠近法は、最初、画面をリアルに見せるための、ちょっとした工夫であった。画家が独自に考案して、使いはじめたわけだが、みんなも真似をして、たちまちありふれた技法になる。その背後には、絵を見る人びとがみんな、そういうリアルな画面を好んだという事情があるわけで、そこが重要だ。ついには、絵画の制度となって、定着する。 世界で最初の遠近法の教科書が、一五〇五年に出版された。ヴィアトールというフランス人の著書である。これからみて、十六世紀初頭には、誰でも使える技法（つまり、制度）になった、と考えていいだろう。 遠近法は、この時以来、西欧絵画の伝統にしっかり喰いこんでおり、近代のものの見方の前提にもなっている。そのため、自分がそれを踏まえていても、なんでもないことのような気がして見過ごしてしまいやすい。しかし、絵画の画面をここまでこだわって構成するということは、かなり特別のこと、よくよくのことなのだ。	①②削除	①②学習上の配慮

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
86～91	迷惑でいびつな生命	国語教材	①ブフネラという生き物 ②つながりの中で生きる ③閉じない世界	①②③削除	①②③分量の調整
73～100	沖縄戦を聞く	国語教材	（123ページ7行目～9行目）（以下、本章での沖縄戦体験者の語りはすべて、私がまとめた報告書『那覇の人生――こうして生きてきた』（二〇一五年度龍谷大学社会調査実習報告書）より引用。なおこの本は改めて出版される予定である。）	①削除	①学習上の配慮
102～108	変貌する聖女	国語教材	①（89ページ4行目）本書のはじめにも述べた	①削除	①前後の文脈をつなげる学習上の配慮
			②（89ページ6行目）最初にも書きましたが、	②削除	②前後の文脈をつなげる学習上の配慮
			③（90ページ16行目）先の章で述べたアカデミーの選挙や	③削除	③前後の文脈をつなげる学習上の配慮
			④（91ページ11・12行目）次の章で扱う、マリーの二人の友人は、こうした運動にかかわった女性たちです。	④削除	④前後の文脈をつなげる学習上の配慮
			⑤（95ページ9・10行目）（ビバリー・バーチ『キュリー夫人／伝記　世界を変えた人々1』、一六七頁、偕成社、一九九一年）	⑤削除	⑤学習上の配慮

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
102～108	変貌する聖女	国語教材	⑥（91ページ11行目～92ページ9行目）第二波というからには第一波があります。それは主に、女性参政権獲得を中心とする市民的権利の男女平等をめざす、十九世紀から二十世紀はじめの女性解放運動を指します。第一波で活躍した人々の努力により、先進国といわれる国では、第二次大戦後にほとんどの国で女性参政権が実現しました。わが日本国憲法にも男女の平等が織り込まれていますし、一九四八年に採択された世界人権宣言でも、すべての人間は人種、皮膚の色、宗教、出自などと並んで、性による差別を受けない権利を持っている、と謳われています。こうして第二次大戦後に、かなりの数の女性たちは、見かけは男性と平等に扱われることになりました。 たとえば大学の入学試験を考えてみましょう。通常そこでは、受験生は番号だけで判定されます。採点者は受験生の性別はおろか、名前も見ないで採点します。ですから合格者の男女比は、結果を見るまで誰にもわかりません。性による有利、不利などありません。とても「平等」な制度です。女性に大学入学資格がほとんどなかったマリーの時代とは、大きな違いです。しかし問題は、そう簡単ではありません。というのも、現実には男女の間に歴然とした差が存在したからです。 たとえば、日本に第二波フェミニズムが起きる直前のことですが、大学を中心に学園紛争の嵐が吹き荒れた時代がありました。大学によっては授業どころか、入試さえなくなったことがあったのです。	⑥削除	⑥分量の調節
			⑦（95ページ2行目～96ページ10行目）そのせいでしょうか、本来なら歓迎されるべき新しい伝記の流れを批判する女性物理学者まで現われました。猿橋賞という、女性科学者に与えられる有名な賞の創設者である猿橋勝子（専門は地球化学）は、一九九一年になっても、子供向け伝記シリーズの中の一巻、ビバリー・バーチの『キュリー夫人』（これはとてもよく書けている伝記ですが、ランジュヴァン事件については触れられていません）の解説で、次のように述べています。 ポーランドでの家庭教師時代の恋にやぶれたこと、さらにその後、ピエールの教え子との恋愛事件についても、聖女マリーのスキャンダルとして、大きくとりあげているジャーナリストがいますが、これらはマリーへの一種のねたみ、いびり、陰口、悪口であって、マリーの人柄をなんら傷つけるものではないと思います。 ジャーナリストの名がはっきり記されていないので、ここで猿橋が批判したいのが、ジルーたちの伝記そのものなのか、それを紹介した軽薄な記事なのかはさだかではありません。しかし私は、あえてランジュヴァン事件に触れていない伝記の解説で、このような主張をすることは誤解を呼ぶ行為だと思います。というのも、この伝記シリーズの他の人物（アインシュタインなど）については、こういう一見負の部分についても触れられているからです。 同じ解説の中で猿橋は、エーヴの伝記をもとにしたアメリカ映画『キュリー夫人』の方を、より好意的に紹介しています。しかし、第二波フェミニズムを経験した今日のわれわれの目から見れば、むしろこちらのほうが、女性を「母」「妻」役割に閉じ込めて、女性のセクシュアリティを限定しようとする「危険な」作品に思えます。何といってもこの映画では、ピエールが死んでから突然場面が何十年も飛んで、すっかり老女になったマリーが、ラジウム発見二十五周年の式典に出たところでジ・エンドです。夫が死んだあとの妻の人生には語るものなどない、と言わんばかりのこの描き方は、まさに当時の典型的な女性観を表明しています。一九四〇年代という時代の制約を思えば当然とも言えますが、ここでは原作であるエーヴの伝記以上に、マリーの十九世紀的「女らしさ」が強調されています。当時の女性たちがこの映画に感動し、その野心を大いに鼓舞されたのは事実でしょうが、	⑦削除	⑦分量の調節
			⑧（96ページ13行目～97ページ1行目）たとえば私は、第二章で登場した美青年カジミェジュが、美老人となって、ワルシャワの公園でマリーの立像を見つめている場面が大好きです。もし自分が監督になってマリーの映画を作るなら、必ずこの場面を入れたいと思っているくらいですが、これは私が、男性中心社会、つまり美は女性の、出世は男性のものとされる社会の中で育てられたことと、無関係ではありません。既成のジェンダー観から見れば、ここでひっくり返っている男女の立場というものが、働く女性である私には心地よいのです。つまり「単なる個人の好み」ではないのです。	⑧削除	⑧分量の調節

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
110～118	男の絆、女たちの沈黙	国語教材	①（16ページ2行目）男の絆、女たちの沈黙 ②（20ページ5行目）「女性は感情論で話す」のか？ ③（22ページ6行目～16行目）声を聞けないものは、マンスプレイニングをせっせと始めてしまう。マン（男）＋エクスプレイン（説明）から造られた語が意味するのは、「君はものを知らないのだから教えてやろう」といった、無邪気にも主導権をとれると思える不遜さだ。彼女たちがそれに出くわした際、「そうなんですか」「すごいですね」と返すのは、「女性は共感性が高い」からではなく、逆らうと面倒なのと、そうやって褒めてやらないとぐずり出すと経験的に知っているからであって、男たちの能書きに同意しているわけではない。 　マンスプレイニングでないとすれば、次に出会うのは「要するに何が言いたいのか」といった定番の詰問のフレーズだ。これは職場に限らない。パートナーとの会話でも出くわす。恋人や夫婦であっても、そのような調子で言葉が用いられるのが不思議でもないのは、社会の実態が「男社会」であれば、公私の別なく関係性に影響を与えるからだ。それにしても、なぜそうまでして「要したがる」のか。	①②③削除	①②③分量の調節
120～125	現代日本の開化	国語教材	①心理学の講筵でもないのにむずかしい事を申上げるのもいかがと存じますが、必要の個所だけをごく簡易に述べて再び本題に戻るつもりでありますから、しばらく御辛抱を願います。我々の心は絶間なく動いている。あなた方は今私の講演を聴いておいでになる、私は今あなた方を前に置いて何か言っている、双方共にこういう自覚がある。それに御互の心は動いている。働いている。これを意識と云うのであります。この意識の一部分、時に積れば一分間ぐらいのところを絶間なく動いている大きな意識から切り取って調べてみるとやはり動いている。その動き方は別に私が発明した訳でも何でもない、ただ西洋の学者が書物に書いた通りをもっともと思うから紹介するだけでありますが、すべて一分間の意識にせよ三十秒間の意識にせよその内容が明瞭に心に映ずる点から云えば、のべつ同程度の強さを有して時間の経過に頓着なくあたかも一つ所にこびりついたように固定したものではない。必ず動く。動くにつれて明かな点と暗い点ができる。その高低を線で示せば平たい直線では無理なので、やはり幾分か勾配のついた弧線すなわち弓形の曲線で示さなければならなくなる。こんなに説明するとかえって込み入ってむずかしくなるかも知れませんが、学者は分った事を分りにくく言うもので、素人は分らない事を分ったように呑込んだ顔をするものだから非難は五分五分である。今云った弧線とか曲線とかいう事をそっと砕いてお話をすると、物をちょっと見るのにも、見てこれが何であるかと云うことがハッキリ分るには或る時間を要するので、すなわち意識が下の方から一定の時間を経て頂点へ上って来てハッキリして、ああこれだなと思う時がくる。それをなお見つめていると今度は視覚が鈍くなって多少ぼんやりし始めるのだからいったん上の方へ向いた意識の方向がまた下を向いて暗くなりかける。これは実験して御覧になると分る。実験と云っても機械などは要らない。頭の中がそうなっているのだからただ試しさえすれば気がつくのです。本を読むにしてもAと云う言葉とBと云う言葉とそれからCという言葉が順々に並んでいればこの三つの言葉を順々に理解して行くのが当り前だからAが明かに頭に映る時はBはまだ意識に上らない。Bが意識の舞台に上り始める時にはもうAの方は薄ぼんやりしてだんだん識域の方に近づいてくる。BからCへ移るときはこれと同じ所作を繰返すに過ぎないのだから、いくら例を長くしても同じ事であります。	①削除	①分量の調整

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
120～125	現代日本の開化	国語教材	これは極めて短時間の意識を学者が解剖して吾々に示したものでありますが、この解剖は個人の一分間の意識のみならず、一般社会の集合意識にも、それからまた一日一月もしくは一年乃至十年の間の意識にも応用の利く解剖で、その特色は多人数になったって、長時間に亘ったって、いっこう変りはない事と私は信じているのであります。例えて見ればあなた方という多人数の団体が今ここで私の講演を聴いておいでになる。聴いていない方もあるかも知れないが、まア聴いているとする。そうするとその個人でない集合体のあなた方の意識の上には今私の講演の内容が明かに入る。と同時に、この講演に来る前あなた方が経験された事、すなわち途中で雨が降り出して着物が濡れたとか、また蒸し暑くて途中が難儀であったとかいう意識は講演の方が心を奪うにつれて、だんだん不明瞭不確実になってくる。またこの講演が終って場外に出て涼しい風に吹かれでもすれば、ああ好い心持だという意識に心を専領されてしまって講演の方はピッタリ忘れてしまう。私から云えば全くありがたくない話だが事実だからやむをえないのである。私の講演を行住坐臥共に覚えていらっしゃいと言っても、心理作用に反した注文なら誰も承知する者はありません。これと同じようにあなた方と云うやはり一箇の団体の意識の内容を検して見るとたとえ一カ月に亘ろうが一年に亘ろうが一カ月には一カ月を括くくるべき炳乎たる意識があり、また一年には一年を纏めるに足る意識があって、それからそれへと順次に消長しているものと私は断定するのであります。吾々も過去を顧みて見ると中学時代とか大学時代とか皆特別の名のつく時代でその時代時代の意識が纏まっております。日本人総体の集合意識は過去四五年前には日露戦争の意識だけになりきっておりました。その後日英同盟の意識で占領された時代もあります。かく推論の結果心理学者の解剖を拡張して集合の意識やまた長時間の意識の上に応用して考えてみますと、人間活力の発展の経路たる開化というものの動くラインもまた波動を描いて弧線を幾個も幾個も繋つなぎ合せて進んで行くと云わなければなりません。無論描かれる波の数は無限無数で、その一波一波の長短も高低も千差万別でありましょうが、やはり甲の波が乙の波を呼出し、乙の波がまた丙の波を誘い出して順次に推移しなければならない。一言にして云えば開化の推移はどうしても内発的でなければ嘘だと申上げたいのであります。ちょっとした話が私は今ここで演説をしている。するとそれを御聞きになるあなたがたの方から云えば初めの十分間くらいは私が何を主眼に云うかよく分らない、二十分目ぐらいになってようやく筋道がついて、三十分目くらいにはようやく油がのって少しは面白くなり、四十分目にはまたぼんやりし出し、五十分目には退屈を催し、一時間目には欠伸が出る。とそう私の想像通り行くか行かないか分りませんが、もしそうだとするならば、私が無理にここで二時間も三時間もしゃべっては、あなた方の心理作用に反して我を張ると同じ事でけっして成功はできない。なぜかと云えばこの講演がその場合あなた方の自然に逆らった外発的のものになるからであります。いくら咽喉を絞り声を嗄して怒鳴ってみたってあなたがたはもう私の講演の要求の度を経過したのだからいけません。あなた方は講演よりも茶菓子が食いたくなったり酒が飲みたくなったり氷水が欲しくなったりする。その方が内発的な これだけ説明しておいて現代日本の開化に後戻をしたらたいてい大丈夫でしょう。日本の開化は自然の波動を描いて甲の波が乙の波を生み乙の波が丙の波を押し出すように内発的に進んでいるかと云うのが当面の問題なのですが残念ながらそう行っていないので困るのです。行っていないと云うのは、先程さきほども申した通り活力節約活力消耗の二大方面においてちょうど複雑の程度二十を有しておったところへ、俄然外部の圧迫で三十代まで飛びつかなければならなくなったのですから、あたかも天狗にさらわれた男のように無我夢中で飛びついて行くのです。その経路はほとんど自覚していないくらいのものです。元々開化が甲の波から乙の波へ移るのはすでに甲は飽いていたたまれないから内部欲求の必要上ずるりと新らしい一波を開展するので甲の波の好所も悪所も酸いも甘いも嘗め尽した上にようやく一生面を開いたと云って宜しい。したがって従来経験し尽した甲の波には衣を脱いだ蛇と同様未練もなければ残り惜しい心持もしない。のみならず新たに移った乙の波に揉まれながら毫も借り着をして世間体を繕っているという感が起らない。ところが	①削除	①分量の調整

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
145～150	生物の作る環境	国語教材	①（34ページ5行目～11行目）われわれが環境というとき、昔は環境というのは、あるもの、とくに生物学でいうときには、ある生き物（もちろん人間を含めて）の身の回りにあるものを環境ということになっていた。ドイツ語では、これをウムゲーブング（Umgebung）、周りに与えられたもの、という言葉を使って表現していた。だから、独和辞典をひけば、Umgebungすなわち環境と書いてある。他の辞書で環境とひけば、英語ではエンヴァイロンメント（environment）、フランス語ではミリュー（milieu）あるいはアンヴィロンヌマン（environnnement）、ロシア語ではスリェダー（ｃ ｐ е д а ）と記されている。 ②（35ページ12行目～15行目）彼が一九三四年、クリサート（George Kriszat）と共に著した「動物と人間の環世界をめぐる散策」（Streifzuge durch Umwelten von Tieren und Menschen；S.FischerVerlag）（邦訳のタイトルは『生物から見た世界』日高敏隆・羽田節子訳、岩波文庫、二〇〇五年）という小さな本の中で、ユクスキュルはこれについて詳しく論じている。 ③（38ページ1行目）動物にとって意味あるものとは？ ④（38ページ5行目～41ページ2行目）たとえば、イモムシであれば、今、自分が乗っている葉は、自分が食べるべき植物である。したがって、その存在は重要な意味をもつものと認識されている。しかし、そのほかの植物はこのイモムシにとって意味がない。食べられるものではないからである。そしてそれ以外に空気とかいうものは何ら認識する意味はない。結局、その葉っぱというものにだけ意味があるのであって、他のものは存在していないに等しい。 しかし、イモムシにもやはり敵がいる。ハチとかがこのイモムシを食べにくる。それは彼らにとって意味がある。そういうものがきたとき、彼らが落とす影や彼らの翅の動きが起こる。その空気の動きにイモムシたちが重大な意味を与えている。それは何ということのない、そよ風が起こす空気の動きとはちがい、自分の命にかかわるものである。そのような意味をもつ空気の動きに対しては、彼らは身体をくねらして逃げようとする。あるいは、地面に落ちる。そうやって敵を避けようとする。 そういう意味のある存在を彼らは認識できるようになっている。 彼らの世界はほとんどこれらのものから成り立っている。たとえば、美しい花が咲いていようと、それは彼らにとっては意味がない。食物としても敵としても意味のないそのようなものは、彼らの世界の中に存在しないのである。彼らにとって大切なのは、客観的な環境といわれているようなものではなくて、彼らという主体、この場合にはイモムシが、意味を与え、構築している世界なのである。 それが大事なのだと、ユクスキュルはいう。ユクスキュルはこの世界のことを「環世界」、ウムヴェルト（Umwelt）と呼んだ。ウムは周りの、ヴェルトは世界である。つまり、彼らの周りの世界、ただ取り囲んでいるというのではなくて、彼ら主体が意味を与えて作りあげた世界なのであるということを、ユクスキュルは主張した。 したがって、客観的環境というようなものは、存在しないことになる。それぞれの動物が、主体として、周りの事物に意味を与え、それによって自分たちの環世界を構築しているのである。そして、彼らにとって存在するのは、彼らのこの環世界であり、彼らにとって意味のあるのはその世界なのであるから、一般的な、客観的環境というものは存在しない。つまり、いわゆる環境というものは、主体の動物が違えばみな違った世界になるのだというのである。 たとえば、このいわゆる客観的な環境であるちょっとした林の中に、一羽のトリがいたとする。トリから見ると、どの木が、なんという名前の木か、いつ頃実がなるかということは、その時点にしてみると意味がない。なぜならこのトリは、木の実を食べない。虫を食べる。虫を食べるトリにとって、存在するもので意味のあるのは、ひとつは敵であるが、もうひとつは自分の食べ物である。その食べ物は虫である。しかも、このトリは生きた虫を食べる。そのため、動いているものにのみ意味がある。 それは生きているからである。動かないものは意味がない。それは石ころかもしれないし、死んだ虫かもしれないし、そんなものはそのトリは食べない。そうすると、動いていなければだめだということになる。 その小さな虫は、動いているときにだけ、このトリの目に見える、存在するものとして認識される。そして、そのトリは、それをつついて食べようとする。そうやってそのトリは生きている。周りには動かないものはいっぱいあるけれど、そのトリにとっては意味がない。彼らにとってそのような世界は存在していないに等しいということになる。つまり、主体の動物にとって意味のあるのは、その主体の動物の世界を構築しているものだということである。 ⑤（41ページ3行目）1つの部屋がどう見えるか	①②③④⑤削除	①②③④⑤学習上の配慮

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
152～156	貧困は自己責任なのか	国語教材	①（77ページ11行目）貧困と経済格差 ②（75ページ1行目）岩波書店 ③（75ページ12～76ページ14行目）腎臓障害を抱えて透析治療が必要な人Aは、その障害を持たない人Bと同じ暮らしを使用とすれば（同じ「機能」を達成しようとすれば）、そのハンディキャップのために、Bよりも多くの所得を必要とする。それゆえ、AはBより高い所得を得ているのに、Aのほうが不自由な暮らしを強いられる、という場合がある。この不自由さを、センは「潜在能力の欠如」と表現する。 　こうも述べている。 「潜在能力の欠如は、世界におけるもっとも富裕な国々においても驚くほど広く見られる。（中略）たいそう反映したニューヨーク市のハーレム地区の人が四〇歳以上まで生きる可能性は、バングラディッシュの男性よりも低い。これは、ハーレムの住人の所得がバングラディッシュ人の平均的な所得よりも低いからではない。この現象は、保健サービスに関する諸問題、行き届かない医療、都市犯罪の蔓延など、ハーレムに住む人々の基礎的な潜在能力に影響を与えているその他の要因と深く関連している」 ニューヨークのハーレム地区住人の所得がバングラディッシュ人の平均所得を上回っていることは、日本のホームレスの人たちの所得がアフリカの再貧困国の平均所得を上回っていることと同様に、疑いの余地がない。国連が「絶対的貧困」だという一日一ドル以上の所得を得ているホームレスの人は、少なからずいるだろう。しかしそれは、貧困ではない、ということを意味しない。なぜなら、そこには生活上の望ましい状態（機能）を達成する自由（潜在能力）が欠けているからだ。 ④（77ページ7行目～78ページ3行目）「潜在能力の欠如」（自由に選択できないという不自由）は、個人的な要因であると同時に、社会的・環境的な要因でもある。ニューヨークのハーレム地区でたまたま七〇歳や八〇歳まで生きる人がいるからといって、「他の人たちには努力が足りない」と、平均寿命の短さを早く死んでしまう人たちの自己責任で裁断することは妥当ではない。必要なのは、その地域や個人の諸条件を改善して、長寿を可能にする環境を整えることだ。 　それゆえ「開発／発達（development）」とは、単に所得を上げるだけでなく、望ましいさまざまな生活状態（機能）に近づくための自由度（潜在能力）を上げていくことだ、とセンは言う。「開発／発達とは、人々が享受するさまざまの本質的自由を増大させるプロセスである」「開発／発達の目的は不自由の主要な原因を取り除くことだ。貧困と圧政、経済的機会の乏しさと制度とに由来する社会的窮乏、公的な施設の欠如、抑圧的国家の不寛容あるいは過剰行為などである」と。 ⑤（78ページ4行目）″溜め″とは何か	①～⑨削除	①②特定の出版社名を出さない配慮 ③～⑧学習上の配慮 ⑨前後の文脈をつなげる学習上の配慮

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
152～156	貧困は自己責任なのか	国語教材	⑥（79ページ13行目～80ページ4行目）また、あるとき講演後の休憩時間に一服していたら、聴講者の一人が寄ってきて「自分の兄も大変なことになりましてね」と話し出した。聞けば、ヤミ金に手を出してしまって一家離散の憂き目に遭い、もう今どこで何をしているのかわからないと言う。取立て屋たちは「息子の不始末の尻拭いをするのは親の役目だ」と八〇歳になる母親を攻め始めたが、自分が知り合いの法律家に頼んで間に入ってもらい、親にまで被害が広がるのはなんとか防げた、と話していた。このとき、その母親にとって法律家を紹介してくれる彼のような息子がいたことは、重要な人間関係の″溜め”である。 ⑦（81ページ4行目～82ページ5行目）二〇〇六年に相談に来た四七歳の男性は、テキ屋をやっていた父親の都合で小中学校を一五回転校し、中卒で働き始めていた。印象的だったのは、中卒後の三〇年間でさまざまな仕事に就いてきたが、就職活動時の最優先条件は「ずっと寮とまかないが付いていることだった」と言っていたことだ。身一つで社会に出てきた彼にとって、職種や雇用条件（時給、雇用保険・社会保険の有無、有給休暇の有無など）は、就職先を選ぶ際の現実的な条件にはならなかった。学歴も技能も援助してくれる家族も、寝る場所も食べる物も、すべての基本的な″溜め”を欠いていた彼には、寮とまかない付きを探す以外の選択肢がなかった。それゆえに、低賃金で昇給も昇格もない劣悪な諸条件の職場を長く転々とし、いつまでも選択肢のない状態を脱することができずにきた。 格差と貧困の本場、アメリカ合衆国で『ワーキング・プア――アメリカの下層社会』（森岡孝二他訳、岩波書店、二〇〇七年）を書いたデイヴィッド・K・シプラーは、貧困状態で生きていくことは「ヘルメットもパッドも着けず、練習もせず、経験もないまま、体重一〇〇ポンド［訳注・約四五キロ］のひ弱なアメフト選手たちの戦列の後方で、クオーターバックをやろうとするようなものである」と述べている。その無防備さ、そして自分めがけて押し寄せてくる敵陣の熊のような巨漢たちから事実上逃げ回る以外ないという選択肢のなさは、私の言う″溜め”のない状態を語ったものに他ならない。 ⑧（82ページ6行目）貧困は自己責任ではない ⑨（82ページ8行目）先に奥谷発言に触れたように		
158～163	ポピュリズムとは何か	国語教材	①（225ページ9行目）全体を僭称する部分 ②（226ページ12行目～13行目）２　正統性を堪能する人々 反知性主義から権威主義へ ③（228ページ8行目）宗教的熱情と善悪二元論	①②③④削除	①②③④学習上の配慮

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
165～171	トリアージ社会	国語教材	①（117ページ9行目）（立派なひとが運命的出来事の場面に遭遇するよう）	①②③④削除	①②③④学習上の配慮
			②（117ページ11行目）統計的判断の不条理		
			③（118ページ3行目）（山本常朝が『葉陰』で注意を喚起していたように）		
			④（119ページ7行目）道徳の終焉		
			⑤（120ページ2行目～3行目）ある少女が、援助交際を咎められたとき、「だれにも迷惑をかけているわけではない」といったという。	⑤削除	⑤教育的配慮
			⑥（120ページ9行目～14行目）ミルの時代とは異なって、いまはいわば自由の飽和、他人たちの自由を放任するために一人ひとりの自由が損なわれるといった状況にいたっているといえるかもしれない。他人の自由に対しては、すぐにハラスメントが問題にされるように、もはやだれも口出しすることはできない。だから今日では、何が善で何が悪かは、各人の理性ではなく、医師が判断する。医師が病気（異常）であるとするものが悪であり、そうでないもの（正常）が善である。各人の理性的判断とは、いまでは医師の指示に従って、各自の身体と精神の健康に配慮することでしかない。	⑥⑦削除	⑥分量の調節
			⑦（121ページ4行目～11行目）かくして、医師が割りあてる病名と処方によって規定される善悪として、健康と病気、正常と異常とが区別されるようになった。それらは、従来の道徳のように、賞賛されたり非難されたりはしない。道徳は、相互に人格として働きかけあって、よい関係を作ろうとするものであったが、ここでは悪、すなわち病気（異常）と診断されたひとは、だれであれ働きかけるのをやめさせられ、医師の支配下に入る。「意志を強くもて」、「正しいことをせよ」などという道徳的な呼びかけは、自殺するかもしれないからという理由から、決してしてはならないことであって、もっと病気から遠ざかり、もっと健康になるようにと、薬や器具やトレーニングプログラムが与えられてしかるべきなのである。		⑦分量の調節
173～179	権力とは何か	国語教材	①（81ページ1行目）国家権力――領土か生存か	①削除	①分量の調整
			②（82ページ14行目）国家権力の二面性	②削除	②分量の調整

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
185～191	子どもの言語習得	国語教材	①（209ページ7行目）第1章でアイコン性（類似性）の提唱者として言及した ②（212ページ6行目～214ページ7行目）第4章で述べたヘレン・ケラーのエピソードをもう一度考えてみよう。ヘレンは、モノや行為と同時に掌に指で何か刺激を受けること（指文字が綴られること）に気付いていた。モノと刺激のパターンに一定の対応づけがあることも理解していた。 　しかし、掌の刺激が何であるかは理解していなかった。彼女が理解していたのは、観察できる範囲の中で、モノや行為と同時に決まった刺激パターンが掌に与えられる、ということだった。これはすなわち、単純な帰納的一般化と言えるだろう。 　以前にチンパンジーにことばを学習させようという試みがずいぶん行われ、実際にチンパンジーたちはリンゴ、バナナ、くつや赤、青、クロ、黄色などの積み木に対して、それぞれ記号（絵文字）を対応づけることを学習した。ヘレンがwater事件の前に学習していたことは、チンパンジーのモノと記号の対応づけの学習とさして変わらないものだったかもしれない。 しかし、ヘレンは、手に水を浴びたとぎに、サリバン先生が手に綴ったwaterが、この冷たい液体の名前であると理解した。これは、単純な洞察と思われるかもしれない。しかし、ヘレンはそこから「すべてのモノには名前があることを理解した」と述べている。冷たい水を掌に感じ、同時に掌に綴りを感じたとき、彼女は、過去 に遡及してこれまでの経験がみな「同じだった」ことを理解したのである。そして、そこかさらにアブダクションを進め、「すべての対象、モノにも行為にもモノの性質や様子にも名前がある」という洞察を得たのである。 これがいかに大きな洞察であるか。パースが指摘したように、何らかの仮説がないと事実を集めることを始めることができない。第4章で述べたように、人間の赤ちゃんが音（人の声による音の塊）といっしょに現れる対象の間に必然的なつながりがあると感じたり、対応づけに違和感を覚えたりする能力（異感覚マッピングの能力）があったとしても、ヘレンのwaterの場合のように「人の発する音声の塊は対象の名前である」という洞察を得なければ、言語は習得できただろうか？　それ以前のヘレンのように、あるいは研究者によってことばの学習をさせられたチンパンジーたちのように、それ以降、単純に観察できる単語の形式（音声、手話、点字など）と対象のつながりから、「単語の意味」を探究しようとはしないのではないか。そしてさらに、「語彙の仕組み」や「単語をまとめる規則によって意味を作り出す仕組み」の探究を始めようとしないのではないだろうか。 子どもが言語を習得する過程で、「名詞は色や大きさではなく、形の類似性によって一般化される」、「動詞は動作をする人や動作の対象ではなく、動作自体の類似性によって一般化される」という洞察が生まれると先ほど述べた。これもまた、アブダクション推論による洞察である。これによって、飛躍的に語彙の学習が加速するのだ。 ③（215ページ1行目～2行目）朝日新聞の読者投稿欄「あのね」にあったエピソードである。人の役割名に共通する終わり方（接辞）があることを観察し、すかさず一般化した事例だ。 ④215ページ5～8行目）これも「あのね」欄から。3歳の子どもは「なんでお茶じゃなくてソチャなの？」とおばあさんに聞き、お客様には「ソ」をつけるのよ、と聞いたらすかさず、自分のネコを紹介するときに追うようした。 ⑤（216ページ11行目）アブダクション推論による言い間違い	①②③	①②③分量の調整

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
193～199	ファッションの現象学	国語教材	①（35ページ2行目）ファッションの軽薄な重厚さ	①削除	①学習上の配慮
			②（36ページ5行目～11行目）このことを山田は、ファッションを女性的な存在のあり方だとしながら、次のように主張する。 だって女はどんな色にもなれるのだから。どんな女にだってなれるのだから。だから女たちは毎日違った《私》になる。［……］女はすみからすみまで表―面なのだ。あなたの眼に映る表面の外に女は決して存在しない。もしあなたが女からドレスを奪い去ったなら、あなたは裸体というもうひとつの表面に出会うでしょう。女からファッションを取り去ったなら、あなたは衣裳もろともそっくり女を失ってしまうだけ。	②削除	②分量の調節
			③（38ページ9行目）変身と自己	③削除	③学習上の配慮
201～207	日本の社会は農業社会か	国語教材	①（247ページ1行目）村とされた都市	①削除	①学習上の配慮
			②（247ページ6行目～7行目）（「近世北陸における無高民の存在形態―頭振について―」『史学雑誌』一〇一篇一号）	②削除	②学習上の配慮
211～214	数字化される世界	国語教材	①（9ページ11行目～12行目）（いろいろな機器を使って、自分の行動や状態を数値で把握し、その数値をもとに、行動を決めたり、状態を変えていこうとすること）	①②③④⑤削除	①②③④⑤学習上の配慮
216～221	資源はなぜ枯渇	国語教材	①（221ページ18行目）第四章2節で触れたような ②（223ページ18行目）前項で	①削除 ②（72ページ15行目）先に	①②前後の文脈をつなげる学習上の配慮
223～229	ビッグデータ時代の「生」の技法	国語教材	①（140ページ3行目）その全体像を論じるのは、本章の力量と役割を超える。つまり補助線が不足している。そこでもう一つ、	①（228ページ3行目）その全体像を論じるために、	①筆者による、前後の文脈をつなげるための学習上の配慮を伴う加除訂正
			①（143ページ13行目）5　真理のバイパス、〈適正化〉、Citizenship-Rated Society	②削除	②学習上の配慮
			②（144ページ9行目～12行目）ここで、本章で論じてきた第三の思考実験は、個人と主体の〈生の情報化〉を検討した、第3章での第一の思考実験へと回帰することになる。つまり、その真理こそが、私たちの生きることの〈基準〉となることで、生が〈適正化〉される。私たちが〈基準〉に従って生きなければならない理由は、それが“真理”だから、社会的に“正解”である点に由来するのだ。	③削除	③前後の文脈をつなげるための学習上の配慮
231～243	「である」ことと「する」こと	国語教材	①（155ページ9行目）教科書ふうの	①削除	①教育的配慮
			②（157ページ11行目）概念実在論は唯名論に転回させ、	②削除	②学習上の配慮

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
231～243	「である」ことと「する」こと	国語教材	③（158ページ10行目～163ページ3行目）つぎに、右のような典型の対照をヨリ明瞭にするために、徳川時代のような社会を例にとってみます。いうまでもなく、そこでは出生とか家柄とか年齢(年寄)とかいう要素が社会関係において決定的な役割を荷なっていますし、それらはいずれも私たちの現実の行動によって変えることのできない意味をもっています。したがって、こういう社会では権力関係にもモラルも、一般的なものの考え方の上でも、何をするかということよりも、何であるかということが価値判断の重要な基準となるわけです。大名や武士は一般的にいって、百姓や町人に何かをサービスするから、彼らにたいして支配権をもつとは考えられないで、大名であり武士であるという身分的な「属性」のゆえに当然――先天的に――支配するという建て前になっています。譜代の臣とか株仲間とか家元とかいうのは、いずれもこうした意味での「である」価値であって、具体的な貢献やサービスによって、はじめてその価値が検証されるものとはされてないわけです。（中略） もう一つちょっと逆の象徴的な例をあげますと、川端康成さんの新聞小説に『女であること』というのがありました。それを読みますと、女性のきわめて微妙な感覚の動きや細かい心理のひだまでが私共に伝わって来ます。川端さんの小説を離れても、私達は女「である」という属性――セックスはいうまでもなく人間の属性です――からして、女らしさとか女らしい行動様式というものについてさまざまのイメージを思い浮べることができます。もちろん男らしさという言葉もあり、またそれに付随するイメージもありますが、どうもやはり男と女との間にはちがいがあるようです。すくなくも「男であること」というのは小説の題名としては不自然で、なにか滑稽な感じが伴います。それには色々理由があるでしょうが、何といっても、男性の方が社会的に多様な活動をし、多様な役割を演じているのに対し、女性とくに家庭にいる女性は、妻としての役割、母としての役割が大部分であり、したがって、女「である」ことから、女性の行動様式が「自然に」でて来る面が比較的に多いということが背景になっていると思います。ですから、かりに女性が男性とまったく同じ程度に社会的に多様な役割を担当しているような社会があるとして、果して女であるという属性からして、私達日本の社会ほどに女らしいふるまい、女らしい言動というものを具体的なイメージとして思い浮べることができるかどうか、すくなくもそういうところでは、流石の川端さんを以てしても「女であること」は小説の題名になりにくいのではないかと想像されます。これはいい悪いの問題というより、人間の置かれた状況の複雑化が、人間のふるまい方に、また人間を見る眼にどういう変化をおこすかという問題を単純化した例で申上げたわけです。	③削除	③前後の文脈をつなげるための学習上の配慮
			④（164ページ12行目～174ページ3行目）たとえば一般的にいって経済の領域では、「である」組織から「する社会」組織へ、「属性」の価値から「機能」の価値への変化がもっとも早く現われ、またもっとも深く浸透します。封建的土地所有から「資本」の所有へという巨大な変化にそれが現われていることはいうまでもないでしょう。同じ資本主義でも、それが高度になると所有と経営の機能的な分離といわれている傾向がでて来ます。株主であること、資本の所有者であることと、経営をすることとは必ずしも一致しなくなる。サラリーマン重役という言葉は、日本の場合にはまた特殊の意味合いをもっていますが、一般に高度の資本主義の下では経営者はすべてサラリーマンであって、トップ・マネジメントということがますます独立した仕事になって来ます。無能な金持ということはあまり問題にならないが、有能な経営者をうるかどうかということは企業にとって死活の問題になります。もちろん経営と所有の分離といっても、資本主義的な所有関係のワクの中のことであって、社会主義の考え方はむしろこのワクをやぶって、「する」ことの論理を経済組織において貫いて行こうというところから出て来たともいえるでしょう。ところが、ここで厄介な問題があります。それは政治の領域では経済に比べて「する」論理と「する」価値の浸透が遅れがちだということです。政治の世界では、政治において「する」原理を適用するならば、それは指導者の側についていえば、人民と社会に不断にサービスを提供する用意であり、人民の側からは指導者の権力乱用をつねに監視し、その業績を絶えずテストする姿勢をととのえているということになるわけです。私たちの国の政治がどこまで民主化されているかを、制度の建て前が民主主義であるということからでなしに、右のような基準で測ってみたらどうでしょうか。現在何に貢献しているか、いかに有効に仕事をしているかにかかわりなく、ただコネとか資金の関係で、または長く支配的地位についていたとか、過去に功績があったとかいうことで、政治的ポストを保っている指導者が大は一国の政治家から、小は村のボスまで、右は自民党から左は共産党まで、どんなにうようよしていることか。派閥とか情実の横行ということも、つまりは「『する』こと」の必要に応じて随時に人間関係が結ばれ解かれる代りに、特殊な人間関係それ自体が価値化されるところから発生してくるものなのです。（中略）	④⑤削除	④学習上の配慮 ⑤前後の文脈をつなげるための学習上の配慮

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
231～243	「である」ことと「する」こと	国語教材	警職法の問題のとき「静かなデモ」の先頭に立ったある文学者が「私は何も政治活動をしたとは思わない。文学者として当然の行動をしただけだ」と述べていたのを何かの新聞で読んだ記憶があります。これは平素は文字どおり「静かな」性格の人としての自然の感想にはちがいないでしょう。けれどもそこには、やはり政治活動を通常の市民生活とは全く隔絶したところで、特殊の人間によって営まれる活動とみる日本の伝統的な考え方が強く作用していると思われます。もちろん文学者――たとえばこれは教育者でも同じですが――の政治活動は職業政治家の活動とはおのずから異っています。後者は権力を目的とする活動ですが、この文学者の揚合は権力を目的としないのはむろんのこと、およそなんらかの政治的動機から発する活動でも恐らくないでしょう。しかしどうして権力を直接目的とする活動だけが政治活動なのか。どうして学問や芸術といったそれ自体非政治的な動機から発するいわばいやいやながらの政治活動があっていけないのでしょうか。ここに潜んでいる、政治と文化とをいわば空間的＝領域的に区別する論理こそまぎれもなく、政治は政治家の領分だという「である」政治観であります。それが打破されないかぎりは、いったん政治の世界にはいったものは行住坐臥すべての活動と考え方が「政治的」になり、反対にその世界の外にある者は政治に全く縁なき衆生―という「あれかこれか」の態度が個人についても国民の歴史についてもつきまとい、あるいは極端な「政治主義」から急激に一切の政治的問題に背を向ける、われ関せず焉の態度に変り、それからまたオール政治主義になるというふうに両者が交互に反覆していくことを避けられないのです。		
			⑤（176ページ1～7行目）この矛盾は、戦前の日本では、周知のように「臣民の道」という行動様式への「帰一」によってかろうじてびほうされていたわけです。とすれば「国体」という支柱がとりはらわれ、しかもいわゆる「大衆社会」的諸相が急激にまん延した戦後において、日本が文明開化以来かかえてきた問題性が爆発的に各所であらわになったとしても怪しむにたりないでしょう。ここで厄介なのは、たんに「前近代性」の根強さだけではありません。むしろより厄介なのは、これまで挙げた政治の例がしめしているように		
			⑥（177ページ9～12行目）日本の大学における悪名高い教授の終身制は一面ではたしかに学問的不毛の源泉であり、なんらかの実効的な検証が必要といえます。けれども皮肉なことには、こうした日本の大学の「身分的」要素が、右のような形の「業績主義」の無制限な氾濫に対する防波堤にもなっているのでして、それほど文化の一般的芸能化の傾向はすさまじいといわねばなりません。	⑥⑦⑧⑨学習上の配慮	⑥⑦⑧⑨学習上の配慮
			⑦（179ページ7行目）前にのべたような		
			⑧（179ページ7行目）（文化人のではない！）		
			⑨（179ページ15行目～180ページ1行）トーマス・マンが戦後書いたもののなかに「カール・マルクスがフリードリヒ・ヘルドリンを読む」ような世界という象徴的な表現があります。マンの要請を私なりに翻訳すると右のような意味になります。		

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
248～253	「自然を守る」ということ	国語教材	①（29ページ24行目～30ページ14行目）すなわち、人間は、「身体」なしには生きていけない。そしてその「身体」は、自然から「恵み」を受け取ることではじめて生き続けていくことができる。この意味で、人間は、自然の奴隷なのである。→たとえば、睡眠について考えてみよう。人間は睡眠なしには生きていけない。もし眠らなければ、人間は死んでしまう。人間の理性は睡眠の奴隷なのである。ではなぜ睡眠があるのだろうか。それは脳を休息させて再生させるためだといわれている。睡眠のリズムはだいたい24時間だ。つまり、地球の自転のリズムに合わせられている。それはすなわち、昼と夜とが交代するリズムであり、海の潮が満ち引きするリズムであり、人間のはるかな祖先がまだ海のなかで生活していたころに「身体」に刻み込まれたリズムである。今日の人間のすべての生活様式や、社会システムは、人間が24時間の睡眠リズムに支配されているという事実を前提にしてつくられている。 人間の内部に体内時計のかたちで組み込まれた睡眠リズムは、人間を取り巻く大海原や、大地や、日月の満ち欠けなどの大自然のリズムと共鳴している。人間の身体の内部にある「内なる自然」は、人間を取り囲む「外なる自然」と、分かちがたく共鳴しており、この共鳴関係は人間の祖先となる生物種が海から地上に這い上がってきたころからすでに体内に組み込まれていたと考えられるのだ。人体の塩分濃度が、海のそれと同じであることや、女性が卵巣から腹腔内に、月に一度、ちょうど魚のようなかたちの排卵をすることなどを考えても、人間がみずからの内部に大自然の破片を組み込んでいることは容易にわかるであろう。	①削除	①学習上の配慮
255～261	物語としての自己	国語教材	①（45ページ7行目～18行目）このことは、さきほどのアルコール依存症者の話にもあてはまる。入院していた頃は、「いま入院中の自分」という「現在」に連なるものとして過去の失敗や苦労の経験が整理され語られていたが、その数年後には、「今日まで数ヶ月間も断酒している」という「現在」に連なるものとして過去が語られる。「現在」を一つの結末として、過去の失敗や苦労の経験が取捨選択され整理されたとき、その語りは、そのひとの自己物語として一貫性を獲得するのである。 したがって、「現在」が変わるたびに、物語は書き換えられなければならない。たとえば、アルコール依存症者が、この話をした数日後にまた飲んでしまったとしよう。そのとき、今度は、「また飲んでしまった自分」という「現在」を「結末」とするような物語として書き換えられなければならなくなる。そのとき、かつてはとても大切なものとして語られたセルフヘルプ・グループへの参加も、ネガティブな色あいを帯びて語り直されるようになるかもしれない。あるいはこの再度の失敗の「予兆」となるような出来事が思い出され、語られるかもしれない。このように、物語は、「現在」によって書き換えられていくのである。 ②（47ページ9行目）5自己を語る言葉 ③（47ページ10行目）さまざまな自己	①～③削除	①～③学習上の配慮

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
292～299	自分自身を語るために	国語教材	①（504ページ下段14行目～505ページ上段15行目）きっかけのひとつは、ラスナヤケ・リヤナゲ・ウィシュマ・サンダマリさんの死亡事件をめぐる訴訟についての報道を見たことだった。2023年9月27日に名古屋地裁でおこなわれた口頭弁論では、入管の対応に問題はなかったとする石の意見書が国側から提出された。それによると、「私、死ぬ」、「息、難しい」などのウィシュマさんの発言は「看守の注目を集めるため」であると主張されていた。直前の診察で異常がなかった以上、深刻な状態にはなかったはずだ、というのだ。 　苦痛に関する報告は、一人称権威が成り立つと言われるものの典型だ。私が「歯が痛い」と嘘や冗談や演技でなく言っているとき、それを疑うひとは普通いないし、仮に歯医者に行って異常が見つからなかったとしても、「そもそも痛みなどないのでは？」と結論されることはない。「痛い」と言っている以上、痛みはあるに違いなく、何か別の原因によって痛みが生じているのだろう、と普通は考える。苦痛を語る言葉は信頼性をもつのだ。 　でも、ウィシュマさんの場合にはそうならなかった。診察で異常が無かったという理由で、ウィシュマさんが自分自身の苦痛について語った報告は退けられた。しかも、その理由となった診察は苦痛を訴えている時点でなされたものでさえなく、あくまで「直前」の診察だ。ウィシュマさんは、苦痛という他人からは確かめようがないはずの心のありようについて、他人から断定され、本人の主張は否定された。これはいったいどういうことなのだろう？　一人称権威は哲学的にも日常的にも当たり前の前提ではなかったのだろうか？	①②削除	①②学習上の配慮
			②（506ページ下段10行目～507ページ7行目）ウィシュマさんの件も、もしかしたらそうかもしれない。ウィシュマさんは、本当は苦痛を感じていないのに「看守の注目を集めるため」に嘘をついて苦痛を訴えていた、と国側は主張している。だが、それに先だって、ウィシュマさんの苦痛の訴えを嘘だと断定する理由は何かあったのだろうか？　直前の診察？　けれど、診察のすぐ後に苦痛の訴えがあったとき、普通それは即座に嘘だと決めつけられるのではなく、むしろ体調が急変した可能性を示すものと見なされるのではないか。もちろん、実施に起きたことの詳細について私は知らないし、報道される内容をもとに想像で語るほかないのだが、もしかしたら自体は逆で、ウィシュマさんには一人称権威がはじめから認められておらず、そのことを正当化するためにあとづけ的に「嘘をついている」という理由が構成されたのではないだろうか。		
311～317	真実の百面相	国語教材	（26ページ5行目）音キチ	（314ページ12行目）マニア	教育的配慮
319～326	貨幣共同体	国語教材	①（211ページ7行目）（Gemeinscaft） ②（211ページ15行目）（Gesellschaft） ③（211ページ17行目）（Zweckverband） ④（212ページ12行目～17行目）（言語共同体も同様である。言語共同体を言語共同体として成立させているのは、ただたんにひとびとが同じ言語を言語として使っている事実のみである。たしかに貨幣は円やドルといったひとつの価値単位に還元できるのにたいして、言語はひとつの価値単位には還元できない多種多様な言葉や文によって構成されている。だが、貨幣共同体と言語共同体とのあいだには、貨幣共同体のほうが言語共同体よりはるかに単純な構造をしているということ以外は、ほぼ完全な対応関係がある。） ⑤（213ページ5行目～6行目）個々の買い手の立場から貨幣の存立構造を分析した第三五節の議論を今度はここで貨幣共同体にあてはめてみれば、 ⑥（213ページ9行目）40 「異邦人」とハイパー・インフレーション ⑦（213ページ12行目～15行目）貨幣という存在の前には、価値なるものに人間の労働という実体的な根拠をあたえようとしてきた古典派経済学やマルクス経済学も、価値なるものに人間の欲望という主体的な根拠をあたえようとしてきた新古典派経済学も無力である。	①～⑦削除	①～⑦学習上の配慮

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
345～347	戦争は女の顔をしていない	国語教材	①（162ページ2行目～164ページ4行目）「私は彼女の話をたくさん憶えている。孫たちのために覚え込んで、自分の話より、彼女のこういう話をきかせてやるんです。彼女の話の方が孫たちにはおもしろいらしいんですよ」とサウルさんは続ける。 「私のはもっと具体的な戦争の知識だ。彼女のは気持ちだ。気持ちの方がいつだってこういうことがあったという知識よりもっと強烈だ。歩兵部隊にも女の子がいたが、その中の一人でも姿を現すと私たちはしゃきっとしたものだった。分かります？これも彼女の口まねです。戦地で女たちの笑い声が聞こえるのがどんなにありがたかったか。女の声は。 戦場のロマンスもあったか？　もちろんあった。戦場で出会った女性たちはすばらしい女房になれる人ばっかりだ。信頼できる友であり、戦場で結婚したペアはもっとも幸せなカップルだった。私たちも戦地で恋に落ちた。周りは火が燃えさかり死が渦巻いているのに。これほどの堅いちぎりはない。もちろん幸せな例ばかりじゃない。戦争は長くていろんな人たちがいたのだから。だが、明るい、崇高なことのほうを良く憶えている。 戦争で私はよりよい人間になった……疑いもなく！　人間として成長した。戦地ではたくさんの苦しみがあったから。苦しんでいる人をたくさん見たし、自分も苦しんだ。戦地では一番重要な事以外はすぐ頭から抜けていく。そういうものは不用なんだ。それをあそこでは理解する……でも私たちは戦争の復讐も受けています。自分でそれを認めるのは怖いんだが。あの戦争から逃れきれない……我々のような両親を持つ娘たちは、必すしも幸せな結婚をしてない。その理由は母親たちが戦地を経験していることだ。戦地で身につけたその感覚で躾けられてますから。そして父親もそうだ。戦地のモラルで。すでに言ったことだが、戦場では人間の正体がすぐはっきりする。隠しようがない。 娘たちは、人生では自分の家庭とはちがうこともあるなんて想像もできない。世の中の残酷な裏側を教えられていない。そういう娘たちが結婚する時、卑怯なやつらに簡単にダ成される。こういう娘たちを騙すのなんかわけない。多くの戦友の子供たちがそういうめに会っていて、私の娘もその口だ……」 「うちの子供たちにはなぜか戦争の話をしなかったわ。怖かったし、たぶん、子供たちを哀れに思ったのね。それが正しかったのかどうか？」オリガ・ワシーリエヴナは考え込みながら語った。 「勲章の勲章も付けたことないわ。一度もぎ取ってしまって、もうそれきり。戦争のあとで私はパン工場の工場長をして、私が勲章を付けて会議に出席したのを見て、その企業の幹部が、やはり女性でしたが、みんなの前で『あなた、男みたいに勲章なんかごてごて付けて』と言うんです。その人も勤労勲章の略章をいつもスーツの上着に付けていたのに。私が戦争でもらった勲章はなぜか気に入らない。会議のあとで二人きりになった時、私は思っていることを海軍で使った乱暴な言葉ではっきり言ってやったので、彼女はばつが悪くなって黙ってしまったけど、私ももうそれっきり勲章を付ける気が失せてしまった。もう付けません。でも誇りには思ってるわ。	①削除	①分量の調整

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
348～354	模倣と「なぞり」	国語教材	①（186ページ2～4行目）（一般に、「型」は普遍的原型であり、「型」は個別的事例であって、鋳型と鋳型製品の関係にたとえられる。これについては青木孝夫氏の研究が詳しい）。また「型」を心身態勢のパターンとして、あるいは個々の事例に具現されるべき「らしさ」の図式として語ってきた私たちの用法とも矛盾しない。	①削除	①前後の文脈をつなげる学習上の配慮
			②（187ページ10行目～188ページ4行目）ある形をとった身体に「型」が具現しているか否かは、不思議なことに素人にも、見ればわかるものである。動けばもちろんだが、静止していてすらある程度わかる。伝統芸能や武道では「構え」をやかましく言うが、たしかに達人の構えはひと味違う。一方、初心者の形はどこかぎこちなくて「おかしい」と見える。どこが違うのかを形の上で指摘することは指摘することは素人にはできないが、どこか感じが違うのである。しかたがないので私たちは「力がない」とか「風情がある」とか「存在感」といった不器用なことばを使ったりする。この違いは、対象に属する特徴の違いというより、それを私たちが経験するときの心身パターンの違いであり、ウェルナー流に言うなら「相貌的知覚」の違いであるだろう。 「型」が身につくとは、どう動いても形が「型」の具現例になっているということである。「型」は同じでも各人の好みや特性に応じて、また観客や演出意図等の状況に応じて形は多様なヴァリエーションをもち得る。むしろ生物的身体条件が個人によって違うことを思えば、同じ「型」を具現しようとする弟子の形は師の形とは違ってくるのが自然であろう。「型」を身につけた弟子は師の模倣の段階を脱し、自ら形を作り出すのである。	②削除	②分量の調節
			③（187ページ4・5行目）（このような「妙」と言われる芸の最終的境位については金春禅竹の能楽論が詳しいのだが、禅の思想に依拠した彼の言葉を持ち出すと話が神秘的になるだけなのでここには引かない）	③削除	③学習上の配慮

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
364～370	難民が問題になるとき	国語教材	（179ページ4行目～189ページ） ①現代移民の起点 　現代の移民研究や難民研究のあり方を再考する重要な鍵は、この時代にあります。越境する人の移動の管理は国家の主権行為の一つでしたが、出入国にかかわる諸制度が整備され、有効に働くようになったのは二〇世紀に入ってからのことです。世界最大の移民受け入れ国であるアメリカにおいて、国境の管理が国境警備隊として全国的規模で展開されたのは一九二〇、三〇年代のことでした。さらにパスポートにおいて写真や指紋などの個人認証の技術的な方法が導入されたのも、本人と同定しうるようになったのも、ほぼ同時期のことです（ジョン・トーピー『パスポートの発明』）。 出入国管理や国籍、さらに国境警備などを含めた移民管理は、人々を個として識別し、国境において人々の移動を管理するシステムとして完成しました。それは、人の移動を個として管理しうる国家的な規模での組織的な制度でした。まさに移民を管理することが国民を管理する方法として制度化されてきたわけです（高野麻子『指紋と近代』）。 アメリカでは、同時期に国境警備や出入国の管理だけでなく、中国人に加えて日本人移民の排斥などアジア人に対する移民規制が行われました。さらに二度の憔界大戦によって、交戦国であるドイツ人移民などは帰国を余儀なくされます。第一次大戦前に、年間一〇〇万人を越えた移民は一〇万人台にまで減少し、大西洋･太平洋を渡る移民は激減しました。ただしアメリカは、第二次世界大戦への参戦によって深刻な労働力不足に陥り、メキシコやカリブ地域からの労働力の確保を図ることになります。戦後のラテンアメリカなどからの大規模な移民労働者の流入ルートは、まさにこの時期に形成されたのです。 総力戦体制と原蓄過程 したがって、この戦争期ならびに戦後の占領期は「移民の終焉した時代」などではなく、歴史的に類を見ない規模の人り移動の時代だったとみるべきでしょう。総力戦といわれる植民地を含めた戦争の拡大は、当事国のみならず、植民地地域の人々をも戦争に巻き込みました。それは志願兵といったかたちだけではなく、物資の調達などを通じて民間の人々を動員し、さらに植民地の人々を生存手段から引き剥がすことによって、強制的な動員を図るものでした。これまで移民とは無関係であった人々が、この過程で否応なく移動させられるようになったのです。 さらに第二次世界大戦後の混乱期としての後の占領期・冷戦体制期において、インドのような領土の再確定、アフリカ諸国における独立に伴う国民国家の形成と再編成が、世界的な規模で、しかもしばしば暴力的なかたちで遂行され、国民交換などの大規模な人の移動が引き起こされました。 総力戦体制期は国民国家と移民との関係が劇的に変化した時代であり、民間人ならびに植民地の人々が戦争へと動員され、きわめて短期間に、しかも世界的な規模で人が移動した、もう一つの移民の時代でした。植民地主義という暴力的な労働力化が、世界戦争の過程で一挙に推し進められたわけです。その意味で総力戦体制は、植民地地域を含めた未曾有の規模での世界的な原蓄過程、すなわち新規の追加的労働力供給確保だったとみることもできるでしょう(C・メイヤスー『家族制共同体の理論』、ジェームズ・C・スコット「ゾミア』)。 戦後の占領期は、その原蓄過程で析出された労働力が、独立国家となった発展途上国政府ならびに占領軍の権力によって産業化へと組み込まれた時代でした。戦時に析出された労働力は、戦後に世界的規模で展開する資本のグローバルな労働力編成の前提条件を生み出す基盤となりました。大戦後に独立を遂げた旧植民地諸国は、曲がりなりにも独立国家として国民国家・国民経済を掲げ、アメリカや旧ソ連など大国を後ろ盾とした権威主義体制によって工業化計画を遂行しました。発展途上国における無尽蔵の人口は、国民としてだけでなく、世界展開を遂げつつある先進国巨大企業によってさまざまな労働形態の労働力として、再発見されたのです。 発展途上国の労働が世界的な労働力編成に組み込まれる条件は、占領を通じた、発展途上国のいわゆる近代化の過程において醸成されました。冷戦体制の下で、占領軍は必要とする労働力を現地において醸成されました。冷戦体制の下で、占領軍は必要とする労働力を現地あるいは他の占領地から調達することになります。その典型例は、アメリカ軍による東アジアの占領空間です。韓国やフィリピンなどにおいて、アメリカ軍の駐留は、現地ならびに他のアジア諸国からの大量の労働力によって支えられてきました。民間人の調達範囲は、さまざまな軍事施設や港湾や空港などの軍関係施設の建設とともに、医療やケアから娯楽さらに家事や育児などを含めた広範な分野に拡がっていきます。	①②③削除	①分量の調整

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
			こうした駐留軍の基地建設や住居、港湾などの交通網の整備などに供給される資材、日常の消費財などの生産には、一定のアメリカの基準が求められました。こうしたいわば「国際基準」によって、世界的な規模で拡がるアメリカの占領空間に利用されうる製造業や土木・建設業が、アジア地域に群生することになりました。この過程を通じて、アジア諸国のなかのいくつかの国は、アメリカ標準の製造技能だけでなく、財閥へと発展する企業を生み出すとともに、その後の海外労働力供給を可能にする人材の条件を獲得していきます（洪志瑗「韓国における労働力移動の展開とベトナム戦争」）。 ここに製品輸出の拡大だけでなく、東アジアからの大規模な移民労働者排出の条件が上製され、その後の中東産油国での建設労働から欧米諸国への大量のケア労働者にいたる、アジア系出稼ぎ移民の前提条件ができあがることになりました。第二次世界大戦後の占領空間の広がりが、発展途上国の労働編成をグローバルな労働編成へと添加する契機を準備したのです。 二度の世界戦争とその後の占領の時代を通じて、かつての植民地地域はグローバルな労働力の供給地として組み込まれていきます。旧植民地住民は、ふたたび膨大な労働力として発見されたのです。多国籍企業と呼ばれるグローバル資本は、この無尽蔵の労働力を、現地生産ならびに移民労働として利用することが可能になりました。こうした国境を越える資本と労働の移動の交差を通じて、労働力のグローバル化は展開してきたのです。 人の移動は、グローバルな労働力編成のなかで、移民、難民、不法移民といった分類を通じて統治されます。しかし、いまグローバルな労働力編成の新たな局面では、労働力のグローバル化を越えて、労働市場のグローバル化へと拡大してきています。それが難民といわれる存在を大規模に生み出す条件でもありました。 ②（189ページ1～2行目） 4　難民と労働市場のグローバル化 旧宗主国への移民 ③（185ページ5行目） 労働市場のグローバル化		
372～376	思考の誕生	国語教材	①（181ページ3行目）大学では、 ②（182ページ15行目～16行目）二〇世紀も終わろうとしているこの時期に、 ③（184ページ12行目）東京大学	①②③削除	①②③学習上の配慮
383～387	異時代人の目	国語教材	①　一九五〇年代に私が、カラヴァッジオの研究を始めたとき、彼の同時代人たちの評価と、二十世紀の五十年代の批評家のそれとが全く対立していることに驚いた。カラヴァッジオを無教養で粗暴な二流の画家であるということを最初に書き残したのは、彼と同時代人のバリオーネである。彼は画家としてはマニエリストだったから、この革新者が許せなかったし、その才能を憎悪してもいた。その上を行ったのが、すこし後の、しかしやはり同じ世紀のベッローリだが、彼はラッファエルとプサンとアカデミズムが信条だから、それこそ信念をもって、マニエリスムとカラヴァッジオを撃破した。それからヴィンケルマンやベレンソンまでは一筋道だった。カラヴァッジオをマイナー・ペンターの列に葬ったのは、初めはマニエリストと反宗教改革の権威筋だったが、後では絶対王制と、これと結んだ古典主義的理念である。バリオーネの個人的憎悪から始まって、イデオロギーや政治や一つの美学や体制がいっしょくたになって歴史をつくってきた。このような巨大な水圧の下で生き延びられる芸術家はきわめて少ない。カラヴァッジオが「正当」な扱いを受けるのに、彼の死後おおよそ三百年の時間のズレが必要だった。それでも彼は息があったからまだいい。いわれない差別に苦しんだ無数の人々、すべてのふさわしい報いを受けなかった有徳の人や天才や不幸な恋人たちの「魂」はどこまで救われるのか！歴史は大いなる暗闇である。不具にされ、変形され、ときには惨殺された「真実」がルイルイと横たわっている。そこを行くには、コクトーの『オルフェ』のように、非常な苦しみを持って時間をさかのぼらなければならない。それが深海や宇宙の暗黒となることがあろうか？	①削除	①学習上の配慮

加 除 訂 正 表

申請図書			原文（ページ数・行数は原文のもの）	加除訂正文（ページ数・行数は申請図書のもの）	理由
ページ	名称	種別			
389-396	巫女の視点	国語教材	（5ページ10行目） ①もしここに社会学の先駆的な形式を認めることができるのだとすれば、次のような見通しをうることができるだろう。すなわち、この共同体において一種の「社会学」がいかなる社会構造の下で可能になっているのかをそれ自身社会学的に解明することを通じて、〈社会学する〉ということの構成を例示することができるに違いない、と。要するに、〈（遠野の共同体において）社会学すること〉を〈社会学すること〉を通じて、〈社会学すること〉の構造を具体的に示すことができるのではないだろうか。	①削除	①学習上の配慮
			②（10ページ2行目）先に、 ③（10ページ3行目）と述べた。	②③削除	②③前後の文脈をつなげるための学習上の配慮
398～405	ものとこと	国語教材	①（6ページ13行目～7ページ12行目）例えば「存在論」という哲学の一領域がある。ここでは本来、「あるということはどういうことか」が問題にされる。あるということは、もちろんそのままの姿ではものではない。しかしこれを従来の存在論が行なってきたように、「存在とは何であるか」、「存在とはいかかるものか」という形で問題にすると、「あるということ」がたちまちものとなる。われわれは存在というものを外から見て、ああでもないこうでもないと思案をめぐらすことになる。「何であるか」、「いかにあるか」という問いの対象となりうるもの、それはつねに客観的なものである。このもの、あのものとして名指され、名指されることによって固定されるようなものである。あるということは、それが「何か」という問いの対象にされるやいなや、それ自身であることをやめてしまう。あるということは、われわれがそれであることによってのみ、それがどういうことであるのかがわかるような、そういう事実である。事実であると言ってしまえば、またものになる。あるというのはそういうことなのだ、とでも言っておくよりしようがない。 　このようにしてわれわれは、覚めた意識をはたらかせているかぎり、内部も外部も至るところものまたものでで埋めつくされた空間の中に住んでいる。この空間内では、われわれひとりひとりもそれぞれ一つのものである。われわれの肉体がものであるだけではない。われわれの自己といわれるものも、その同一性も、他者の心のようなものも、われわれがそれを見るかぎりにおいては、ものとしてわれわれの眼の前に現れてくる。 ②（7ページ13行目）ことの世界	①～③削除	①～③学習上の配慮

加 除 訂 正 表

申請図書			原文(ページ数・行数は原文のもの)	加除訂正文(ページ数・行数は申請図書のもの)	理由
ページ	名称	種別			
398～405	ものとこと	国語教材	③(8ページ3行目と4行目の間の注釈)＊　日本語の「こと」と「もの」との存在論的な差異について最初に哲学的考察を行なったのは和辻哲郎である(『続日本精神史研究』、岩波書店、四一七頁以下)。最近では廣松渉氏がこの問題をめぐって高い水準の議論を展開している(『事的世界観への前哨』、『もの・こと・ことば』、ともに勁草書房)。本書ではこれらの著作を特に引用しなかったが、私の思索は両氏の視点から大きな影響を受けている。		
407～416	「病気」の向こう側	国語教材	①(307ページ4行目)2　「病原体」と出会う難しさ ②(309ページ7行目)3　「病原菌」の科学が生まれるために必要だったもの ③(311ページ5行目)4　私たちの「病気」の向こう側にあるもの	①～③削除	①～③学習上の配慮
418～426	過剰性と稀少性	国語教材	①(273ページ9行目)以上で述べてきたところからすると、 ②(277ページ7行目)先にも述べたように、 ③(277ページ14行目)「過剰性の原理」が「稀少性の原理」をもたらす	①～③削除	①～③学習上の配慮
436～444	戦争と平和についての観察	国語教材	①(56ページ9～57ページ4行目)一九四一年に太平洋戦争が始まった時、三六年前の日露戦争を知る者は連合艦隊司令長官・山本五十六独りであって、首相の東条英機は日露開戦の時、士官学校在学中であった。 　第一次大戦はプロシャ・フランス戦争の四三年後に起こっている。大量の死者を出して帝国主義ヨーロッパの自殺となったこの戦争は、主に植民地戦争の経験しかない英仏の将軍たちとフランスに対する戦勝を模範として勉強したドイツの将軍たちとの間に起こった。 　今、戦争をわずかでも知る世代は死滅するか現役から引退しつつある。 ②(60ページ2・3行目)大正の十五年間に生きた二五年間に生まれて	①削除 ②(454ページ3行目)大正十五年の約二五年間に生まれて	①学習上の配慮 ②筆者による教育的配慮を伴う加除訂正

ウェブページのアドレス等の掲載箇所一覧表

申請図書			学習上の参考に供する情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	
		二次元コード	自社ページ	自社ページURL	QRコードフロントページ。ウェブコンテンツ一覧。	別紙1
		二次元コード	自社ページ	自社ページURL	「羅針盤・1　比べて読もう　中島敦「山月記」が描く「わかりあえなさ」」（18ページ）の参考資料として、「山月記」（中島敦）の全文と注釈を掲載。	別紙2
		二次元コード	自社ページ	自社ページURL	「物語るという欲望」（21ページ）の参考資料として、「山月記」（中島敦）の全文と注釈を掲載。	別紙3
		二次元コード	水戸芸術館	https://www.arttowermito.or.	「科学の詩学へ」（27ページ）の参考資料として、「水戸芸術館」の中谷芙二子作品を紹介。	
		二次元コード	長野県立美術館	https://nagano.art.museum/f	「科学の詩学へ」（27ページ）の参考資料として、「長野県立美術館」の中谷芙二子作品を紹介。	
		二次元コード	ジョン・レノン公式YouTubeチャンネル	https://www.youtube.com/wa	「『象徴的貧困』に立ち向かうために」（51ページの参考資料として、ジョン・レノン公式YouTubeチャンネルより「imagine」を紹介。	

申請図書			学習上の参考に供する情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	
		二次元コード	沖縄市平和学習コンテンツサイト	https://www.city.okinawa.oki	「沖縄戦を聞く」(93ページ))の参考資料として、沖縄市平和学習コンテンツサイトより「沖縄戦の歴史」解説を紹介。	
		二次元コード	男女共同参画ウェブサイト	https://www.gender.go.jp/int	「男の絆、女たちの沈黙」(110ページ)の参考資料として、男女共同参画ウェブサイトより世界各国のジェンダーギャップ指数ランキングを紹介。	
		二次元コード	自社ページ	自社ページURL	「現代日本の開化」(120ページ)の参考資料として、「こころ」(夏目漱石)の一部抜粋と注釈を掲載。	別紙4
		二次元コード	自社ページ	自社ページURL	「現代日本の開化」(120ページ)の参考資料として、「夢十夜」(夏目漱石)の一部抜粋と注釈を掲載。	別紙5
		二次元コード	映画『うたうひと』の公式ウェブサイト	https://silentvoice.jp/utauhit	「物語りについて」(127ページ)の参考資料として、映画『うたうひと』の公式ウェブサイトを紹介。	
		二次元コード	青空文庫	https://aozora.binb.jp/reader	「物語りについて」(127ページ)の参考資料として、青空文庫上の『遠野物語』を紹介。	
		二次元コード	青空文庫	https://aozora.binb.jp/reader	「物語りについて」(127ページ)の参考資料として、青空文庫上の『山の人生』を紹介。	

申請図書			学習上の参考に供する情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	
1	8	二次元コード	自社ページ	自社ページURL	「羅針盤・2　比べて読もう　夏目漱石「こころ」の「語り」」（135ページ）の参考資料として、「夢十夜」（夏目漱石）の一部抜粋と注釈を掲載。	
		二次元コード	デニス・オルークの公式ウェブサイト	http://www.cameraworklimite	「ファンタジー・ワールドの誕生」（136ページ）の参考資料として、デニス・オルークの公式ウェブサイトを紹介。	
		二次元コード	「時国家（本家　上時国家）」の公式ウェブサイト	https://tokikunike.jp/	「日本の社会は農業社会か」（201ページ）の参考資料として「時国家（本家　上時国家）」の公式ウェブサイトを紹介。	
		二次元コード	「重要文化財 時國家【下時国家】」の公式サイト	http://www.tokikunike.com/	「日本の社会は農業社会か」（201ページ）の参考資料として、「重要文化財 時國家【下時国家】」の公式サイトを紹介。	
		二次元コード	「北前船」公式ウェブサイト	https://www.kitamae-bune.c	「日本の社会は農業社会か」（201ページ）の参考資料として、「北前船」公式ウェブサイトを紹介。	
		二次元コード	男女共同参画ウェブサイト	https://www.gender.go.jp/int	【実践】「資料や情報を吟味して、自分の考えにつなげよう」（209ページ）の参考資料として、男女共同参画ウェブサイトより世界各国のジェンダーギャップ指数ランキングを紹介。	
		二次元コード	東京女子大学ウェブサイトより「丸山眞男文庫　ヴァーチャル書庫」の	https://maruyamabunko.twcu	「『である』ことと『する』こと」（231ページ）の参考資料として、東京女子大学ウェブサイトより「丸山眞男文庫　ヴァーチャル書庫」のページを紹介。	

申請図書			学習上の参考に供する情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	
		二次元コード	自社ページ	自社ページURL	「物語としての自己」(255ページ)の参考資料として、「舞姫」(森鴎外)の抜粋と注釈を掲載。	別紙6
		二次元コード	自社ページ	自社ページURL	「清光館哀史」(281ページ)の参考資料として、「陰翳礼讃」の抜粋と注釈を紹介。	別紙7
		二次元コード	自社ページ	自社ページURL	【実践】「自分の経験や考えを効果的に書いてみよう」(301ページ)の参考資料としてワークシートを紹介。	別紙8
		二次元コード	映画『二重のまち／交代地のうた』公式ウェブサイト	https://www.kotaichi.com/	「聞く者たちの文学、忘却に抗するための会話」(335ページ)の参考資料として、映画『二重のまち／交代地のうた』公式ウェブサイトを紹介。	
		二次元コード	海外移住資料館	https://www.jica.go.jp/domestic/jomm/outline/index.html	「難民が問題になるとき」(364ページ)の参考資料として、海外移住資料館のウェブサイトを紹介。	
		二次元コード	福澤諭吉旧居・福澤記念館	https://fukuzawakyukyo.com/	「主義は広大なるべき事」(378ページ)の参考資料として、福澤諭吉旧居・福澤記念館ウェブサイトを紹介。	
		二次元コード	製薬協	https://www.jpma.or.jp/junior	「『病気』の向こう側」(407ページ)の参考資料として、製薬協ウェブサイトより医学・薬学の発展の歴史についての解説ページを紹介。	

申請図書			学習上の参考に供する情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	
		二次元コード	養老公園	https://www.yoro-park.com/	「記憶の満天」(428ページ)の参考資料として、養老公園ウェブサイトより「養老天命反転装置」のページを紹介。	

申請図書			学習上の参考に供する情報			備考
番号	ページ	種別	参照先	URL	概要	

（備考）
申請図書中に発行者が管理するウェブページのアドレス（二次元コードその他のこれに代わるものを含む。）を掲載する場合に、本表を以下のとおり作成する。
1「申請図書」の欄については次のとおりとする。
①「番号」の欄は、複数のページ等に掲載されたウェブページのアドレス等が同一のウェブページを参照させる場合、一つの番号にまとめて記入する。
②「ページ」の欄は、ウェブページのアドレス等の申請図書における掲載ページを示す。
③「種別」の欄は、URL、二次元コード等の別を示す。
2「学習上の参考に供する情報」の欄については次のとおりとする。
①「参照先」の欄には、発行者のページから参照させる学習上の参考に供するページを作成する団体名などを記入する。
②「URL」の欄には、実際に参照させる学習上の参考に供するページのURLを記載する。なお、参照先が発行者の作成したページである場合は、「自社ページURL」と
③「概要」欄には、参照先における情報の内容を簡潔に記入する。
3 申請図書中のウェブページのアドレス等が参照させるウェブページの画面を印刷した紙面には、対応する本表の番号を紙面右上に付記し、本表に添付すること。
4 学習上の参考に供する情報を示すウェブページが発行者において作成したページの場合、参照先のウェブページの画面を印刷した紙面を、本表に添付すること。
その際、「備考」の欄に「別紙1添付」などと記載し、印刷した紙面右上に「別紙1」などと記入すること。

＊各コンテンツ名をクリックしてください。参考資料のページに移動します。

目次	ページ	コンテンツ名	概要
第一部			
第１章　架橋することば			
羅針盤・１　比べて読もう　中島敦「山月記」が描く「わかりあえなさ」	18	「山月記」テキスト（ｐｄｆ）	参考資料として「山月記」（中島敦）の全文と注釈を掲載しています。
物語るという欲望	19	「山月記」テキスト（ｐｄｆ）	参考資料として「山月記」（中島敦）の全文と注釈を掲載しています。
科学の詩学へ	27	水戸芸術館	参考資料として「水戸芸術館」の中谷芙二子作品を見ることができます。
		長野県立美術館	参考資料として「長野県立美術館」の中谷芙二子作品を見ることができます。
第２章　日常の中の論点			
「象徴的貧困」に立ち向かうために	51	ジョン・レノン公式ＹｏｕＴｕｂｅチャンネル	参考資料として、ジョン・レノン公式ＹｏｕＴｕｂｅチャンネルより「imagine」を聴くことができます。
第４章　個に向き合う			

沖縄戦を聞く	93	沖縄戦の歴史（沖縄市平和学習コンテンツサイト「沖縄市民平和の日」より）	沖縄戦について詳細を学べます。
第５章　関係を読む			
男の絆、女たちの沈黙	110	男女共同参画に関する国際的な指数（男女共同参画局ウェブサイトより）	世界各国のジェンダーギャップ指数ランキング等、我が国における男女共同参画に関する情報を閲覧できます。
現代日本の開化	120	「こころ」テキスト（ｐｄｆ）	参考資料として「こころ」（夏目漱石）の一部抜粋と注釈を掲載しています。
		「夢十夜」テキスト（ｐｄｆ）	参考資料として「夢十夜」（夏目漱石）の一部抜粋と注釈を掲載しています。
物語りについて	127	映画『うたうひと』の公式ウェブサイト	筆者の監督作品である映画『うたうひと』の公式ウェブサイトです。
		青空文庫	青空文庫上の『遠野物語』を読むことができます。
		青空文庫	青空文庫上の『山の人生』を読むことができます。
羅針盤・２　比べて読もう　夏目漱石「こころ」の「語り」	135	「こころ」テキスト（ｐｄｆ）	参考資料として「こころ」（夏目漱石）の一部抜粋と注釈を掲載しています。
第６章　世界を視る位置			
ファンタジー・ワールドの誕生	136	「Camerawork」全文（デニス・オルーク公式ウェブサイトより）	本文で触れられている「カンニバル・ツアーズ」の作者デニス・オルークについて知ることができます。
第８章　〈私〉をひらくために			
		時国家（本家　上時国家）　公式サイト	筆者が資料を発見した時国家（上時国家）の詳細を閲覧できます。

日本の社会は農業社会か	201	重要文化財 時國家【下時国家】公式サイト	筆者が資料を発見した時国家（下時国家）の詳細を閲覧できます。
		北前船　公式サイト	本文で言及されている「北前船」についての解説や、当時の廻船商人たちの生活文化などを知ることができます。
【実践】資料や情報を吟味して、自分の考えにつなげよう	209	男女共同参画に関する国際的な指数（男女共同参画局ウェブサイトより）	世界各国のジェンダーギャップ指数ランキング等、我が国における男女共同参画に関する情報を閲覧できます。
第９章　未来を築く			
「である」ことと「する」こと	231	丸山眞男文庫　ヴァーチャル書庫（東京女子大学ウェブサイトより）	筆者の書斎・書庫の配架を再現したヴァーチャル書庫で、筆者の思想を学ぶことができます。
第二部			
第１章　多様性のほうへ			
物語としての自己	255	「舞姫」テキスト（ｐｄｆ）	参考資料として「舞姫」（森鴎外）の全文と注釈を掲載しています。
第２章　語りと世界			
清光館哀史	281	「陰翳礼讃」テキスト（ｐｄｆ）	参考資料として「陰翳礼讃」（谷崎潤一郎）の一部抜粋と注釈を掲載しています。
【実践】自分の経験や考えを効果的に書いてみよう	301	「自己PR文のためのメモ」(pdf)	提示している言語活動のためのワークシートを利用できます。
第４章　響き合うことばと身体			
聞く者たちの文学、忘却に抗するための会話	335	映画『二重のまち／交代地のうた』公式ウェブサイト	筆者の監督作品、映画『二重のまち／交代地のうた』公式ウェブサイトです。

第５章　「当たり前」を疑う			
難民が問題になるとき	364	海外移住資料館	参考資料として、海外移住資料館のウェブサイトから、日本から海外への移住した人々の歴史を学べます。
第６章　「近代」を再考する			
主義は広大なるべきこと	378	福澤諭吉を知る（福澤諭吉旧居・福澤記念館ウェブサイトより）	筆者についての詳細を閲覧できます。
第７章　記号がつくる世界			
「病気」の向こう側	407	「くすり研究所」（製薬協ウェブサイトより）	医学・薬学の発展の歴史についての解説を参照できます。
第８章　よみがえる問い			
記憶の満天	428	養老天命反転地（養老公園ウェブサイトより）	本文で言及されている「養老天命反転装置」について知ることができます。

小説

山月記

中島 敦

隴西[1]の李徴は博学才穎[2]、天宝[3]の末年、若くして名を虎榜[4]に連ね、ついで江南尉[5]に補せられたが、性、狷介[6]、自ら恃むところすこぶる厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、虢略[7]に帰臥し、人と交わりを絶って、ひたすら詩作にふけった。下吏となって長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚がらず、生活は日を追うて苦しくなる。李徴はようやく焦燥*に駆られてきた。この頃からその容貌も峭刻[8]となり、肉落ち骨秀で、眼光のみいたずらに炯々[9]として、かつて進士に登第[10]した頃の豊頬の美少年のおもかげは、どこに求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のためについに節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。かつての同輩はすでにはるか高

1 隴西 中国の地名。現在の甘粛省の東南部。

2 才穎 才知がすぐれて抜きんでていること。

3 天宝 唐代の年号。七四二―五六年。

4 虎榜 進士（官吏登用資格試験）及第者の姓名を掲示する木札。俊才を虎にたとえた。

5 江南尉 江南（長江以南の地）の軍事や警察などをつかさどる官。

6 狷介 片意地で他人と相いれないこと。

7 虢略 中国の地名。現在の河南省にある。

位に進み、彼が昔、鈍物として歯牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才[11]李徴の自尊心をいかに傷つけたかは、想像に難くない。彼は怏々[12]として楽しまず、狂悖[13]の性はいよいよ抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、汝水[14]のほとりに宿った時、ついに発狂した。ある夜半、急に顔色を変えて寝床から起き上がると、何か訳の分からぬことを叫びつつそのまま下にとび降りて、闇の中へ駆け出した。彼は二度と戻ってこなかった。付近の山野を捜索しても、なんの手がかりもない。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった。

翌年、監察御史[15]、陳郡[16]の袁傪[17]という者、勅命を奉じて嶺南[18]に使いし、道に商於

8 峭刻 険しくむごいさま。
9 炯々 鋭く光るさま。
10 登第 試験に合格すること。「第」は、官吏登用試験。
11 儁才 才知のすぐれた人。俊才。
12 怏々 不平があり心が満ち足りないさま。
13 狂悖 常軌を逸していること。
14 汝水 河南省崇県の老君山に発して淮河に注ぐ川。
15 監察御史 官吏を取り締まり、地方を巡行して行政を監視した官。
16 陳郡 河南省の地名。
17 嶺南 現在の広東省、広西壮族自治区およびベトナムの一部を含む地域。
18 商於 河南省の地名。

〈博学〉〈容易〉〈往年〉
＊焦燥に駆られる
＊節を屈する

の地に宿った。次の朝いまだ暗いうちに出発しようとしたところ、駅吏[19]が言うことに、これから先の道に人食い虎が出るゆえ、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、いま少し待たれたがよろしいでしょうと。袁傪は、しかし、供回りの多勢なのを恃み、駅吏の言葉を退けて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を通っていった時、はたして一匹の猛虎が叢（くさむら）の中から躍り出た。虎は、あわや袁傪に躍りかかるかと見えたが、たちまち身*を翻して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の声で「あぶないところだった。」と繰り返しつぶやくのが聞こえた。その声に袁傪は聞き覚えがあった。驚懼（きょうく）[20]のうちにも、彼はとっさに思い当たって、叫んだ。「その声は、我が友、李徴子ではないか？」袁傪は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少なかった李徴にとっては、最も親しい友であった。温和な袁傪の性格が、峻峭（しゅんしょう）[21]な李徴の性情と衝突しなかったためであろう。

叢の中からは、[1]しばらく返事がなかった。しのび泣きかと思われるかすかな声が時々漏れるばかりである。ややあって、低い声が答えた。「いかにも自分は隴西の李徴である。」と。

袁傪は恐怖を忘れ、馬から降りて叢に近づき、懐かしげに久闊（きゅうかつ）[22]を叙した。そして、なぜ叢から出てこないのかと問うた。李徴の声が答えて言う。自分は今や異類の身となっ

19 駅吏　宿駅の役人。

20 驚懼　驚きおそれること。

21 峻峭　厳しく険しいこと。

1「しばらく返事がなかった」のはなぜか。

22 久闊　長く会っていないこと。「久闊を叙す」は、久しぶりに友情を温める

橋本雅邦「龍虎図」（部分）1900年

ている。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭[23]の情を起こさせるに決まっているからだ。しかし、今、図*らずも故人に会うことを得て、愧赧[24]の念をも忘れるほどに懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、我が醜悪な今の外形をいとわず、かつて君の友李徴であったこの自分と話を交わしてくれないだろうか。

　後で考えれば不思議だったが、その時、袁傪は、この超自然の怪異を、実に素直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかった。彼は部下に命じて行列の進行をとどめ、自分は叢の

ことをいう。

23 畏怖嫌厭　畏れ、いとうこと。

24 愧赧　恥じて赤面すること。

〈白昼〉〈温和〉〈異類〉

＊身を翻す

＊図らずも

傍らに立って、見えざる声と対談した。都のうわさ、旧友の消息、袁傪が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかった者どうしの、あの隔てのない語調で、それらが語られた後、袁傪は、李徴がどうして今の身となるに至ったかを尋ねた。叢中の声は次のように語った。

今から一年ほど前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊まった夜のこと、一睡してから、ふと目を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出てみると、声は闇の中からしきりに自分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けていくうちに、いつしか道は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地をつかんで走っていた。何か体じゅうに力が満ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えていった。気がつくと、手先や肘のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映してみると、すでに虎となっていた。自分は初め目を信じなかった。次に、これは夢にちがいないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあったから。どうしても夢でないと悟らねばならなかった時、自分は茫然とした。そうして懼れた。まったく、どんなことでも起こり得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、なぜこんなことになったのだろう。分からぬ。まったく何事も我々には分からぬ。理由も分からずに押しつけられたものを

おとなしく受け取って、理由も分からずに生きていくのが、我々生きもののさだめだ。自分はすぐに死を思うた。しかし、その時、目の前を一匹のうさぎが駆け過ぎるのを見たとたんに、自分の中の人間はたちまち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覚ました時、自分の口はうさぎの血にまみれ、あたりにはうさぎの毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であった。それ以来今までにどんな所行をし続けてきたか、それはとうてい語るに忍びない。ただ、一日のうちに必ず数時間は、人間の心が還（かえ）ってくる。そういう時には、かつての日と同じく、人語も操れれば、複雑な思考にも堪え得るし、経書[25]の章句をそらんずることもできる。その人間の心で、虎としての己の残虐な行いのあとを見、己の運命を振り返る時が、最も情けなく、恐ろしく、憤ろしい。しかし、その、人間に還る数時間も、日を経るに従ってしだいに短くなっていく。今までは、どうして虎などになったかと怪しんでいたのに、この間ひょいと気がついてみたら、俺はどうして以前、人間だったのかと考えていた。❷これは恐ろしいことだ。いま少したてば、俺の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋もれて消えてしまうだろう。ちょうど、古い宮殿の礎がしだいに土砂に埋没するように。そうすれば、しまいに俺は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い回り、今日のように道で君と出会っても故人と認めることなく、君を裂き食ろうてなんの悔いも感じないだろう。いったい、獣でも

25 経書　古代の聖人や賢人の教えを記した儒教の経典。四書五経などをいう。

❷「これは恐ろしいことだ。」と思ったのはなぜか。

―〈無我夢中〉〈所行〉

人間でも、もとは何か他のものだったんだろう。初めはそれを覚えているが、しだいに忘れてしまい、初めから今の形のものだったと思い込んでいるのではないか？　いや、そんなことはどうでもいい。俺の中の人間の心がすっかり消えてしまえば、恐らく、そのほうが、俺はしあわせになれるだろう。だのに、俺の中の人間は、そのことを、この上なく恐ろしく感じているのだ。ああ、まったく、どんなに、恐ろしく、哀しく、切なく思っているだろう！　俺が人間だった記憶のなくなることを。この気持ちは誰にも分からない。誰にも分からない。俺と同じ身の上になった者でなければ。ところで、そうだ。俺がすっかり人間でなくなってしまう前に、一つ頼んでおきたいことがある。

袁傪はじめ一行は、息*をのんで、叢中の声の語る不思議に聞き入っていた。声は続けて言う。

他でもない。自分は元来詩人として名を成すつもりでいた。しかも、業[3]いまだ成らざるに、この運命に立ち至った。かつて作るところの詩数百編、もとより、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在ももはや分からなくなっていよう。ところで、そのうち、今もなお記誦[26]せるものが数十ある。これを我がために伝録していただきたいのだ。なにも、これによって一人前の詩人面をしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産*を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に

3「業いまだ成らざるに」とはどのようなことか。

26 記誦　記憶し、そらんじること。

伝えないでは、死んでも死にきれないのだ。

袁傪は部下に命じ、筆を執って叢中の声に従って書きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短およそ三十編、格調高雅、意趣卓逸[27]、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁傪は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか、と。

旧詩を吐き終わった李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るがごとくに言った。

恥ずかしいことだが、今でも、こんなあさましい身となり果てた今でも、俺は、俺の詩集が長安風流人士[28]の机の上に置かれているさまを、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。嗤（わら）ってくれ。詩人になりそこなって虎になった哀れな男を。（袁傪は昔の青年李徴の自嘲癖を思い出しながら、哀しく聞いていた。）そうだ。お笑い草ついでに、今の懐（おも）いを即席の詩に述べてみようか。この虎の中に、まだ、かつての李徴が生きているしるしに。

袁傪はまた下吏に命じてこれを書きとらせた。その詩に言う。

27 意趣卓逸　心のおもむきがずば抜けていること。

28 長安　唐の都。漢代から唐代にかけて栄えた。現在の陝西（せんせい）省西安市付近。

〈元来〉〈伝録〉
〈格調高雅〉
＊息をのむ
＊産を破る
＊お笑い草

偶(たまたま)因(ッテ)狂疾(ニ)成(ル)二殊[29]類(ト)一
災患相仍(よッテ)不(ず)レ可(ベカラ)レ逃(ル)
今日(ハ)爪牙(がニ)誰(たれカ)敢(あヘテ)敵(センヤ)
当時(ハ)声[30]跡共(ニ)相高(カリキ)
我(ハ)為(なリテ)二異物(ト)一蓬[31]茅(ぼうノ)下(もとニアレドモ)
君(ハ)已(すでニ)乗(リテ)レ軺[32](えうニ)気勢豪(ナリ)
此(コノ)夕(ゆふべ)渓山対(シ)二明月(ニ)一
不(シテ)レ成(サ)二長[33](ちやうヲ)嘯(せうヲ)一但(タダ)成(スノミかうヲ)レ嗥[34]

時に、残月、光冷ややかに、白露は地にしげく、樹間を渡る冷風はすでに暁の近きを告げていた。人々はもはや、事の奇異を忘れ、粛然として、この詩人の薄幸を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

なぜこんな運命になったか分からぬと、先刻は言ったが、しかし、考えようによれば、思い当たることが全然ないでもない。人間であった時、俺は努めて人との交わりを避けた。人々は俺を倨傲[35](きょごう)だ、尊大だと言った。実は、それがほとんど羞恥心に近いものであ

29 殊類 異類。人間でないもの。

30 声跡 名声と業績。

31 蓬茅 よもぎと、ちがや。雑草、の意。

32 軺 小さな軽い車。一、二頭の馬が引く。

33 長嘯 長く声を引いて吟じること。

34 嗥 ほえること。叫ぶこと。

35 倨傲 おごり高ぶること。

ることを、人々は知らなかった。もちろん、かつての郷党の鬼才と言われた自分に、自尊心がなかったとは言わない。しかし、それは臆病な自尊心とでも言うべきものであった。俺は詩によって名を成そうと思いながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨*に努めたりすることをしなかった。かといって、また、俺は俗物の間に伍*することも潔しとしなかった。ともに、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである。己の珠にあらざることを惧れるがゆえに、あえて刻苦して磨こうともせず、また、己の珠なるべきを半ば信ずるがゆえに、碌々[36]として瓦[37]に伍することもできなかった。俺はしだいに世と離れ、人と遠ざかり、憤悶[38]と慙恚[39]とによってますます己の内なる臆病な自尊心を飼いふらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣に当たるのが、各人の性情だという。俺の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが俺を損ない、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、俺の外形をかくのごとく、内心にふさわしいものに変えてしまったのだ。今思えば、まったく、俺は、俺の持っていた僅かばかりの才能を空費してしまったわけだ。人生は何事をもなさぬにはあまりに長いが、何事かをなすにはあまりに短いなどと口先ばかりの警句*を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、刻苦をいとう怠惰とが俺のすべてだったのだ。俺よりもはるかに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いた

36 碌々 石がごろごろしているさま。平凡で役に立たないさま。

37 瓦 値打ちの低いもののたとえ。

38 憤悶 いきどおりもだえること。

39 慙恚 恥じていきどおること。

〈白露〉〈尊大〉〈鬼才〉〈刻苦〉

＊切磋琢磨する

＊……に伍する

＊警句を弄する

がために、堂々たる詩家となった者がいくらでもいるのだ。虎となり果てた今、俺はようやくそれに気がついた。それを思うと、俺は今も胸*を焼かれるような悔いを感じる。俺にはもはや人間としての生活はできない。たとえ、今、俺が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしたところで、どういう手段で発表できよう。まして、俺の頭は日ごとに虎に近づいていく。どうすればいいのだ。俺の空費された過去は？　俺はたまらなくなる。そういうとき、俺は、向こうの山の頂の巌（いわお）に登り、空谷[40]に向かってほえる。この胸を焼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。俺は昨夕も、あそこで月に向かってほえた。誰かにこの苦しみが分かってもらえないかと。しかし、獣どもは俺の声を聞いて、ただ、懼れ、ひれ伏すばかり。山も木も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮（たけ）っているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人俺の気持ちを分かってくれる者はない。ちょうど、人間だった頃、俺の傷つきやすい内心を誰も理解してくれなかったように。俺[4]の毛皮のぬれたのは、夜露のためばかりではない。

ようやくあたりの暗さが薄らいできた。木の間（こま）を伝って、どこからか、暁角[41]が哀しげに響き始めた。

もはや、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、（虎に還らねばならぬ時が）近づいたから、と、李徴の声が言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。そ

40 空谷　人けのないさびしい谷。

4「俺の毛皮のぬれたのは、夜露のためばかりではない。」とはどのようなことか。

41 暁角　夜明けを知らせる角笛。

れは我が妻子のことだ。彼らはいまだ虢略にいる。もとより、俺の運命については知るはずがない。君が南から帰ったら、俺はすでに死んだと彼らに告げてもらえないだろうか。決して今日のことだけは明かさないでほしい。厚かましいお願いだが、彼らの孤弱を哀れんで、今後とも道塗[42]に飢凍することのないように計らっていただけるならば、自分にとって、恩幸[43]、これに過ぎたるはない。

言い終わって、叢中から慟哭（どうこく）の声が聞こえた。袁傪もまた涙を浮かべ、よろこんで李徴の意*にそいたい旨を答えた。李徴の声はしかしたちまちまた先刻の自嘲的な調子に戻って、言った。

本当は、まず、このことのほうを先にお願いすべきだったのだ、俺が人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを気にかけているような男だから、こんな獣に身を堕（お）とすのだ。

そうして、付け加えて言うことに、袁傪が嶺南からの帰途には決してこの道を通らないでほしい、その時には自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかもしれないから。また、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に登ったら、こちらを振り返って見てもらいたい。自分は今の姿をもう一度お目にかけよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、もって、再びここを過ぎて自分に会おうとの気持ちを君に起こ

42 道塗 道。道途。

43 恩幸 いっくしみ。恩恵。

〈手段〉〈孤弱〉〈飢凍〉

* 胸を焼く

* 意にそう

させないためであると。

袁傪は叢に向かって、ねんごろに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、また、堪え得ざるがごとき悲泣の声が漏れた。袁傪も幾度か叢を振り返りながら、涙の中に出発した。

一行が丘の上についた時、彼らは、言われたとおりに振り返って、先ほどの林間の草地を眺めた。たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼らは見た。虎は、すでに白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮[44]したかと思うと、また、元の叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

5

44 咆哮　ほえること。

―〈悲泣〉

中島　敦　一九〇九（明治四二）―四二（昭和一七）年。小説家。東京都に生まれた。持病のぜんそくのため短い生涯を終えた。中国古典に取材した作品が多く、優れた知性と格調高い文体によって、死後高く評価された。作品に『名人伝』『光と風と夢』『李陵』などがある。この作品は一九四二年に発表されたもので、本文は「中島敦全集」第一巻によった。

小説

山月記

中島 敦

隴西[1]の李徴は博学才穎[2]、天宝[3]の末年、若くして名を虎榜[4]に連ね、ついで江南尉[5]に補せられたが、性、狷介[6]、自ら恃むところすこぶる厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、虢略[7]に帰臥し、人と交わりを絶って、ひたすら詩作にふけった。下吏となって長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚がらず、生活は日を追うて苦しくなる。李徴はようやく焦燥*に駆られてきた。この頃からその容貌も峭刻[8]となり、肉落ち骨秀で、眼光のみいたずらに炯々[9]として、かつて進士に登第[10]した頃の豊頬の美少年のおもかげは、どこに求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のためについに節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。かつての同輩はすでにはるか高

1 隴西 中国の地名。現在の甘粛省の東南部。

2 才穎 才知がすぐれて抜きんでていること。

3 天宝 唐代の年号。七四二―五六年。

4 虎榜 進士（官吏登用資格試験）及第者の姓名を掲示する木札。俊才を虎にたとえた。

5 江南尉 江南（長江以南の地）の軍事や警察などをつかさどる官。

6 狷介 片意地で他人と相いれないこと。

7 虢略 中国の地名。現在の河南省にある。

位に進み、彼が昔、鈍物として歯牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才[11]李徴の自尊心をいかに傷つけたかは、想像に難くない。彼は怏々[12]として楽しまず、狂悖[13]の性はいよいよ抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、汝水[14]のほとりに宿った時、ついに発狂した。ある夜半、急に顔色を変えて寝床から起き上がると、何か訳の分からぬことを叫びつつそのまま下にとび降りて、闇の中へ駆け出した。彼は二度と戻ってこなかった。付近の山野を捜索しても、なんの手がかりもない。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった。

翌年、監察御史[15]、陳郡[16]の袁傪[17]という者、勅命を奉じて嶺南[18]に使いし、道に商於

8 峭刻 険しくむごいさま。
9 炯々 鋭く光るさま。
10 登第 試験に合格すること。「第」は、官吏登用試験。
11 儁才 才知のすぐれた人。俊才。
12 怏々 不平があり心が満ち足りないさま。
13 狂悖 常軌を逸していること。
14 汝水 河南省崇県の老君山に発して淮河に注ぐ川。
15 監察御史 官吏を取り締まり、地方を巡行して行政を監視した官。
16 陳郡 河南省の地名。
17 嶺南 現在の広東省、広西壮族自治区およびベトナムの一部を含む地域。
18 商於 河南省の地名。

〈博学〉〈容易〉〈往年〉
＊焦燥に駆られる
＊節を屈する

の地に宿った。次の朝いまだ暗いうちに出発しようとしたところ、駅吏[19]が言うことに、これから先の道に人食い虎が出るゆえ、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、いま少し待たれたがよろしいでしょうと。袁傪は、しかし、供回りの多勢なのを恃み、駅吏の言葉を退けて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を通っていった時、はたして一匹の猛虎が叢（くさむら）の中から躍り出た。虎は、あわや袁傪に躍りかかるかと見えたが、たちまち身*を翻して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の声で「あぶないところだった。」と繰り返しつぶやくのが聞こえた。その声に袁傪は聞き覚えがあった。驚懼（きょうく）[20]のうちにも、彼はとっさに思い当たって、叫んだ。「その声は、我が友、李徴子ではないか？」袁傪は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少なかった李徴にとっては、最も親しい友であった。温和な袁傪の性格が、峻峭（しゅんしょう）[21]な李徴の性情と衝突しなかったためであろう。

叢の中からは、[1]しばらく返事がなかった。しのび泣きかと思われるかすかな声が時々漏れるばかりである。ややあって、低い声が答えた。「いかにも自分は隴西の李徴である。」と。

袁傪は恐怖を忘れ、馬から降りて叢に近づき、懐かしげに久闊（きゅうかつ）[22]を叙した。そして、なぜ叢から出てこないのかと問うた。李徴の声が答えて言う。自分は今や異類の身となっ

19 駅吏　宿駅の役人。

20 驚懼　驚きおそれること。

21 峻峭　厳しく険しいこと。

1「しばらく返事がなかった」のはなぜか。

22 久闊　長く会っていないこと。「久闊を叙す」は、久しぶりに友情を温める

橋本雅邦「龍虎図」（部分）1900年

ている。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭[23]の情を起こさせるに決まっているからだ。しかし、今、図*らずも故人に会うことを得て、愧赧[24]の念をも忘れるほどに懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、我が醜悪な今の外形をいとわず、かつて君の友李徴であったこの自分と話を交わしてくれないだろうか。

　後で考えれば不思議だったが、その時、袁傪は、この超自然の怪異を、実に素直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかった。彼は部下に命じて行列の進行をとどめ、自分は叢の

ことをいう。

23 畏怖嫌厭　畏れ、いとうこと。

24 愧赧　恥じて赤面すること。

〈白昼〉〈温和〉〈異類〉

＊身を翻す

＊図らずも

傍らに立って、見えざる声と対談した。都のうわさ、旧友の消息、袁傪が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかった者どうしの、あの隔てのない語調で、それらが語られた後、袁傪は、李徴がどうして今の身となるに至ったかを尋ねた。叢中の声は次のように語った。

今から一年ほど前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊まった夜のこと、一睡してから、ふと目を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出てみると、声は闇の中からしきりに自分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けていくうちに、いつしか道は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地をつかんで走っていた。何か体じゅうに力が満ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えていった。気がつくと、手先や肘のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映してみると、すでに虎となっていた。自分は初め目を信じなかった。次に、これは夢にちがいないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあったから。どうしても夢でないと悟らねばならなかった時、自分は茫然とした。そうして懼れた。まったく、どんなことでも起こり得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、なぜこんなことになったのだろう。分からぬ。まったく何事も我々には分からぬ。理由も分からずに押しつけられたものを

おとなしく受け取って、理由も分からずに生きていくのが、我々生きもののさだめだ。自分はすぐに死を思うた。しかし、その時、目の前を一匹のうさぎが駆け過ぎるのを見たとたんに、自分の中の人間はたちまち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覚ました時、自分の口はうさぎの血にまみれ、あたりにはうさぎの毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であった。それ以来今までにどんな所行をし続けてきたか、それはとうてい語るに忍びない。ただ、一日のうちに必ず数時間は、人間の心が還（かえ）ってくる。そういう時には、かつての日と同じく、人語も操れれば、複雑な思考にも堪え得るし、経書[25]の章句をそらんずることもできる。その人間の心で、虎としての己の残虐な行いのあとを見、己の運命を振り返る時が、最も情けなく、恐ろしく、憤ろしい。しかし、その、人間に還る数時間も、日を経るに従ってしだいに短くなっていく。今までは、どうして虎などになったかと怪しんでいたのに、この間ひょいと気がついてみたら、俺はどうして以前、人間だったのかと考えていた。❷これは恐ろしいことだ。いま少したてば、俺の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋もれて消えてしまうだろう。ちょうど、古い宮殿の礎がしだいに土砂に埋没するように。そうすれば、しまいに俺は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い回り、今日のように道で君と出会っても故人と認めることなく、君を裂き食ろうてなんの悔いも感じないだろう。いったい、獣でも

25 経書　古代の聖人や賢人の教えを記した儒教の経典。四書五経などをいう。

❷「これは恐ろしいことだ。」と思ったのはなぜか。

―〈無我夢中〉〈所行〉

人間でも、もとは何か他のものだったんだろう。初めはそれを覚えているが、しだいに忘れてしまい、初めから今の形のものだったと思い込んでいるのではないか？　いや、そんなことはどうでもいい。俺の中の人間の心がすっかり消えてしまえば、恐らく、そのほうが、俺はしあわせになれるだろう。だのに、俺の中の人間は、そのことを、この上なく恐ろしく感じているのだ。ああ、まったく、どんなに、恐ろしく、哀しく、切なく思っているだろう！　俺が人間だった記憶のなくなることを。この気持ちは誰にも分からない。誰にも分からない。俺と同じ身の上になった者でなければ。ところで、そうだ。俺がすっかり人間でなくなってしまう前に、一つ頼んでおきたいことがある。

袁傪はじめ一行は、息*をのんで、叢中の声の語る不思議に聞き入っていた。声は続けて言う。

他でもない。自分は元来詩人として名を成すつもりでいた。しかも、業[3]いまだ成らざるに、この運命に立ち至った。かつて作るところの詩数百編、もとより、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在ももはや分からなくなっていよう。ところで、そのうち、今もなお記誦[26]せるものが数十ある。これを我がために伝録していただきたいのだ。なにも、これによって一人前の詩人面をしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産*を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に

3「業いまだ成らざるに」とはどのようなことか。

26 記誦　記憶し、そらんじること。

伝えないでは、死んでも死にきれないのだ。

袁傪は部下に命じ、筆を執って叢中の声に従って書きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短およそ三十編、格調高雅、意趣卓逸[27]、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁傪は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか、と。

旧詩を吐き終わった李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るがごとくに言った。

恥ずかしいことだが、今でも、こんなあさましい身となり果てた今でも、俺は、俺の詩集が長安風流人士[28]の机の上に置かれているさまを、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。嗤（わら）ってくれ。詩人になりそこなって虎になった哀れな男を。（袁傪は昔の青年李徴の自嘲癖を思い出しながら、哀しく聞いていた。）そうだ。お笑い草ついでに、今の懐（おも）いを即席の詩に述べてみようか。この虎の中に、まだ、かつての李徴が生きているしるしに。

袁傪はまた下吏に命じてこれを書きとらせた。その詩に言う。

27 意趣卓逸　心のおもむきがずば抜けていること。

28 長安　唐の都。漢代から唐代にかけて栄えた。現在の陝西（せんせい）省西安市付近。

〈元来〉〈伝録〉
〈格調高雅〉
＊息をのむ
＊産を破る
＊お笑い草

偶(たまたま)因(ッテ)狂疾(ニ)成(ル)二殊[29]類(ト)一
災患相仍(よッテ)不(ず)レ可(ベカラ)レ逃(ル)
今日(ハ)爪牙(がニ)誰(たれカ)敢(あヘテ)敵(センヤ)
当時(ハ)声[30]跡共(ニ)相高(カリキ)
我(ハ)為(なリテ)二異物(ト)一蓬[31]茅(ぼうノ)下(もとニアレドモ)
君(ハ)已(すでニ)乗(リテ)レ軺[32](えうニ)気勢豪(ナリ)
此(コノ)夕(ゆふべ)渓山対(シ)二明月(ニ)一
不(シテ)レ成(サ)二長[33](ちやうヲ)嘯(せうヲ)一但(タダ)成(スノミかうヲ)レ嗥[34]

時に、残月、光冷ややかに、白露は地にしげく、樹間を渡る冷風はすでに暁の近きを告げていた。人々はもはや、事の奇異を忘れ、粛然として、この詩人の薄幸を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

なぜこんな運命になったか分からぬと、先刻は言ったが、しかし、考えようによれば、思い当たることが全然ないでもない。人間であった時、俺は努めて人との交わりを避けた。人々は俺を倨傲[35](きょごう)だ、尊大だと言った。実は、それがほとんど羞恥心に近いものであ

29 殊類 異類。人間でないもの。

30 声跡 名声と業績。

31 蓬茅 よもぎと、ちがや。雑草、の意。

32 軺 小さな軽い車。一、二頭の馬が引く。

33 長嘯 長く声を引いて吟じること。

34 嗥 ほえること。叫ぶこと。

35 倨傲 おごり高ぶること。

ることを、人々は知らなかった。もちろん、かつての郷党の鬼才と言われた自分に、自尊心がなかったとは言わない。しかし、それは臆病な自尊心とでも言うべきものであった。俺は詩によって名を成そうと思いながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨*に努めたりすることをしなかった。かといって、また、俺は俗物の間に伍*することも潔しとしなかった。ともに、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである。己の珠にあらざることを惧れるがゆえに、あえて刻苦して磨こうともせず、また、己の珠なるべきを半ば信ずるがゆえに、碌々[36]として瓦[37]に伍することもできなかった。俺はしだいに世と離れ、人と遠ざかり、憤悶[38]と慙恚[39]とによってますます己の内なる臆病な自尊心を飼いふらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣に当たるのが、各人の性情だという。俺の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが俺を損ない、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、俺の外形をかくのごとく、内心にふさわしいものに変えてしまったのだ。今思えば、まったく、俺は、俺の持っていた僅かばかりの才能を空費してしまったわけだ。人生は何事をもなさぬにはあまりに長いが、何事かをなすにはあまりに短いなどと口先ばかりの警句*を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、刻苦をいとう怠惰とが俺のすべてだったのだ。俺よりもはるかに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いた

36 碌々 石がごろごろしているさま。平凡で役に立たないさま。

37 瓦 値打ちの低いもののたとえ。

38 憤悶 いきどおりもだえること。

39 慙恚 恥じていきどおること。

〈白露〉〈尊大〉〈鬼才〉〈刻苦〉

＊切磋琢磨する

＊……に伍する

＊警句を弄する

がために、堂々たる詩家となった者がいくらでもいるのだ。虎となり果てた今、俺はようやくそれに気がついた。それを思うと、俺は今も胸*を焼かれるような悔いを感じる。俺にはもはや人間としての生活はできない。たとえ、今、俺が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしたところで、どういう手段で発表できよう。まして、俺の頭は日ごとに虎に近づいていく。どうすればいいのだ。俺の空費された過去は？　俺はたまらなくなる。そういうとき、俺は、向こうの山の頂の巌（いわお）に登り、空谷[40]に向かってほえる。この胸を焼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。俺は昨夕も、あそこで月に向かってほえた。誰かにこの苦しみが分かってもらえないかと。しかし、獣どもは俺の声を聞いて、ただ、懼れ、ひれ伏すばかり。山も木も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮（たけ）っているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人俺の気持ちを分かってくれる者はない。ちょうど、人間だった頃、俺の傷つきやすい内心を誰も理解してくれなかったように。俺[4]の毛皮のぬれたのは、夜露のためばかりではない。

ようやくあたりの暗さが薄らいできた。木の間（こま）を伝って、どこからか、暁角[41]が哀しげに響き始めた。

もはや、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、（虎に還らねばならぬ時が）近づいたから、と、李徴の声が言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。そ

40 空谷　人けのないさびしい谷。

4「俺の毛皮のぬれたのは、夜露のためばかりではない。」とはどのようなことか。

41 暁角　夜明けを知らせる角笛。

れは我が妻子のことだ。彼らはいまだ虢略にいる。もとより、俺の運命については知るはずがない。君が南から帰ったら、俺はすでに死んだと彼らに告げてもらえないだろうか。決して今日のことだけは明かさないでほしい。厚かましいお願いだが、彼らの孤弱を哀れんで、今後とも道塗[42]に飢凍することのないように計らっていただけるならば、自分にとって、恩幸[43]、これに過ぎたるはない。

言い終わって、叢中から慟哭（どうこく）の声が聞こえた。袁傪もまた涙を浮かべ、よろこんで李徴の意*にそいたい旨を答えた。李徴の声はしかしたちまちまた先刻の自嘲的な調子に戻って、言った。

本当は、まず、このことのほうを先にお願いすべきだったのだ、俺が人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを気にかけているような男だから、こんな獣に身を堕（お）とすのだ。

そうして、付け加えて言うことに、袁傪が嶺南からの帰途には決してこの道を通らないでほしい、その時には自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかもしれないから。また、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に登ったら、こちらを振り返って見てもらいたい。自分は今の姿をもう一度お目にかけよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、もって、再びここを過ぎて自分に会おうとの気持ちを君に起こ

42 道塗 道。道途。

43 恩幸 いっくしみ。恩恵。

〈手段〉〈孤弱〉〈飢凍〉

* 胸を焼く

* 意にそう

させないためであると。

袁傪は叢に向かって、ねんごろに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、また、堪え得ざるがごとき悲泣の声が漏れた。袁傪も幾度か叢を振り返りながら、涙の中に出発した。

一行が丘の上についた時、彼らは、言われたとおりに振り返って、先ほどの林間の草地を眺めた。たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼らは見た。虎は、すでに白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮[44]したかと思うと、また、元の叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

5

44 咆哮　ほえること。

―〈悲泣〉

中島　敦　一九〇九（明治四二）―四二（昭和一七）年。小説家。東京都に生まれた。持病のぜんそくのため短い生涯を終えた。中国古典に取材した作品が多く、優れた知性と格調高い文体によって、死後高く評価された。作品に『名人伝』『光と風と夢』『李陵』などがある。この作品は一九四二年に発表されたもので、本文は「中島敦全集」第一巻によった。

小説

こころ

夏目漱石（なつめそうせき）

東京の学校で学ぶ地方出身の青年が、ある夏、海岸で見いだした中年男性を「先生」と呼び、以後交際を重ねるうちに、人生の師として慕うようになった。やがて大学卒業後、故郷で重病の父を看病していた青年のもとに「先生」からの遺書が送られてくる。青年は危篤の父を置いて、東京行きの汽車に飛び乗った。遺書には「先生」の生い立ちと、自殺を覚悟するに至った事情が述べられていた。ここに採ったのは、その遺書の一部である。

資産家の両親を相次いで腸チフスで失った「私」（「先生」）は、両親が信頼した叔父による遺産管理のもと、上京し高等学校（旧制）に通う。同郷の友人Kと同居し、高校生活を送ったが、故郷の叔父が遺産をごまかしていたことを知り、財産を整理して故郷を捨てる。その後、財産を手に入れた「私」はKと離れ、素人下宿から大学に通うようになった。その家には軍人の未亡人である奥さんとそのお嬢さんがおり、「私」は二人と生活しているうちに、人を疑う気持ちをもちながらも、お嬢さんに対してひそかな恋心を抱くようになった。

Kは寺の次男で、医者の家に養子に出され、養家の資金で東京の高等学校に通っていた。「私」と同じ大学に進学するにあたり、養家の意向に反して別の道を進んでいることを自ら告げたため、養家からも実家からも見放され、学資はとだえた。Kは自活して、生活苦に耐えながらも自分の道を進みはじめた。そんな窮状を見た「私」は、奥さんを説得して、自分の下

宿に同居するようにはからい、物心両面から支援する。Kの大学生活は安定するが、「私」はKとお嬢さんとの親しみが増すにつれて、嫉妬心に苦しむようになっていった。

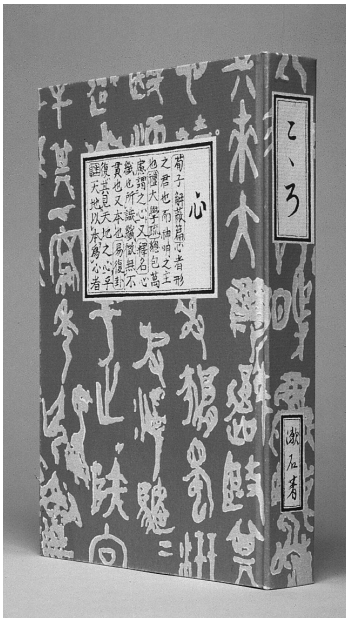
大学卒業の年の正月、Kは「私」の部屋にやってきて、折から外出している奥さんとお嬢さんのことを、あれこれ質問してやめようとしない。

Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話をやめませんでした。しまいには私も答えられないような立ち入ったことまで聞くのです。私はめんどうよりも不思議[1]の感に打たれました。以前私のほうから二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変わっているところに気がつかずにはいられないのです。私はとうとうなぜ今日に限ってそんなことばかり言うのかと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が震えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生(へいぜい)から何か言おうとすると、言う前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するようにたやすく開(あ)かないところに、彼の言葉の重みも籠もっていたのでしょう。いったん声が口*を破って出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元をちょっと眺めた時、私はまた何か出てくるなとすぐ感づいたのですが、それがはたしてなんの準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像してみてください。私は彼

1「不思議の感に打たれ」たのはなぜか。

〈注視〉〈平生〉〈予覚〉
＊口を破る



漱石が自ら装丁した『こころ』初版本

の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまったのです。

その時の私は恐ろしさの塊と言いましょうか、または苦しさの塊と言いましょうか、なにしろ一つの塊でした。石か鉄のように頭から足の先までが急に堅くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなったのです。幸いなことにその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐしまったと思いました。先を越されたなと思いました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起こりません。恐らく起こるだけの余裕がなかったのでしょう。私は腋の下から出る気味の悪い汗がシャツにしみとおるのをじっと我慢して動かずにいました。Kはその間いつものとおり重い口を切っては、ぽつりぽつりと自分の心を打ち明けてゆきます。私は苦しくってたまりませんでした。恐らくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上にはっきりした字で貼り付けられてあったろうと私は思うのです。いくらKでもそこに気のつかないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分のことに一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くてのろい代わりに、とても容易なことでは動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えずかき乱されていましたから、細かい点になるとほとんど耳へ入ら

ないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前言った苦痛ばかりでなく、時には一種の恐ろしさを感ずるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念がきざし始めたのです。

Kの話がひととおり済んだ時、私はなんとも言うことができませんでした。こっちも彼の前に同じ意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいるほうが得策だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたのではありません。ただ何事も言えなかったのです。また言う気にもならなかったのです。

昼飯の時、Kと私は向かい合わせに席を占めました。下女に給仕をしてもらって、私はいつにないまずい飯を済ませました。二人は食事中もほとんど口をききませんでした。奥さんとお嬢さんはいつ帰るのだか分かりませんでした。

＊

二人は各自（めいめい）の部屋に引き取ったぎり顔を合わせませんでした。Kの静かなことは朝と同じでした。私もじっと考え込んでいました。

私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思いました。しかしそれにはもう時機が遅れてしまったという気も起こりました。なぜさっきKの言葉を遮って、こっちから逆襲しなかったのか、そこが非常な手抜かりのように見えてきました。せめてKの後に続いて、自分は自分の思うとおりをその場で話してしまったら、まだよかったろうにとも考えました。Kの自白に一段落がついた今となって、こっちからまた同じことを切り出すのは、どう思案しても変でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかったのです。私の頭は悔恨に揺られてぐらぐらしました。

私はKが再び仕切りの襖（ふすま）を開けて向こうから突進してき

❷「先を越されたな」とあるが、「私」と「K」との関係はどのようなものであったといえるか。

❸「仕切りの襖」の描写にはどのような効果があるか。

〈分別〉〈時機〉

＊手抜かり

てくれればいいと思いました。私に言わせれば、さっきはまるで不意打ちにあったも同じでした。私にはKに応ずる準備も何もなかったのです。私は午前に失ったものを、今度は取り戻そうという下心を持っていました。それで時々目を上げて、襖を眺めました。しかしその襖はいつまでたっても開きません。そうしてKは永久に静かなのです。

そのうち私の頭はだんだんこの静かさにかき乱されるようになってきました。Kは今襖の向こうで何を考えているだろうと思うと、それが気になってたまらないのです。普段もこんなふうにお互いが仕切り一枚を間に置いて黙り合っている場合は始終あったのですが、私はKが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だったのですから、その時の私はよほど調子が狂っていたものと見なければなりません。それでいて私はこっちから進んで襖を開けることができなかったのです。いったん言いそびれた私は、また向こうから働きかけられる時機を待つよりほかにしかたがなかったのです。

しまいに私はじっとしておられなくなりました。無理にじっとしていれば、Kの部屋へ飛び込みたくなるのです。私はしかたなしに立って縁側へ出ました。そこから茶の間へ来て、なんという目的もなく、鉄瓶の湯を湯飲みについで一杯飲みました。それから玄関へ出ました。私はわざとKの部屋を回避するようにして、こんなふうに自分を往来の真ん中に見いだしたのです。私には無論どこへ行くというあてもありません。ただじっとしていられないだけでした。それで方角も何も構わずに、正月の町を、むやみに歩き回ったのです。私の頭はいくら歩いてもKのことでいっぱいになっていました。私もKを振るい落とす気で歩き回るわけではなかったのです。むしろ自分から進んで彼の姿を咀嚼しながらうろついていたのです。

私には第一に彼が解しがたい男のように見えました。どうしてあんなことを突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けなければいられないほどに、彼の恋が募ってきたのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は彼の強いことを知っていました。また彼の真面目なことを知って

いました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くを持っていると信じました。同時にこれから先彼を相手にするのが変に気味が悪かったのです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の部屋にじっと座っている彼の容貌を始終目の前に描き出しました。しかもいくら私が歩いても彼を動かすことはとうていできないのだという声がどこかで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物[4]のように思えたからでしょう。私は永久彼に祟られたのではなかろうかという気さえしました。

私が疲れてうちへ帰った時、彼の部屋は依然として人気のないように静かでした。

＊

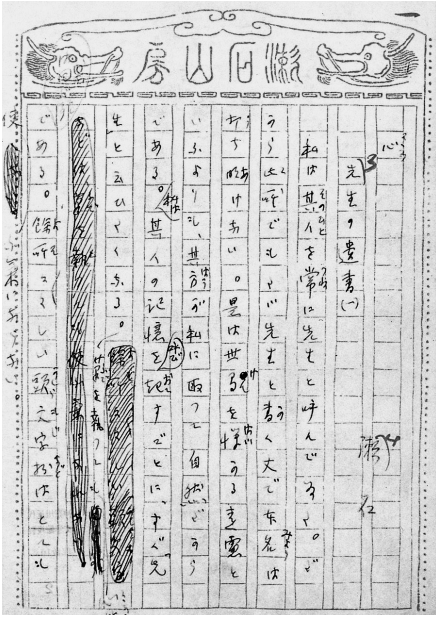
私がうちへ入ると間もなく俥[1]の音が聞こえました。今のように護謨輪のない時分でしたから、がらがらいう嫌な響きがかなりの距離でも耳に立つのです。俥はやがて門前で止まりました。

私が夕飯に呼び出されたのは、それから三十分ばかりたった後のことでしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴れ着が脱ぎ捨てられたまま、次の部屋を乱雑に彩っていました。二人は遅くなると私たちにすまないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰ってきたのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とにとってほとんど無効も同じことでした。私は食卓に座りながら、言葉を惜しがる人のように、そっけない挨拶ばかりしていました。Kは私よりもなお寡言でした。たまに親子連れで外出した女二人の気分が、また平生よりはすぐれて晴れやかだったので、我々の態度はなおのこと目につきます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持ちが悪いと答えました。実際私は心持ちが悪かったのです。すると今度はお嬢さん

〈容貌〉〈寡言〉

1 俥　人力車。当初は木輪だったが、しだいにゴム輪のものが普及した。

4 「魔物のように思えた」のはなぜか。



「こころ」直筆原稿

がKに同じ問いを掛けました。Kは私のように心持ちが悪いとは答えません。ただ口がききたくないからだと言いました。お嬢さんはなぜ口がききたくないのかと追窮しました。私はその時ふと重たいまぶたを上げてKの顔を見ました。私にはKがなんと答えるだろうかという好奇心があったのです。Kの唇は例のように少し震えていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷っているとしか思われないのです。お嬢さんは笑いながらまた何かむずかしいことを考えているのだろうと言いました。Kの顔は心持ち薄赤くなりました。

その晩私はいつもより早く床へ入りました。私が食事の時気分が悪いと言ったのを気にして、奥さんは十時ごろ蕎麦湯を持ってきてくれました。しかし私の部屋はもう真っ暗でした。奥さんはおやおやと言って、仕切りの襖を細目に開けました。ランプの光がKの机から斜めにぼんやりと私の部屋に差し込みました。Kはまだ起きていたものと見えます。奥さんは枕元に座って、おおかた風邪を引いたのだろうから体を暖ためるがいいと言って、湯飲みを顔のそばへ突きつけるのです。私はやむを得ず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。

私は遅くなるまで暗い中で考えていました。無論一つ問題をぐるぐる回転させるだけで、他になんの効力もなかったのです。私は突然Kが今隣の部屋で何をしているだろうと思い出しました。私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向こうでもおいと返事をしました。Kもまだ起

きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖越しに聞きました。もう寝るという簡単な挨拶がありました。何をしているのだと私は重ねて問いました。今度はKの答えがありません。その代わり五、六分たったと思う頃に、押し入れをがらりと開けて、床を延べる音が手*に取るように聞こえました。私はもう何時かとまた尋ねました。Kは一時二十分だと答えました。やがてランプをふっと吹き消す音がして、うちじゅうが真っ暗なうちに、しんと静まりました。

しかし私の目はその暗い中でいよいよさえてくるばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝彼から聞いたことについて、もっと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこっちから切り出しました。私は無論襖越しにそんな談話を交換する気はなかったのですが、Kの返答だけは即座に得られることと考えたのです。ところがKはさっきから二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直な調子で、今度は応じません。そうだなあと低い声で渋っています。私はまた[5]はっと思わせられました。

＊

Kの生返事は翌日になっても、その翌日になっても、彼の態度によく現れていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色をけっして見せませんでした。もっとも機会もなかったのです。奥さんとお嬢さんがそろって一日うちを空けでもしなければ、二人はゆっくり落ち着いて、そういうことを話し合うわけにもいかないのですから。私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果初めは向こうから来るのを待つつもりで、暗に用意をしていた私が、折があったらこっちで口を切ろうと決心するようになったのです。

[5]「はっと思わせられ」たのはなぜか。

〈生返事〉
＊やむを得ず
＊手に取るように

同時に私は黙ってうちのものの様子を観察してみました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振りにも、別に平生と変わった点はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝心の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは確かでした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会をこしらえて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにするほうがよかろうと思って、例の問題にはしばらく手を着けずにそっとしておくことにしました。

こう言ってしまえばたいへん簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮の満ち干と同じように、いろいろの高低(たかびく)があったのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現れているとおりなのだろうかと疑ってもみました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のように、明瞭に偽りなく、盤[6]上の数字を指し得(う)るものだろうかと考えました。要するに私は同じことをこうも取り、ああも取りしたあげく、ようやくここに落ち着いたものと思ってください。さらにむずかしく言えば、落ち着くなどという言葉は、この際けっして使われた義理でなかったのかもしれません。

そのうち学校がまた始まりました。私たちは時間の同じ日には連れ立ってうちを出ます。都合がよければ帰る時にもやはりいっしょに帰りました。外部から見たKと私は、なんにも前と違ったところがないように親しくなったのです。けれども腹の中では、各自(てんでん)に各自(てんでん)のことを勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往来でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんにも通じているかの点にあったのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答え次第できめなければならないと、私は思ったのです。すると彼は他の人にはまだ誰にも打ち明けていないと明言しました。私は事情が自分の推察どお

りだったので、内心うれしがりました。私はKの私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にもかなわないという自覚があったのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資のことで養家を三年も欺いていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損なわれていなかったのです。私はそれがためにかえって彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起こりようがなかったのです。

私はまた彼に向かって、彼の恋をどう取り扱うつもりかと尋ねました。それが単なる自白に過ぎないのか、またはその自白についで、実際的の効果をも収める気なのかと問うたのです。しかるに彼はそこになると、なんにも答えません。黙って下を向いて歩き出します。私は彼に隠し立てをしてくれるな、すべて思[7]ったとおりを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないとはっきり断言しました。しかし私の知ろうとする点には、一言（いちごん）の返事も与えないのです。私も往来だからわざわざ立ち止まってそこまで突き止めるわけにいきません。ついそれなりにしてしまいました。

＊

ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓からさす光線を半身（はんしん）に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引っ繰り返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べてこいと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見つからないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければなりませんでした。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向こう側から小さな声で私の名を呼ぶものがあります。私はふと目を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近づけました。ご承知

〈挙動〉〈肉薄〉〈横着〉

6「盤上の数字を指し得るものだろうか」とはどのようなことか。

7「思ったとおりを話してくれと頼」んだのはなぜか。

のとおり図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をするわけにはゆかないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通のことなのですが、私はその時に限って、一種変な心持ちがしました。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちょっと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から離しません。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかと言うのです。私は少し待っていればしてもいいと答えました。彼は待っていると言ったまま、すぐ私の前の空席に腰を下ろしました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりました。なんだかKの胸に*一物があって、談判でもしにこられたように思われてしかたがないのです。私はやむを得ず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ち着き払ってもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すとともに、Kと図書館を出ました。

二人は別に行く所もなかったので、[2]竜岡町から[3]池の端へ出て、[4]上野の公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向こうから口を切りました。前後の様子を総合して考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引っ張り出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ実際的の方面へ向かってちっとも進んでいませんでした。彼は私に向かって、ただ漠然と、どう思うと言うのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵に陥った彼を、どんな目で私が眺めるかという質問なのです。一言で言うと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼[8]の平生と異なる点を確かに認めることができたと思いました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他の思わくをはばかるほど弱くできあがってはいなかったのです。こうと信じたら一人でどんどん進んでゆくだけの度胸もあり勇気もある男なのです。[5]養家事件でその特色を強く胸のうちに彫り付けられた私が、これは様子が違うと明らかに意識したのは当然の結果なのです。

私がKに向かって、この際なんで私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいと言いました。そ

うして迷っているから自分で自分が分からなくなってしまったので、私に公平な批評を求めるより他にしかたがないと言いました。私はすかさず迷うという意味を聞きただしました。彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰まりました。彼はただ苦しいと言っただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、その渇き切った顔の上に慈雨のごとく注いでやったか分かりません。私はそのくらいの美しい同情を持って生まれてきた人間と自分ながら信じています。しかしその時の私は違っていました。

＊

2 竜岡町　東京都文京区にあった町名（当時は東京市本郷区）。**の公園**　東京都台東区にある上野恩賜公園（当時は下谷（したや）区）。**5 養家事件**　「K」が養家の方針にさからって医学の道に進まず、文科系の大学へと通っていたことが明らかとなり、離籍された事件のこと。一五八ページ参照。**3 池の端**　上野・不忍池（しのばずのいけ）畔の一帯。**4 上野**〈所作〉＊胸に一物

8「彼の平生」とはどのようなものか。

当時の本郷周辺略図

私はちょうど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の目、私の心、私の体、すべて私という名のつくものを五分の隙間もないように用意して、Kに向かったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している[9]要塞の地図を受け取って、彼の目の前でゆっくりそれを眺めることができたも同じでした。

Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打ちで彼を倒すことができるだろうという点にばかり目をつけました。そうしてすぐ彼の虚につけ込んだのです。私は彼に向かって急に厳粛な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分もあったのですから、自分に滑稽だの羞恥だのを感ずる余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものは馬鹿だ。」と言い放ちました。これは二人で房州[6]を旅行している際、Kが私に向かって使った言葉です。私は彼の使ったとおりを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかしけっして復讐ではありません。私は復讐以上に残酷な意味を持っていたということを自白します。私はその一言でKの前に横たわる恋の行く手を塞ごうとしたのです。

Kは真宗寺[7]に生まれた男でした。しかし彼の傾向は中学時代からけっして生家の宗旨に近いものではなかったのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんなことを言う資格に乏しいのは承知していますが、私はただ男女に関係した点についてのみ、そう認めていたのです。Kは昔から精進という言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁欲という意味もこもっているのだろうと解釈していました。しかし後で実際を聞いてみると、それよりもまだ厳重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのですから、摂欲や禁欲は無論、たとい欲を離れた恋そのものでも道の妨害になるのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃からお嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反

対しなければならなかったのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑のほうが余計に現れていました。

こういう過去を二人の間に通り抜けてきているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kにとって痛いに違いなかったのです。しかし前にも言ったとおり、私はこの一言で、彼がせっかく積み上げた過去を蹴散らしたつもりではありません。かえってそれを今までどおり積み重ねてゆかせようとしたのです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ。」

私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にどう影響するかを見つめていました。

「馬鹿だ。」とやがてKが答えました。「僕は馬鹿だ。」

Kはぴたりとそこへ立ち止まったまま動きません。彼は地面の上を見つめています。私は思わずぎょっとしました。私にはKがその刹那に居直り強盗のごとく感ぜられたのです。しかしそれにしては彼の声がいかにも力に乏しいということに気がつきました。私は彼の目づかいを参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないのです。そうして、そろそろとまた歩き出しました。

＊

私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。あるいは待ち伏せと言ったほうがまだ適当かもしれません。その時の私はたとい Kをだまし打ちにしても構わないくらいに思っていたのです。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私のそばへ来て、おまえは卑怯だと一言ささやいてくれ

6 房州 千葉県の南部、旧国名・安房の異称。 **7 真宗寺** 浄土真宗の寺。浄土真宗は、親鸞（一一七三―一二六二年）を開祖とする仏教の一派。妻帯を認め、自力の修行によらず阿弥陀仏の本願の力にすがることを説く。

9「要塞の地図」ということばから、「私」のどのような気持ちがうかがえるか。

〈滑稽〉〈宗旨〉〈侮蔑〉〈刹那〉〈卑怯〉

るものがあったなら、私はその瞬間に、はっと我に立ち返ったかもしれません。もしKがその人であったなら、私はおそらく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私をたしなめるにはあまりに正直でした。あまりに単純でした。あまりに人格が善良だったのです。目*のくらんだ私は、そこに敬意を払うことを忘れて、かえってそこにつけ込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。

Kはしばらくして、私の名を呼んで私のほうを見ました。今度は私のほうで自然と足を止めました。するとKも止まりました。私はその時やっとKの目を真向きに見ることができたのです。Kは私より背の高い男でしたから、私は勢い彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼(おおかみ)のごとき心を罪のない羊に向けたのです。「もうその話はやめよう。」と彼が言いました。彼の目にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちょっと挨拶ができなかったのです。するとKは、「やめてくれ。」と今度は頼むように言い直しました。私はその時彼に向かって残酷な答えを与えたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛(のどぶえ)へ食らいつくように。

「やめてくれって、僕が言い出したことじゃない、もともと君のほうから持ち出した話じゃないか。しかし君がやめたければ、やめてもいいが、ただ口の先でやめたってしかたがあるまい。君の心でそれをやめるだけの覚悟がなければ。いったい君は君[10]の平生の主張をどうするつもりなのか。」

私がこう言った時、背の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました。彼はいつも話すとおりすこぶる強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、けっして平気でいられないたちだったのです。私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は卒然「覚悟?」と聞きました。そうして私がまだなんとも答えない先に「覚悟、――覚悟ならないこともない。」と付け加えました。彼の調子は独り言のようでした。また夢の中の言葉のようでした。

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川[8]の宿のほうに足

を向けました。わりあいに風のない暖かな日でしたけれども、なにしろ冬のことですから、公園の中は寂しいものでした。ことに霜に打たれて青みを失った杉の木立の茶褐色が、薄黒い空の中に、梢を並べてそびえているのを振り返って見た時は、寒さが背中へかじりついたような心持ちがしました。我々は夕暮れの本郷台[9]を急ぎ足でどしどし通り抜けて、また向こうの岡へ登るべく小石川の谷へ下りたのです。私はその頃になって、ようやく外套の下に体の温かみを感じ出したくらいです。

急いだためでもありましょうが、我々は帰り道にはほとんど口をききませんでした。うちへ帰って食卓に向かった時、奥さんはどうして遅くなったのかと尋ねました。私はKに誘われて上野へ行ったと答えました。奥さんはこの寒いのにと言って驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があったのかと聞きたがります。私は何もないが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生から無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑っても、ろくな挨拶はしませんでした。それから飯を飲み込むようにかき込んで、私がまだ席を立たないうちに、自分の部屋へ引き取りました。

＊

その頃は覚醒とか新しい生活とかいう文字のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出すことのできないほど尊い過去があったからです。彼はそのために今日まで生きてきたと言ってもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向かって猛進しないと言って、けっしてその愛の生ぬるいことを証拠立てるわけにはゆきません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼はむや

8 小石川　東京都文京区の一部。同区は当時、小石川区・本郷区の二区に分かれていた。東は上野・谷中に接する一帯の台地。

9 本郷台　西は小石川、

10「君の平生の主張」とはどのようなものか。

〈萎縮〉〈卒然〉

＊目がくらむ

みに動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起こる機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちょっと踏みとどまって自分の過去を振り返らなければならなかったのです。そうすると過去が指し示す道を今までどおり歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人の持たない強情と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

上野から帰った晩は、私にとって比較的安静な夜でした。私はKが部屋へ引き上げたあとを追いかけて、彼の机のそばに座り込みました。そうして取りとめもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の目には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声には確かに得意の響きがあったのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手をかざした後、自分の部屋に帰りました。他のことにかけては何をしても彼に及ばなかった私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に対して持っていたのです。

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で目を覚ましました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、そこに[11]Kの黒い影が立っています。そうして彼の部屋には宵のとおりまだあかりがついているのです。急に世界の変わった私は、少しの間口をきくこともできずに、ぼうっとして、その光景を眺めていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向かって、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思って、便所へ行ったついでに聞いてみただけだと答えました。Kはランプの灯を背中に受けているので、彼の顔色や目つきは、全く私には分かりませんでした。けれども彼の声は普段よりもかえって落ち着いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をぴたりと立て切りました。私の部屋はすぐ元の暗闇に帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた目を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝になって、昨夕のことを考えてみると、なんだか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思いました。それで飯を食う時、Kに聞きまし

た。Kは確かに襖を開けて私の名を呼んだと言います。なぜそんなことをしたのかと尋ねると、別にはっきりした返事もしません。調子の抜けた頃になって、近頃は熟睡ができるのかとかえって向こうから私に問うのです。私はなんだか変に感じました。

その日はちょうど同じ時間に講義の始まる時間割になっていたので、二人はやがていっしょにうちを出ました。今朝から昨夕のことが気にかかっている私は、途中でまたKを追窮しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかったのかと念を押してみました。Kはそうではないと強い調子で言い切りました。昨日上野で「その話はもうやめよう。」と言ったではないかと注意するごとくにも聞こえました。Kはそういう点にかけて鋭い自尊心を持った男なのです。ふとそこに気のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで気にならなかったその二字が妙[12]な力で私の頭を抑え始めたのです。

＊

Kの果断に富んだ性格は私によく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔なわけも私にはちゃんと飲み込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしっかりつらまえ[11]たつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭の中で何遍も咀嚼しているうちに、私の得意はだんだん色を失って、しまいにはぐらぐら動き始めるようになりました。私はこの場合もあるいは彼にとって例外でないのかもしれないと思い出したのです。すべての疑惑、煩悶（はんもん）、懊悩（おうのう）、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸の中に畳み込んでいるのではなかろうかとうたぐり始めたのです。そうした新しい光で覚悟の二

10 尺　長さの単位。一尺は、約三〇センチメートル。　**11 つらまえた**　つかまえた、に同じ。

11「Kの黒い影」という表現にはどのような効果があるか。　〈暗闇〉〈果断〉

12「妙な力で私の頭を抑え始めた」とはどのようなことか。

字を眺め返してみた私は、はっと驚きました。その時の私がもしこの驚きをもって、もう一遍彼の口にした覚悟の内容を公平に見回したらば、まだよかったかもしれません。悲しいことに私はめっかちでした。私はただKがお嬢さんに対して進んでゆくという意味にその言葉を解釈しました。果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に発揮されるのがすなわち彼の覚悟だろうといちずに思い込んでしまったのです。

私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起こしました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟をきめました。私は黙って機会をねらっていました。しかし二日たっても三日たっても、私はそれをつらまえることができません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待って、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといったふうの日ばかり続いて、どうしても「今だ。」と思う好都合が出てきてくれないのです。私はいらいらしました。

一週間の後私はとうとう堪え切れなくなって仮病をつかいました。奥さんからもお嬢さんからも、K自身からも、起きろという催促を受けた私は、生返事をしただけで、十時ごろまで布団をかぶって寝ていました。私はKもお嬢さんもいなくなって、家の中がひっそり静まった頃を見計らって寝床を出ました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食べ物は枕元へ運んでやるから、もっと寝ていたらよかろうと忠告してもくれました。体に異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を洗っていつものとおり茶の間で飯を食いました。その時奥さんは長火鉢の向こう側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯とも昼飯とも片づかない茶椀を手に持ったまま、どんなふうに問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈託していたから、外観からは実際気分のよくない病人らしく見えただろうと思います。

私は飯をしまってたばこを吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢のそばを離れるわけにゆきません。下女を呼んで膳を下げさせた上、鉄瓶に水をさしたり、火

鉢の縁を拭いたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいいえと答えましたが、今度は向こうでなぜですと聞き返してきました。私は実は少し話したいことがあるのだと言いました。奥さんはなんですかと言って、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分に入り込めないような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し渋りました。

私はしかたなしに言葉の上で、いい加減にうろつき回った末、Kが近頃何か言いはしなかったかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思いもよらないというふうをして、「何を?」とまた反問してきました。そうして私の答える前に、「あなたには何かおっしゃったんですか。」とかえって向こうで聞くのです。

＊

Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のなかった私は、「いいえ。」と言ってしまった後で、すぐ自分のうそを快からず感じました。しかたがないから、別段何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだと言い直しました。奥さんは「そうですか。」と言って、後を待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「奥さん、お嬢さんを私にください。」と言いました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでしたが、それでもしばらく返事ができなかったものと見えて、黙って私の顔を眺めていました。一度言い出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしていられません。「ください、ぜひください。」と言いました。「私の妻としてぜひください。」と言いました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずっと落ち着いていました。「あげてもいいが、あんまり急じゃありませんか。」と聞くのです。私が「急にもらいたいのだ。」とすぐ答えたら笑い出しました。そうして